長野市の埋蔵文化財第17集

浅川扇状地遺跡群

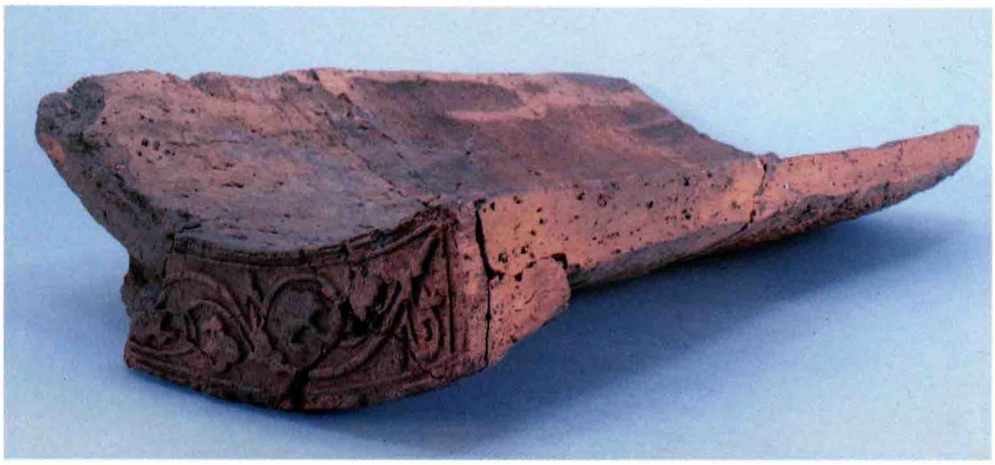
―牟礼バイパスB・C・D地点―

1986・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

C地点溝出土、軒丸瓦

D地点出土、軒平瓦



D地点5号住居址出土、軒平瓦

序

私どもの日々の生活は、一人ひとりの事情とは直接かかわりなく、大きな時代の流れの中で少しずつ変化し、気付いてみると予想だにできなかったほど複雑な社会の仕組みの中で営なまれていることに驚きさえ感じます。それは、私どもの生活の舞台が広がり、活動の範囲が交通機関の発達とともに遠くまで展開していったことに原因の一つがあるように思われます。

明治21年に信越線が長野盆地に開通して以来約90年、この間に網の目のように広がった交通機関は、日本中どこへ行こうが一日で到着できるほどに整備され、殊更に高速交通網の重要性が注目されるようになりました。

いっぽう、生活圏の整備が進み経済活動が盛んになると、周辺の村や町と都市とを結ぶ道路の重要性は、単に経済活動に止まらず、その地域に居住する人々の生活文化全体に強い影響を及ぼすほどになって来ました。そのため、新たな道路の開設や整備の必要性が高まり、郊外へ向けての幹線の整備は年々増大することは時代の趨勢となっています。ところが、そのために開設される地域は、古代以来私たちの祖先が生活の場として利用して来た跡、いわゆる埋蔵文化財の多く残されている場合が多く、そのため開発と保存との相容れない立場の調整を進めなければならない行政当局の苦難は計り知れないものがあります。この中にあって最小限度の発掘調査で最大限の効果をあげる姿勢を守るため、関係者の協力を仰ぎ、英知を集めて対処して来たところです。

今回ここにその埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の結果を報告する遺跡は、県道長野～荒瀬原線の開発のために実施された工事に伴う地域全般に広がる遺跡で、そこには古代以来、この地方の風土に合わせた生活を送って来た先人の残した貴重な遺跡でした。ここから発掘された万余の資料の中には、初めて学術調査により確認された、いわゆる“善光寺瓦”と呼ばれる布目瓦の発見もあり斯界の注目を集めたところでした。

長い歴史の中で、各地域に広げられた先人の生活の様子を少しでも多く知るということは、単に懐古の情を満たすに止めず、その時代の人々の自然とのかかわりの深さや人と人とのつながりを知るために貴重な資料であり、この中から未来への文化を求めていける貴重な文化遺産といえます。この調査のため御協力いただいた地元のみなさんの勉強ぶり、熱心さは筆舌に盡し難いほどの盛り上りで、発掘に必要な細心な気遣いが十分に生かされたこと感謝申し上げます。そして直接発掘指導に当たられた遺跡調査会の調査員の努力と、地元を上げての御協力に報いるため、この報告書が広く活用され、学問の発展に寄与できることを望んでやみません。

昭和61年3月20日

長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会会長　　奥村　秀雄

例　　言

1　本書は「住宅宅地関連公共施設促進事業、主要地方道長野荒瀬原線建設」用地内B・C・D地点の発掘調査報告書である。各地点は昭和56年調査のA地点とともに新発見遺跡に含まれ、遺跡名は浅川扇状地遺跡群通称「牟礼バイパスA～D地点」とする。（なお、遺跡群・遺跡名については第II章において検討されている）

2　調査は長野建設事務所と長野市教育委員会の協議に基づき、長野市遺跡調査会が担当した。

3　本書の構成は下記の要領による。

①　第III～V章において、各地点毎に時代区分を設定し、区分に従い遺構の説明を行った。遺構内出土遺物に関しては位置関係と出土状況について記述した。

②　第VI章において、全地点の出土遺物を時代区分毎に統合して遺物各説とした。各遺物の詳細は、観察表として提示した。

③　第VII章において、遺物特記事項につき詳説し、まとめにかえた。

④　遺構図は1：60を基本とし、微細図を1：30とした。スクリーン部分はカマド、焼土、炭化物範囲、ドットは遺物出土位置を示し、ピットに伴う数字は深さ、ドットに伴う数字は遺物番号、断面水糸線上数字は標高を示す。■印のドットは瓦を表す。

⑤　遺物実測図は次の縮尺に統一した。土器・瓦－1：4、石器－2：3、1：3
スクリーンで黒色処理を示した。　石製品－2：3、土製品、金属製品－1：2
遺物には各時代製品別に通し番号を付し、写真図版番号もこれに合致させた。

4　調査は矢口の指導に基づき青木が総括し、記録は各調査員が分担した。

5　整理における調査員の分担は下記のとおりである。

遺構図、瓦－青木
弥生土器、古墳前期土器、石器、土製品、石製品、金属製品－田中
古墳中・後期土器－横山
平安時代土器－中殿
遺物写真－山口

6　各章の執筆は調査員の分担に従い、文責を文末に記した。なお下記のとおり執筆を依頼し、それぞれ玉稿を賜った。各氏の御厚情に感謝申し上げたい。

第II章－1　和田　博（長野市立博物館専門主事）
第II章－2　原田勝美　（日本考古学協会員）
第VII章－3　山口純一（長野市立博物館副館長）

7　調査の諸記録及び遺物は長野市立博物館において保管している。

目　　次

序
例言
第Ⅰ章　調査の経過と方法
1　調査経過……1
2　発掘調査の方法……2
3　調査会及び調査団……2
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境
1　地理的環境……4
2　歴史的環境……5
第Ⅲ章　B地点の調査
1　概要……13
2　古墳時代中期の遺構……17
1号住　3号住　4号住　12号住
13号住　14号住　15号住　17号住
3　古墳時代後期の遺構……19
6号住　8号住　9号住　1号溝
4　平安時代の遺構……29
2号住　5号住　7号住　10号住　11号住　16号住
18号住　19号住　20号住　21号住　22号住　23号住
1号土壙　2号土壙　2号溝
第Ⅳ章　C地点の調査
1　概要……39
2　遺構……39
1号住　2号住　3号住　土壙　溝　土壙墓
第Ⅴ章　D地点の調査
1　概要……50
2　弥生時代中期の遺構……56
1号住　2号住　16号住　17号住　1号土壙
3　古墳時代前期の遺構……57
3号住　4号住

4　平安時代の遺構 ……61
5号住　6号住　7号住　8号住　9号住　10号住
11号住　12号住　13号住　14号住　15号住　集石土壙　他
第VI章　遺物各説
1　縄文時代～弥生時代
(1)　石器（B～D地点）……72
(2)　弥生土器（D地点）……76
2　古墳時代前期
土師器（D地点）……86
3　古墳時代中期
(1)　土器（B地点）……88
①土師器　②須恵器　③土師器の彩色
(2)　土製品（B地点）……108
(3)　石製品（B・D地点）……108
4　古墳時代後期
土師器（B地点）……113
5　平安時代（B・D地点）
(1)　土器 ……115
①土師器　②須恵器　③灰釉陶器　④坏の法量比　⑤土器構成と様相
(2)　金属製品 ……148
(3)　瓦 ……148
6　平安時代～中世（C地点）
(1)　土器 ……161
①土師器　②灰釉陶器　③B・D地点との比較
(2)　金属製品 ……168
(3)その他の遺物 ……168
第VII章　調査のまとめ
1　古墳時代中期須恵器について ……170
2　平安時代における搬入土器について ……172
3　いわゆる善光寺瓦について ……174
参考文献 ……186

図　目　次

図１　遺跡周辺の地形……6
図２　Ｂ地点周辺の地形と調査位置……8
図３　Ｃ地点周辺の地形と調査位置……9
図４　Ｄ地点周辺の地形と調査位置……10
遺　構　図　　Ｂ　地点
図５　Ｂ地点遺構配置図……（11・12）
図６　Ｂ地点全測図(１)……14
図７　Ｂ地点全測図(２)……15
図８　Ｂ地点全測図(３)……16
古墳中期
図９　Ｂ地点１号住居址実測図……20
図10　Ｂ地点３号住居址実測図……21
図11　Ｂ地点３号住居址カマド、４号住居址実測図……22
図12　Ｂ地点12号住居址実測図……23
図13　Ｂ地点13号住居址、15号住居址実測図……24
図14　Ｂ地点14号住居址、17号住居址カマド実測図……25
図15　Ｂ地点17号住居址実測図……26
古墳後期
図16　Ｂ地点８号住居址、同カマド実測図……27
図17　Ｂ地点６号住居址、９号住居址実測図……28
平安時代
図18　Ｂ地点２号住居址、10号住居址実測図……32
図19　Ｂ地点５号住居址、同カマド実測図……33
図20　Ｂ地点７号住居址、同カマド実測図……34
図21　Ｂ地点11号住居址、同カマド、16号住居址、同カマド実測図……35
図22　Ｂ地点18号住居址、同カマド、19・20住居址、20号住居址カマド実測図……36
図23　Ｂ地点21号住居址、同カマド、22号住居址、同カマド実測図……37
図24　Ｂ地点23号住居址、同カマド、１・２号土壙実測図……38
遺　構　図　　Ｃ　地　点
図25　Ｃ地点遺構配置図……（41・42）
図26　Ｃ地点全測図……43

図27　C地点1号住居址、2号住居址実測図 ……44
図28　C地点3号住居址、土壙墓実測図 ……45
図29　C地点1～7・15号土壙実測図 ……46
図30　C地点8～14号土壙実測図 ……47
図31　C地点溝実測図(1) ……48
図32　C地点溝実測図(2) ……49

遺　構　図　　D　地　点

図33　D地点遺構配置図 ……(51・52)
図34　D地点全測図(1) ……53
図35　D地点全測図(2) ……54
図36　D地点全測図(3) ……55
弥生中期
図37　D地点1号住居址、2号住居址実測図 ……58
図38　D地点16号住居址、17号住居址、1号土壙実測図 ……59
古墳時代
図39　D地点3号住居址、4号住居址実測図 ……60
平安時代
図40　D地点5号住居址、6号住居址実測図 ……64
図41　D地点7号住居址、9号住居址実測図 ……65
図42　D地点8号住居址、同カマド実測図 ……66
図43　D地点10号住居址、11号住居址実測図 ……67
図44　D地点12号住居址、15号住居址、同カマド実測図 ……68
図45　D地点13号住居址、同カマド実測図 ……69
図46　D地点14号住居址、同カマド実測図 ……70
図47　D地点掘り込み遺構、集石土壙実測図 ……71

遺　物　図

縄文・弥生中期
図48　B・C・D地点出土石器(1) ……74
図49　B・C・D地点出土石器(2) ……75
図50　D地点1号住、2号住出土土器 ……81
図51　D地点2号住出土土器（拓影） ……82
図52　D地点16号住、17号住、1号土壙出土土器 ……83
図53　D地点17号住出土土器（拓影） ……84
図54　D地点検出面出土土器 ……85

古墳前期

図 55　D地点 3 号住、 4 号住出土土器 ……87

古墳中期

図 56　B地点 1 号住、 3 号住(1)出土土器 ……99
図 57　B地点 3 号住(2)出土土器 ……100
図 58　B地点 3 号住(3)出土土器 ……101
図 59　B地点 4 号住出土土器 ……102
図 60　B地点 12 号住、13 号住出土土器 ……103
図 61　B地点 14 号住(1)出土土器 ……104
図 62　B地点 14 号住(2)出土土器 ……105
図 63　B地点 14 号住(3)、15 号住、 1 号溝、検出面出土土器 ……106
図 64　B地点 17 号住、3 号住(4)出土土器 ……107
図 65　B地点出土小形手捏土器、土製品 ……111
図 66　B・D 地点出土石製品 ……112

古墳後期

図 67　B地点 6 号住、 8 号住、検出面出土土器 ……114

平安時代

図 68　B地点 2 号住、10 号住、16 号住、18 号住 ……130
図 69　B地点 5 号住出土土器 ……131
図 70　B地点 7 号住出土土器 ……132
図 71　B地点 11 号住出土土器 ……133
図 72　B地点 20 号住、22 号住出土土器 ……134
図 73　B地点 21 号住出土土器 ……135
図 74　B地点 23 号住出土土器 ……136
図 75　B地点 1 号土壙、 2 号壙、 8 号住南西隅、 2 号溝、検出面出土土器 ……137
図 76　D地点 5 号住出土土器 ……138
図 77　D地点 6 号住、 7 号住出土土器 ……139
図 78　D地点 8 号住出土土器 ……140
図 79　D地点 9 号住、10 号住出土土器 ……141
図 80　D地点 11 号住、13 号住(1)出土土器 ……142
図 81　D地点 13 号住(2)出土土器 ……143
図 82　D地点 12 号住出土土器 ……144
図 83　D地点 14 号住出土土器 ……145
図 84　D地点 15 号住出土土器 ……146

図 85　D地点掘り込み遺構、集石土壙、検出面出土土器 ……147
図 86　B・D地点出土金属製品 ……152
図 87　C・D地点出土軒丸瓦、丸瓦 ……153
図 88　D地点出土軒平瓦(1) ……154
図 89　D地点出土軒平瓦(2) ……155
図 90　D地点出土軒平瓦(3) ……156
図 91　D地点出土軒平瓦(4)、平瓦(1) ……157
図 92　D地点出土平瓦(2) ……158
図 93　D地点出土平瓦(3) ……159
図 94　D地点出土平瓦(4) ……160
平安～中世
図 95　C地点1号住出土土器 ……165
図 96　C地点2号住、3号住、溝出土土器 ……166
図 97　C地点土壙、検出面出土土器 ……167
図 98　C地点出土金属製品他 ……169
集　成　図
図 99　B地点出土古墳時代須恵器集成 ……171
図 100　B・D地点出土灰釉陶器、ハケ甕、武蔵型甕集成 ……173
図 101　軒瓦瓦当面集成 ……177
参　考　図
図 102 徳間遺跡(1)出土土器……178
図 103 徳間遺跡(2)、迎田遺跡出土土器…179
図 104 A地点2号住出土土器……180
図 105 A地点1号住・土壙出土土器……181
図 106 小島境遺跡出土土器(1)……182
図 107 小島境遺跡出土土器(2)……183
図 108 小島境遺跡出土土器(3)……184
図 109 小島境遺跡出土土器(4)……185

表　目　次

表 1　縄文・弥生石器観察表……73
表 2　弥生土器観察表……79・80
表 3　古墳前期土器観察表……86
表 4　古墳中期土器観察表……91～98
表 5　小形手捏土器・土製品観察表109・110
表 6　石製品観察表……110
表 7　古墳後期土器観察表……113
表 8　平安時代遺構別器種構成表……118
表 9　平安時代土器観察表……119～129
表 10　平安時代金属製品観察表……150
表 11　遺構別瓦出土状況……150
表 12　瓦観察表……151
表 13　C地点平安時代土器観察表…162～164
表 14　C地点金属製品他観察表……168

図版目次

図版 1　遺跡周辺の地形
図版 2　B地点全景、北半全景
図版 3　B地点南半全景
図版 4　B地点 1 ・ 2 号住居址
図版 5　B地点 3 号住居址
図版 6　B地点 4 ・ 5 号住居址
図版 7　B地点 5 号住居址
図版 8　B地点 6 ・ 7 号住居址
図版 9　B地点 7 ・ 8 号住居址
図版 10　B地点 8 ～10 号住居址
図版 11　B地点 11・13 号住居址
図版 12　B地点 12・14 号住居址
図版 13　B地点 15・16・18・21 号住居址
図版 14　B地点 17・20・22 号住居址
図版 15　B地点 23 号住居址
図版 16　C地点全景、 1 号住居址
図版 17　C地点 1 ～ 3 号住居址
図版 18　C地点土壙、溝
図版 19　C地点溝
図版 20　C地点溝、土壙墓
図版 21　D地点 59 年度調査全景
図版 22　D地点 59 年度調査全景、1 号住居址
図版 23　D地点 2 号住居址
図版 24　D地点 3 ・ 4 号住居址
図版 25　D地点集石土壙、土壙
図版 26　D地点掘り込み遺構、溝
図版 27　D地点軒平瓦、ピット群
図版 28　D地点 60 年度調査全景
図版 29　D地点 60 年度調査全景
図版 30　D地点 5 号住居址
図版 31　D地点 6 ・ 8 号住居址
図版 32　D地点 7 ～11・16 号住居址
図版 33　D地点 12・16 号住居址
図版 34　D地点 12・13 号住居址
図版 35　D地点 13・14 号住居址
図版 36　D地点 14・15・17 号住居址
図版 37　調査風景
図版 38　調査風景
図版 39　D地点弥生土器、古墳前期土師器
　　B地点古墳中期須恵器
図版 40　B地点古墳中期須恵器、土師器(1)
図版 41　B地点古墳中期土師器(2)
図版 42　B地点古墳中期土師器(3)
図版 43　B地点古墳中期土師器(4)
図版 44　B地点古墳中期土師器(5)
図版 45　B地点古墳中期土師器(6)
図版 46　B地点古墳中期土師器(7)
図版 47　B地点古墳後期土師器
図版 48　B ・ D地点平安時代須恵器(1)
図版 49　B ・ D地点平安時代須恵器(2)
図版 50　B ・ D地点平安時代須恵器(3)、土師器(1)
図版 51　B ・ D地点平安時代土師器(2)
図版 52　B ・ D地点平安時代土師器(3)
図版 53　B ・ D地点平安時代土師器(4)
図版 54　B ・ D地点平安時代須恵器(4)、土師器(5)
図版 55　B ・ D地点平安時代土師器(6)
図版 56　C地点平安時代土師器(1)
図版 57　C地点平安時代土師器(2)
図版 58　縄文・弥生時代石器(1)
図版 59　縄文・弥生時代石器(2)
図版 60　古墳中期石製品
図版 61　古墳中期石製品、土製品
図版 62　平安時代瓦(1)
図版 63　平安時代瓦(2)、金属製品、その他

第Ⅰ章　調査の経過と方法

1　調査経過

県道長野・荒瀬原線は、長野市北部と牟礼村・三水村・信濃町を結ぶ主要地方道であり、その祖型は中山道支線としての北国街道にある。長野建設事務所は、同路線中長野市若槻区間につき旧街道を西に迂回する形で、総長約2ｋｍ、幅員16ｍのバイパス路線建設を計画し、昭和56年度より着工するに至った。本書に報告する調査は同事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査である。

バイパス路線内における埋蔵文化財保護に関しては、長野県教育委員会文化課の指導に基づくものである。同課は分布調査を基に次の5地点につき発掘調査による記録保存の必要性を認め、建設事務所より委託を受ける形で長野市教育委員会、遺跡調査会が調査を担当することとなった。

地点	Ａ地点	Ｂ地点	Ｃ地点	Ｄ地点	Ｅ地点
地籍	若槻東条	若槻東条	若槻東条	若槻上野	若槻田中
字名	河原	河原	蚊里田	村西	中原
地目	畑	畑・水田	畑	畑	畑
調査予定面積	240m²	1,400m²	600m²	160m²	320m²

この5地点のうち、昭和56年度にＡ・Ｅ地点に関して調査を完了し、報告書が作成されている。以来事業は中断されていたが、昭和59年度に残りのＢ～Ｄ地点について調査が再開される運びとなり、遺跡調査会が調査団を編成し、59年7月17日よりＤ地点試掘調査に着手し、順次Ｂ・Ｃ地点へと調査を移行することとした。同年11月27日までの調査期間中にＢ・Ｃ地点に関しては調査を完了し得たが、Ｄ地点に関しては用地未買収区間について調査未了となり、翌60年6月14日より調査を再開し、7月20日に全地点の調査を完了するに至った。調査の進行状況は次表のとおりである。

事業年度	昭和59年度					昭和60年度
調査期間	7月17日～24日	9月5日～26日		10月11日～11月27日		6月14日～7月20日
調査地点	Ｄ地点		Ｂ地点		Ｃ地点	Ｄ地点
調査内容	試掘 表土除去 遺構検出	遺構検出 遺構精査 測量・記録	試掘 表土除去 遺構検出	遺構検出 遺構精査 測量・記録	試掘 遺構検出・精査 測量・記録	表土除去 遺構検出・精査 測量・記録
調査遺構	住居址4軒、土壙、溝		住居址23軒、土壙、溝		住居址2軒他	住居址13軒、他
調査面積	900m²		1,600m²		700m²	1,200m²

以来、2年度にわたり調査したＢ～Ｄ地点につき、遺物整理及び報告書作成の作業を長野市立博物館において実施し、報告書刊行に至った。

2　発掘調査の方法

Ｂ～Ｄ地点についての調査予定面積は、前節表に示したとおり計 2160 ㎡である。しかし調査対象地の総延長 1048 ｍにも及ぶため、表面のみによる判断から調査範囲を抽出することが困難であり、全域において試掘を実施した後に調査範囲を設定することとした。試掘はバックホーを用いてトレンチを掘削し、遺物包含層、遺構面を調査した結果、調査対象地の約１割 4,400 ㎡について発掘調査の必要性を確認するに至った。調査範囲の表土除去は、試掘結果に基づきバックホーを援用した。包含層及び遺構検出の際に出土した遺物については「検出面遺物」として採取し、遺構検出の後覆土内出土の遺物は覆土上位、中位、床面床直上、出土位置毎に一括して採取した。遺構内遺物のうち、主要なものに関しては、写真撮影の後測量により位置とレベルを記録した。写真撮影は各遺構毎に遺物出土状況、掘り上がり状況、遺構内細部につき実施した。測量は建設事務所設置による 20 ｍ間隔の中心杭と標高ＢＭを利用し、簡易的な遺り方測量により１：20、微細を必要とするものに関しては１：10 の縮尺で実施した。

3　調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画、それに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

調査会　会長　中村　博二（～59・12）
　　奥村　秀雄（59・12～）（長野市教育委員会教育長）
　　委員　米山　一政　（長野市文化財保護審議会長）
　　桐原　　健　（長野市文化財保護審議委員）
　　宮崎　雅彦（～60・3 ）
　　清水　営一（60・4 ～）（長野市教育委員会教育次長）
　　関川千代丸　（長野市教育委員会文化財専門主事）
　　矢口　忠良　（長野市立博物館学芸員）
　　監事　丸山　義仁（～60・3）
　　高野　　覚（60・4～）（長野市教育委員会総務課長）
事務局　局長　戸津　幸雄　（社会教育課長）
　　局員　吉池　弘忠　（社会教育課長補佐）
　　早川　　理（～60・3）（社会教育課主査）
　　山崎　博三（60・4～）（社会教育課主査）

調査団　団長　矢口　忠良　（長野市立博物館学芸員・日本考古学協会員）

調査団　山口　　明　（長野市立博物館学芸員・日本考古学協会員）

青木　和明　（長野市立博物館学芸員）

市村　勝己　（～60・3）

中殿　章子　（長野県考古学会員）

横山かよ子　（長野県考古学会員）

田中寿賀子　（60・10～）

出河　裕典　古岩井久仁　小林　亨（信州大学教育学部学生）

執筆者　和田　　博　（長野市立博物館専門主事）

山口　純一　（長野市立博物館副館長）

原田　勝美　（日本考古学協会員）

調査参加者　青木清市　青木順子　青柳光江　新井安恵子　粟野原セツ子　内山志づ江　内山民子　内山やよい　漆間京子　漆間恒子　大塚かずえ　大塚四郎　太田寿子　大谷孝子　岡沢治子　岡田幸次　岡田芳子　大日向けさい　笠原ひろ子　鴨井伴子　川島邦子　川浦八重子　木賀勇　北村たけ子　工藤文次郎　久保田喜一　久保田ひさ　倉沢満智子　小林たか　小林辰雄　小林長子　小林令子　駒村久雄　桜井孝子　塩煉ふさの　柴田けさ江　島田信夫　下条うら　下条亀雄　鈴木忠夫　高野清恵　高橋はつい　竹村とき子　田坂嘉宣　立岡米三　田中律子　徳嵩久雄　徳嵩峰子　徳武邦子　徳武二三子　徳竹米子　徳永由子　徳成奈於子　轟徳子　中沢エツ子　中沢幸太郎　中沢照子　中沢紀子　中沢房子　中沢まさ江　中嶋和　名川啓子　梨本よね子　夏目理太　夏目さと　野村良子　八田明巳　八田桂吉　花岡清子　花岡艶子　羽根田武雄　原栄子　原とし子　原麗子　原田愛子　原田常子　原田八重子　半田芳子　副沢比さ子　前田千代松　牧野義男　丸山悦子　丸山貞子　丸山進　丸山たまき　丸山千里　丸山よし子　宮岡義一　宮岡幸子　宮岡緑　宮下久馬　宮下圭子　宮下茂子　宮下多津子　宮下富枝　宮下信義　宮下義正　八木みす子　矢島きよ子　柳沢伊代子　山田秋江　山田菊治　山田とも子　湯本とし子　若槻計代　若槻とよ　若槻貞子

発掘作業は、若槻支所を中心として地元東条、上野、田中各区民の絶大なる協力を得て行われたものである。また長野建設事務所においては、報告書刊行にいたるまで格別の御配慮をいただいた。関係者各位に対し心より御礼申し上げたい。

調査中　長野市立博物館諸氏の御指導を得た他、下記の方々より御教示をいただいている。記して感謝申し上げたい。

石上周蔵、岩崎卓也、臼田武正、小林計一郎、笹沢浩、佐藤信之、林和男、直井雅尚、宮下健司、森嶋稔、森山公一、矢島宏雄

なお、調査員の要として活躍されてきた市村勝己氏は、60年4月をもって長野県教育委員会に就職された。氏の御苦労を深謝し、ますますの御発展をお祈り申し上げたい。

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

1　地理的環境

県道長野荒瀬原線に於ける今回の各調査地点は、すべて三登山東南麓に発達した崖錐上に所在する。

標高923.0ｍの三登山は、浅川扇状地の西を限る地附山と対照的に扇状地の北を限り、約45°の急傾斜で500ｍ以上も盆地部に落ち込み、その山腹には階段状に複数の断層地形と山脚近くに湖成台地とが観察され、三登山の名称起源ともいわれる。

この山塊は地附山などと同様、長野盆地西縁に連続する裾花凝灰岩（流紋岩質凝灰岩）で、逆断層の田子断層につきあげられて前述の比高差が生じたと推定され、地層は西北傾斜を示す。

山脚から約1㎞ほど東方には、長峰（南郷丘陵）と田子川の横谷をへだててその南に続く若槻台との丘陵が東北から西南に連続し、東側に替佐推定断層が走り平地とは70～90ｍの比高差を示す。両丘陵は背斜構造を示す洪積世湖成層の豊野層を主体として、表層は古生代小礫を交えた砂礫層（南郷層）におおわれ、これらの地層は三登山山脚台地にも分布するほか、浅川扇状地を越えて城山丘陵から往生寺台地・平柴台地にも断続して及んでいる。

長峰・若槻台丘陵と三登山との間は、善光寺地溝にも続くとされる田子推定断層がその成因と考えられ、一部の地点では鮮新世末期の猿丸同位層が地下数ｍに観測された（？）こともあるとされ、崖錐が地表をおおっている。

この崖錐は土京川・深沢川・田子沢・隈取川など、三登山から急流をなして落下する小河川の押出しによって形成されている。崖錐東端と長峰丘陵との間は沖ノ沢・田子川、若槻台北側は清水沢･土京川がそれぞれ開析しているため、崖錐は400～450ｍの標高をなす山麓台地状を呈している。

今次調査地点は、いずれもこの崖錐南部を構成する土京川押出し上にある。調査Ｂ地点はＡ地点（長野市の埋蔵文化財第12集所載）の北方約300ｍ、蚊里田西ノ沢境の土京川崖錐先端部で、扇状地面と数ｍの比高差しかない南斜面脚部にある。Ｂ地点上部一帯は清水久保の地籍名を有し、湧水を利用して棚田が広がる浸食地形をなしているが、Ｂ地点は果樹園になっている。

Ｂ地点から清水久保の棚田湿田地帯を約500ｍ北上した山脚部の蚊里田浄水場に接してＣ地点、その東北に連接してＤ地点が続く。Ｃ地点は土京川堆積の西縁に近くやや南西下がり傾向の傾斜地であるに対して、Ｄ地点は土京川谷口正面で最も旺盛な堆積面にあり、調査地点中最高所の標高約440ｍ近くから東下がりに東方へ続き、県道を隔ててさらに東方の土京川対岸にＥ地点（長野市の埋蔵文化財第12集既報）がある。Ｃ地点では土層中に岩塊ともいうほど大きな流紋岩質凝灰岩の転石がおびただしく、以前はＤ地点と共に桑園であったが、調査時点では野菜畑・荒地

であり、D地点は果樹園で、周辺は次第に宅地化が進行している。

D地点の北側には比高差約90mの土京山があり、山脚を土京川が東流して現地表面を約2～3m開析している。また土京川の南斜面山腹には小規模の崩落地形が観察され、湧出する鉱泉を利用して土京川縁りに老人憩の家が設置されている。この崩落地を野尻湖から引水している導水管が横切り、付近から良質の粘土を産出する。また、導水管ぞいに東北へ約250mの地点で、導水管敷設の際に田中窯跡が発見され、奈良時代後期とされる善光寺瓦を数多く出土している。

原始・古代の細部については考古学所見にゆずるとして、縄文期の田子二本松遺跡・吉古墳群をはじめとして山脚一帯に散在する後期古墳・崖錐上に点在する窯跡・白鳳期の銅造観音菩薩立像（重文）を所蔵する山千寺・延喜式内社の比定説もある粟野神社及び田子地蔵院の木造観音菩薩立像（市文化財指定）・円竜寺の木造大日如来坐像（同前）等々、原始時代から中世にかけての遺跡・文化財が多く、特に坂上と呼ばれる若槻地区北半部に集中している。

中世には若槻氏がこの地に栄え、里城（現若槻団地内）・山城（三登山中腹）を本拠とし押田山（浅川）・土京山にも支城があり、蚊里田神社はその創祀とされる。若槻氏は高梨氏の傘下になったこともあり、1403年（応永10）には信濃守護代細川慈忠に攻撃されたこともあった。

また、甲越角逐に於ける1557年（弘治3）夏の上野原合戦場は、地域の人々が越後原とも呼んだここ上野（うわの）一帯が有力とされている。

戦国時代ごろからの北国往還は神代（かじろ）坂～長沼が本通りであったが、近世初頭の慶長年間（1596～1615）後半に北国街道（県道長野牟礼線）が本街道として整備され、徳間をはじめ若槻地区の諸集落は街道沿いに移転し、調査地点近くの国胎寺が下田子から現在地に移り、前記粟野神社は180度回転して現在のような西向きとなった。

近世にはこの街道は加賀街道とも呼ばれて、加賀藩主ほか北陸諸大名が参勤交代に通り、佐渡金山産出の金銀もこの道を江戸へ運ばれ、東条・徳間・稲田3か村が新町（荒町）宿を構成して交替で伝馬役を勤めた。明治以降国道として信越を結ぶ動脈であったが、第二次大戦後現在の18号線が開通して主役の座をおりた。

〔参考文献〕上水内郡地質誌　同郡誌　上水内地域の第四系（豊野団研連絡紙No.30）　若槻史

（和田　　博）

2　歴史的環境

本遺跡は、長野～荒瀬原バイパス路線の新設に伴い、調査対象5遺跡のうちB地点～D地点の3遺跡である。56年度にA地点・E地点が調査され報文「浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスA・E地点遺跡」がある。

このバイパス路線の地勢は、先述しているように三登山々系の一つ湯ノ平を源とする土京川の流入（旧流入路）によって形成された扇状地上丘稜にある。その前面には、浅川、駒沢川、堂万川による複雑な様相を呈する浅川扇状地遺跡群を擁した扇状地形が、浅川、若槻（下段）、三輪、吉

1．吉古墳群	6．円光寺古墳群	11．上野古墳群	16．徳間古墳群
2．田子古墳群	7．阿蘇遺跡	12．上野原遺跡	17．中清水遺跡
3．三千寺古墳群	8．袖上野遺跡	13．赤萱平遺跡	18．古屋敷遺跡
4．和出遺跡	9．二本松遺跡	14．浅川西条遺跡	19．徳間柳田遺跡
5．田中遺跡	10．うまやくぼ古墳群	15．神楽橋遺跡	20・徳間大南遺跡

図１　遺跡周辺の地形　（１：20,000）

田、古里の各地区へと展開している。調査地区は、同様相をみせながらも形成の異なりから、浅川扇状地遺跡群から分離され、浅川扇状地に接するA地点遺跡も含め、北に隈取川、東に長峯丘陵、南に駒沢川に接する台地の範囲を「若槻丘陵・台地遺跡群」と総称することも可能と考えられる。同群内の「牟礼バイパス河原B地点遺跡」、「東条蚊里田C地点遺跡」、「上野村西D地点遺跡」と呼称しておきたい。

さて地域の様々な歴史的事象を詳らかにすること、取り分け古代史にあっては、残されている遺跡、遺物の一つ一つの深い見識から更に遺跡群、そして面的地域の広がりの集落址、生産地、墓址等の相対的な関連からその意味することを詳らかにしていくものと考えられる。ちなみに、浅川扇状地遺跡群と若槻丘陵・台地遺跡群に於いても地理的自然環境の深い関係から、それぞれを個立し、又別視するものではなく、同一ステージとして認識すべきものである。

遺跡周辺の歴史的環境について、既にA・E地点遺跡の報文に詳しく掲載されているので本節では省略し、墓址、生産地について特記するが、浅川扇状地遺跡群には、弥生時代から奈良・平安時代の各期に亘り多くの遺跡が存在する。しかしその立置する好条件をもつ位置のほとんどが宅地化等の開発が進み、往時の様相さえ推測し難い状況となってしまった。

三登山山麓一帯及びその周辺地域は、墓址域としても知られ、古墳中期末の三才前方後円墳、地附山前方後円墳の2基を含め、多くは後期の円墳が主流で墳丘規模は小さいが、135基を数える。それは上水内郡下に存在する総古墳数の、約60%がこの地域に集約されることは驚きに値するものである。うち吉古墳群は田子池上の斜面の小地域に63基が築造されている。善光寺平では、大室古墳に次ぐ群立であり、その密度に於いては大室古墳以上である。構造は土石混合円墳がそのほとんどであるが、2基の四石合せ屋根形石室を呈する古墳も確認され注目されている。副葬品は武具類、装身具、馬具、玉類等後期古墳特有の埋葬品を多量に検出しているが、須恵器製品は少ない。これ等の被葬者は、政治的組織の変革と経済構造の発達を基に、地位の向上が一般化（が勿論一般庶民のものではない）したものと言われるが、ただ該期の集落址との係わり、そして古墳築造、副葬品の背景となる生産性のエネルギーの存在については今だ不明が多く解題されていない。いずれにしろ「浅川扇状地遺跡群」、「若槻丘陵・台地遺跡群」に地理的環境からその農業生産力を背景にした支配的構造社会があったことは、集落遺跡との関係に問題を残すにしても有機的に考察、理解するに有力な歴史的地帯として疑うところではない。

次に、上野村西D地点遺跡から、善光寺瓦の多量の検出をみた。善光寺の創建については「伊呂波字類抄」に皇極天皇元年頃と伝えられているが、その境内と思われる所から3種類の鐙瓦と宇瓦一種が出土している。その形は白鳳時代に比定されている。

他の瓦出土地では、同地域内の田子川下流の若槻丘陵斜面に善光寺古代の東沢瓦窯、又土京山中複の田中瓦窯、さらに吉の宇瓦、山千寺の平瓦、神楽橋遺跡の出土が上げられる。本遺跡では、鐙瓦、宇瓦、平瓦多量を検出し鐙瓦は、八葉の複弁式蓮葉文と界圏の中房に13顆の蓮子を有し、宇瓦は、忍冬唐草文が右から左に流れる偏行文様、平瓦は表裏面に丁寧なハケ目・布目の整形を

もつものである。これは善光寺出土瓦及び東沢瓦窯址と全く同様相の瓦と限定できるものであろう。さすれば、この瓦の3点間の連繋と遺跡の性格解明に明りを与える段のものであろう。他に須恵器生産窯址について、髻山山麓から牟礼、豊野町にかけて、髻山東南麓1基、牟礼前高山支群8基、牟礼豊野地籍に2基の調査があり、特に髻山東南麓窯址は八世紀前葉に据えられ、これ等須恵器窯址と瓦窯址との親縁性から、生産的背景の共通性を含めて研究が期待されるところである。この地域には、延喜式内社水内九座の一つである三輪神社、又それの一つとして目される粟野神社、蚊里田八幡社の存在についても、この地域の農業生産力を示す実証とする手立ての歴史的事象として興味をおこす。　　（原田勝美）

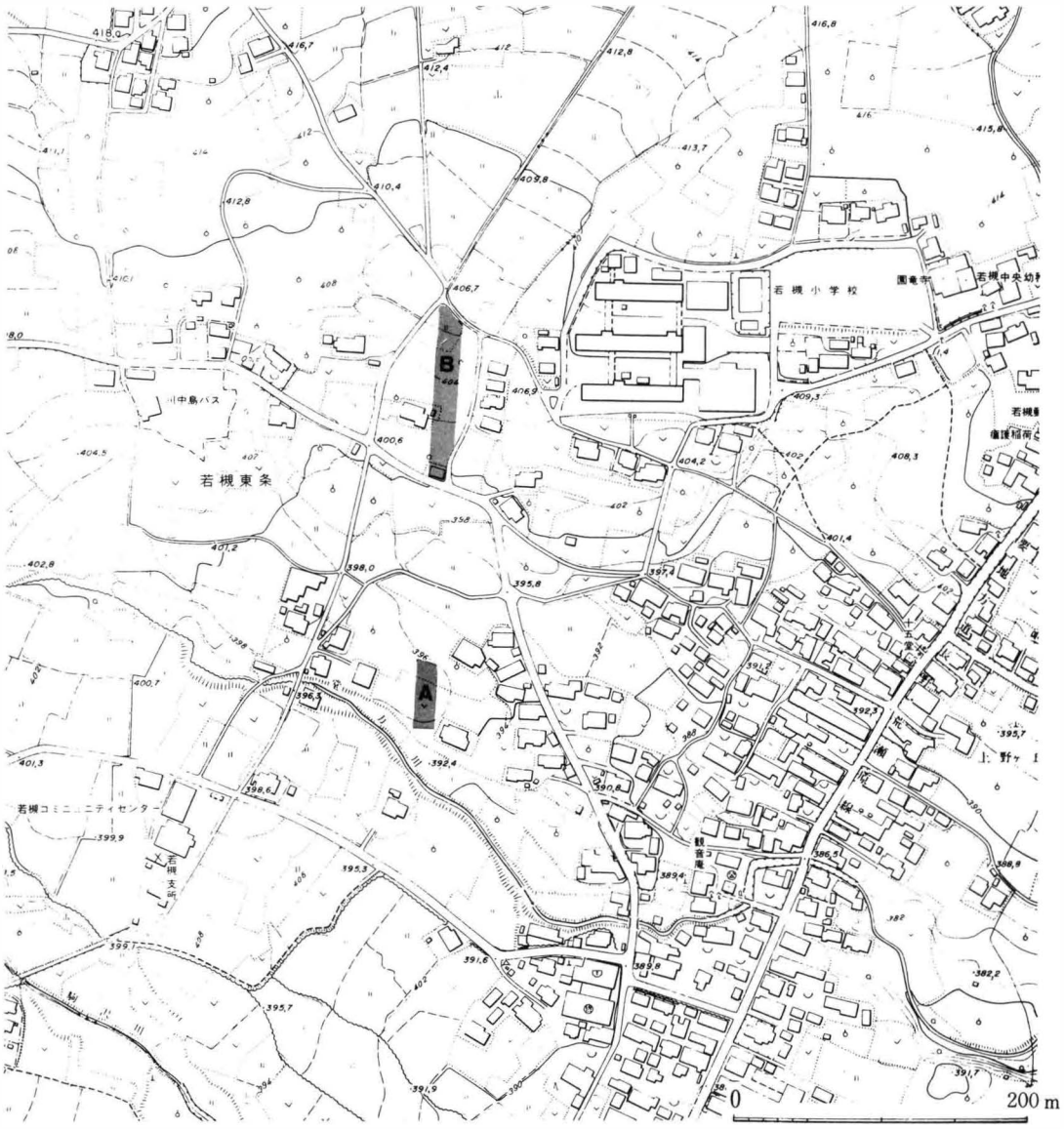


図2　B地点周辺の地形と調査位置　（1：5,000）

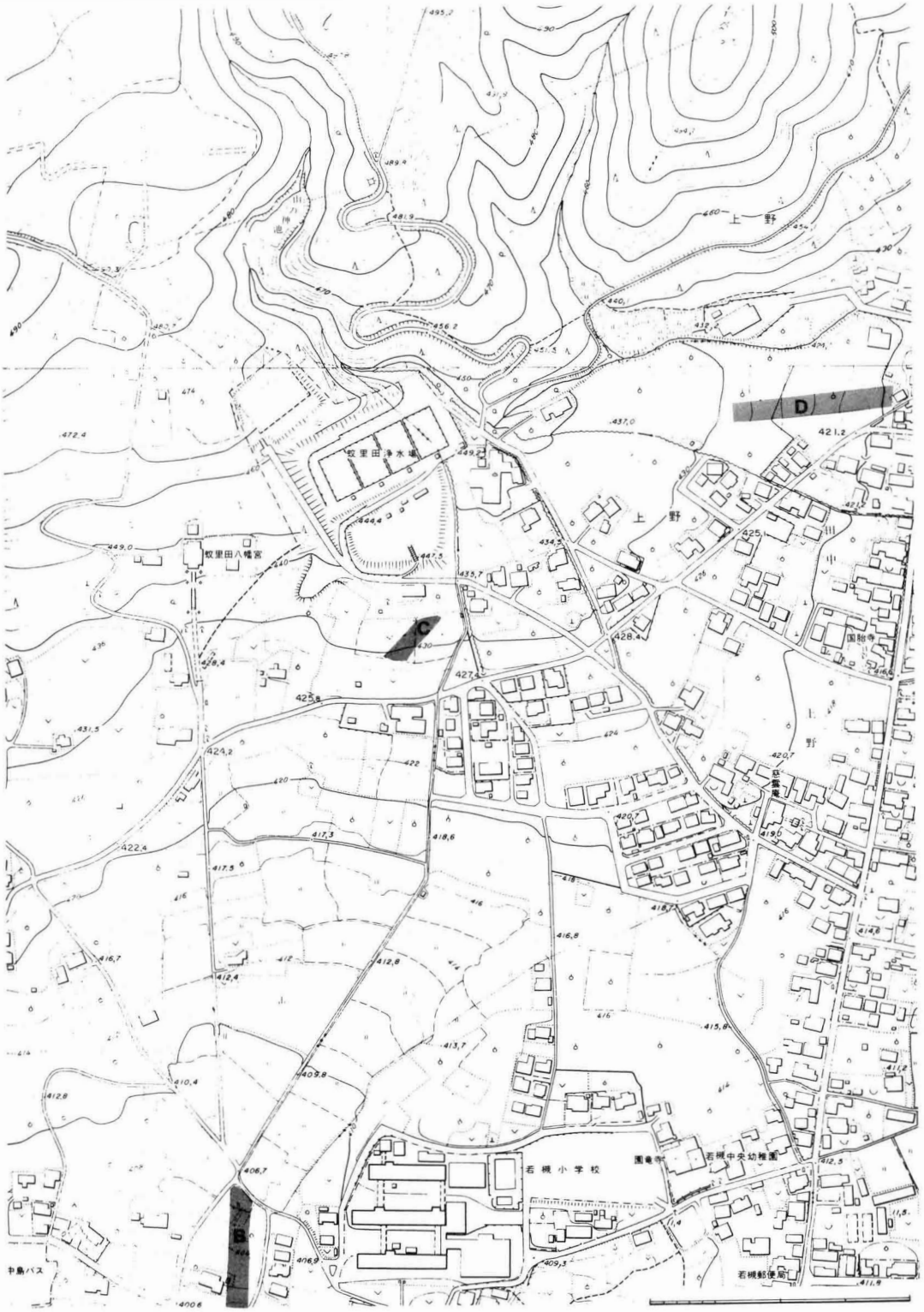


図３　Ｃ地点周辺の地形と調査位置　（１：5,000）

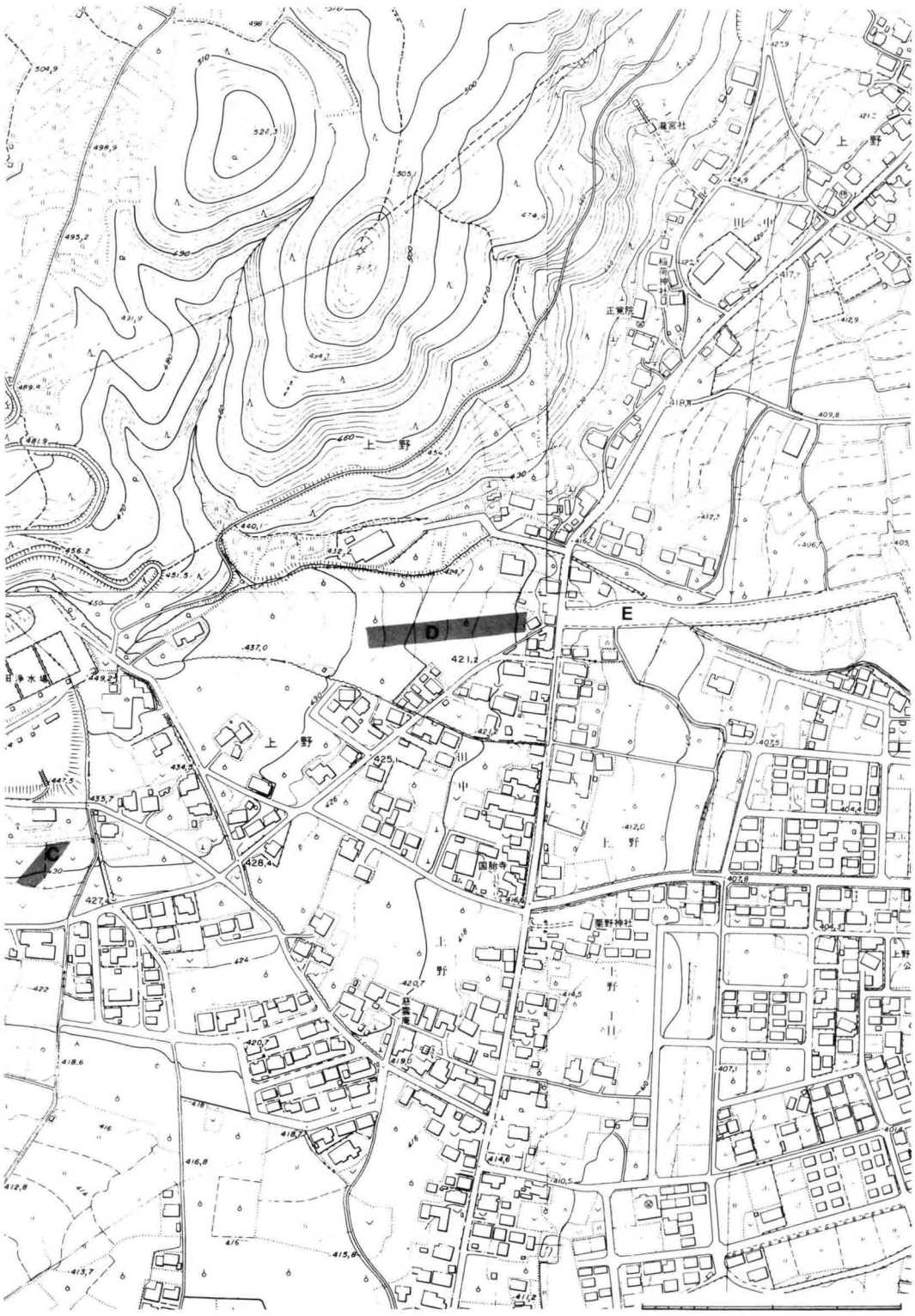


図4　D地点周辺の地形と調査位置　（1：5,000）

図5　B地点遺構配置図　(1：500)

第Ⅲ章　B地点の調査

1　概要（図5～8）

調査対象地は、北端が水田に利用されていた以外は果樹園になっており、両脇を農業用水路にはさまれる形となった幅50ｍ前後の丘陵様地形を呈している。遺構面における標高は北端において405ｍ、南端において400ｍを測り、その比高が5ｍに及ぶ傾斜地となる。表土の堆積は薄く、同面までの深さは平均して30～40㎝である。土層序は畑耕作土から漸移的に黄褐色砂礫質土へ移行するものであるが、粘土質、砂礫質が顕著に強まる部分を含み、均質でない状況が観察されている。検出された遺構は、住居址23軒、溝、土壙であり、調査区全域に比較的密な分布状況を示している。住居址の時代別内訳は、古墳中期8軒、古墳後期3軒、平安時代12軒であり、重複する住居は4ヶ所において認められるものの、同一時代で重複するものは平安時代に限られる。

古墳時代中期（1・3・4・12～15・17号住）

住居は正方形に近い竪穴住居で、3号住の一辺7.7ｍを最大とし、14号住の5.1ｍを最小とする。主軸方位は一定でN－45°－Wを前後する位置にある。構造は主柱4本とすることが一般的で、周溝（3・14・17号住）、カマド（3・17号住）、貯蔵穴（3号住）などの施設が認められる。カマドは各住居の遺存状況を考慮すれば普遍的な存在が想定され、その位置を北西壁中央部に求めることができる。各住居は、出土遺物に型式差が顕在せず、重複関係も存在しないことから、2～3世代の短い期間内に営まれたものと理解される。調査区内での分布は、北半と南端とに集中する傾向が認められ、丘陵東縁部に弧状に配置される状況が想定される。

古墳時代後期（6・8・9号住、1号溝）

出土遺物より明確に該期と判断されるのは8号住のみであるが、主軸方位を一致させ同様の規模による6・9号住をここに含めた。8号住は北壁中央部にカマドを有し、主軸方位を南北方向にとる点古墳中期住居と異なる。1号溝は9号住を囲むように掘削されるもので該期と判断した。

平安時代（2・5・7・10・11・16・18～23号住、2号溝、土壙）

住居は一辺4ｍ前後の方形竪穴であり、壁にカマドが付設されている。カマドは、21号住のみ隅角にあるが、北壁あるいは東壁に位置し、カマド横に貯蔵穴を有するもの（5・7・11号住）も認められる。住居の分布は全域に拡散しているが、特に南端に集中し、21・18号住と19・20号住とに重複関係が存在する。カマドを基準に考えた主軸方位は、傾斜にあわせた南北方向に近い群（5・10・11・16・18・20・21号住）と、傾斜と直交する東西方向に近い群（2・22・23号住）とに分類されるものの、時間差に伴うカマド位置、主軸方位の移動は把握されていない。各住居は、出土遺物に年代差を有し、重複も認められることから、5～6世代の長い期間内に営まれたものと理解される。2号溝及び土壙は、出土遺物から該期として判断される。

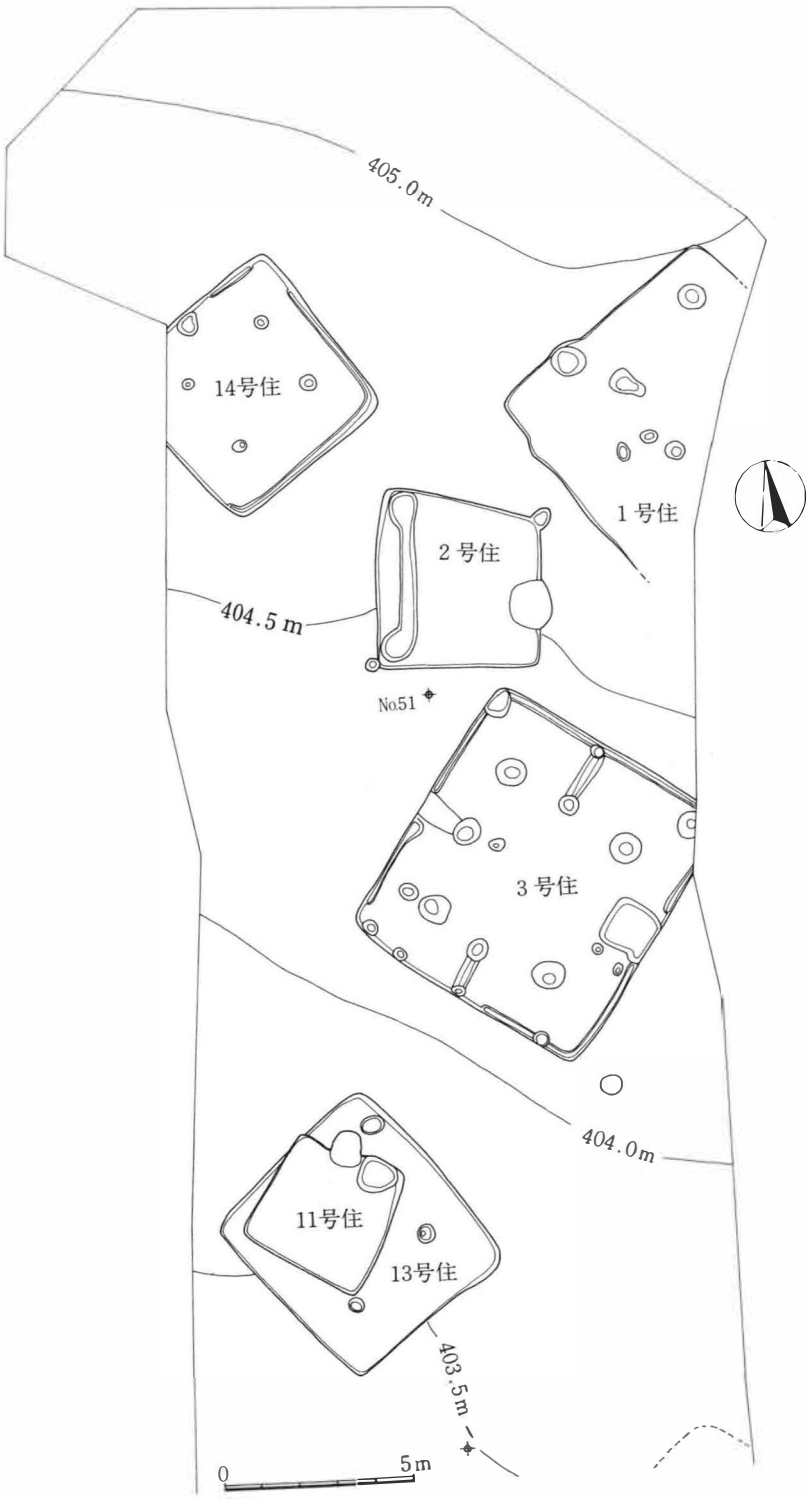


図6　B地点全測図1　（1：200）

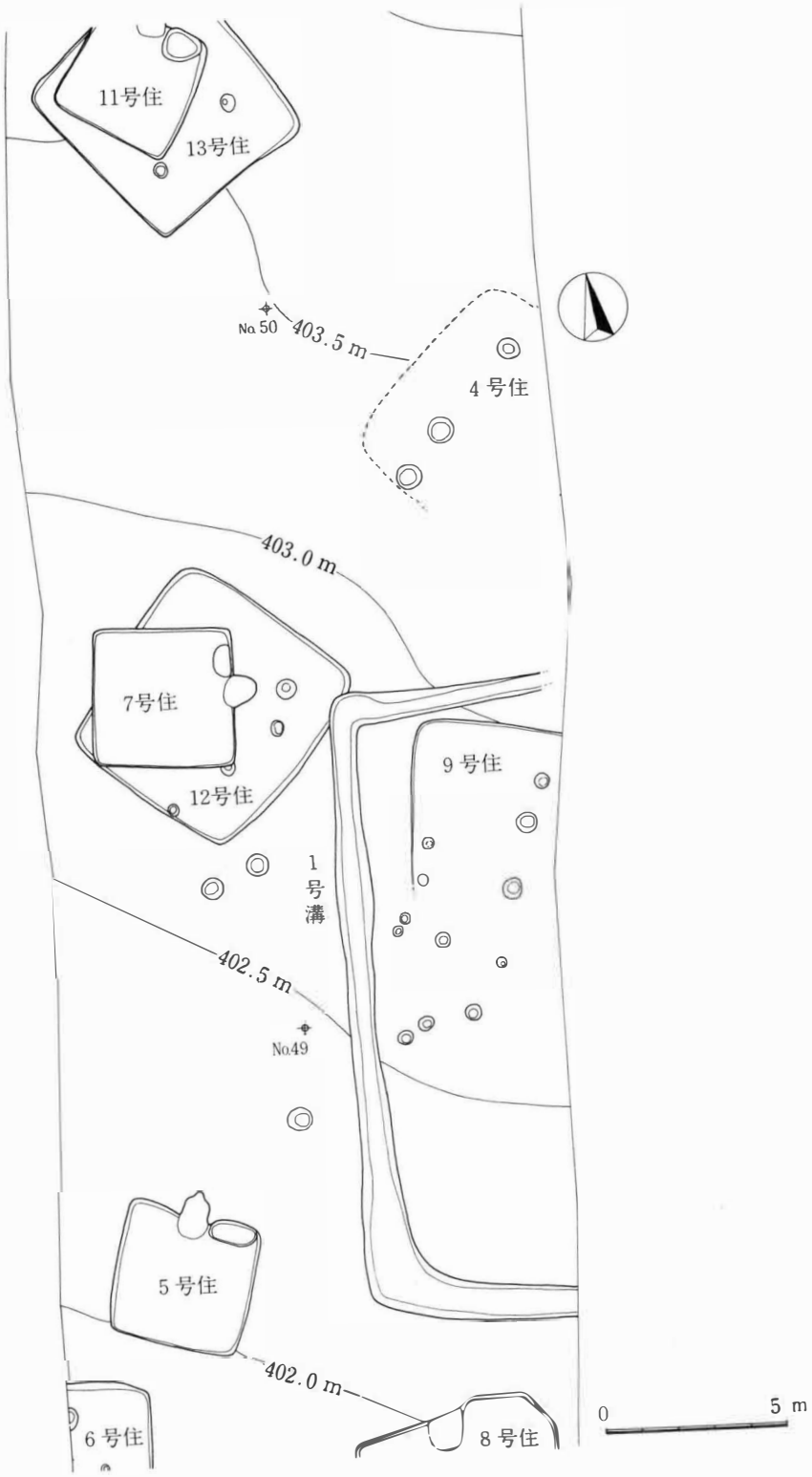


図７　Ｂ地点全測図２（１：200）

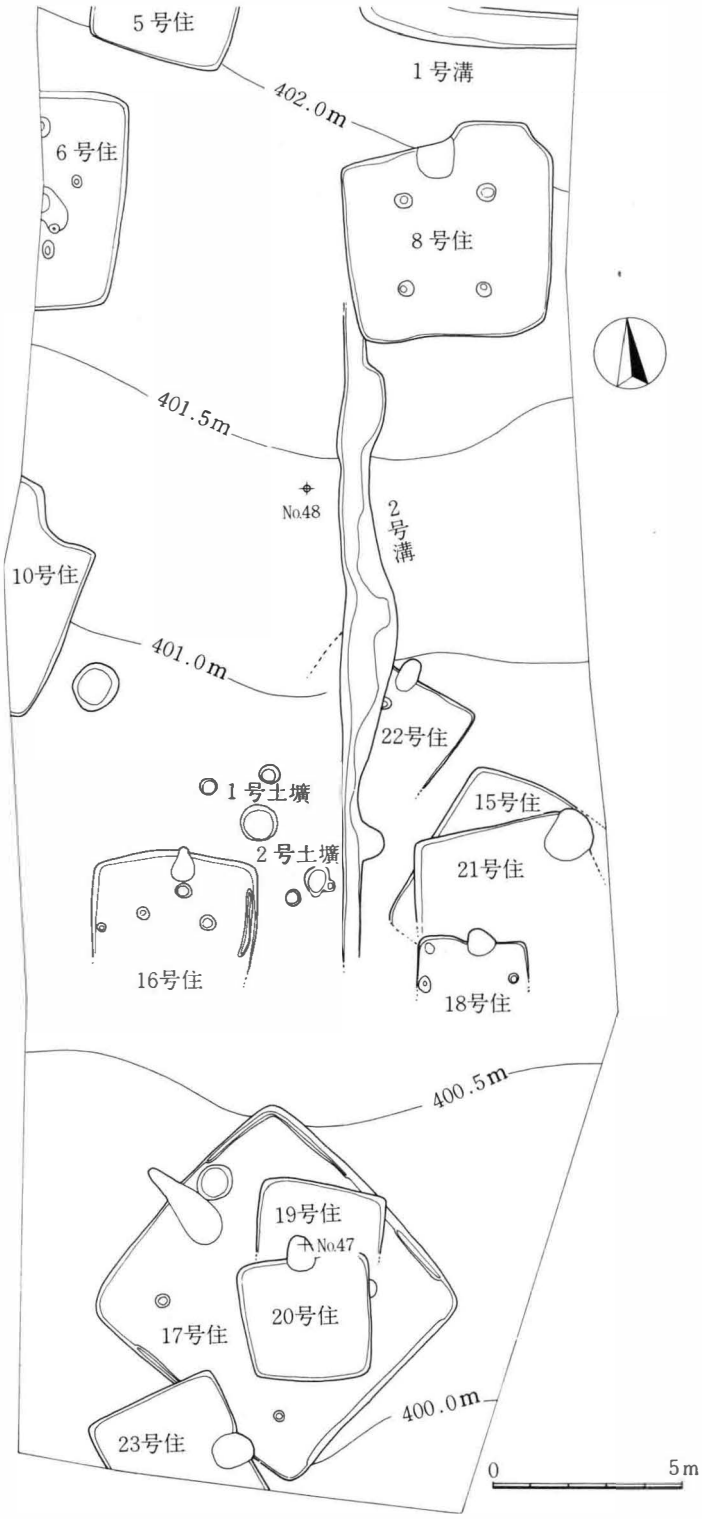


図8　B地点全測図3　(1：200)

2　古墳時代中期の遺構

1号住居址（図9）

一辺6.6 mの方形を呈するものと考えられるが、東側約半分は調査区外となっている。検出面からの掘り込みは浅く、壁高は5 cmを残すのみである。柱穴は整列せず、上部に集石を有する北隅のピットのみを主柱と考える。北西壁際の遺物を伴った浅い掘り込みによるピットと、同壁から1 m離れた不整形の焼土を伴う凹みは、カマドの遺存部分にあたるものと推定される。

遺物（図56－1～8）　出土量は少なく、図示したものは全て北西壁際ピット上部より出土している。出土状況は、土師坏（5）のみ原形を保つ状態で、細片となり散乱するものがほとんどであった。

3号住居址（図10、11）

7.7×7.1 mの方形を呈し、住居址群中最大規模に属する。検出状況は良好であり、東隅の一部分のみ調査区外となる。壁高は30～10 cm、壁際に幅15 cm、深さ10 cm内外の断続的な周溝が検出されている。主柱穴は4本で、長軸4.2 m、短軸3.5 mの長方形に配列されている。主柱穴短軸間には小ピットが存在し、壁際に対置される小ピットと溝により連結している。同ピットと溝は間仕切り用の施設とも考えられる。カマド（図11）は北西壁に中央部に遺存するが、構築材は原形をとどめない。壁から1 m離れた深さ15 cmのピットに至るまで焼土層が堆積し、燃焼部は壁際に1.2×0.8 m、深さ10 cm程度の凹みとして残される。カマドに相対した南東壁中央部には、貯蔵穴と考えられる1.4×1.3 m深さ15 cmの方形ピットが存在する。

遺物　土師器・須恵器（図56・57・58－9～75、図64－239～241）と勾玉（図66－4）、異形土製品（図65－16）が出土している。覆土及び床面からの遺物出土は多量であり、未実測の土器破片重量は42.7 kgに達する。遺物の分布は、床面あるいは床面直上に密な状況を呈し、カマド周辺から床中央にかけて集中してみられる。床面上の遺物は比較的完形に近い状態のものが多く、特にカマド周辺からは甕類4個体が潰れた状態で検出されている。

4号住居址（図11）

検出の不手際から壁を把握するに至らなかったが、床範囲と柱穴の配列から、一辺7 m程度の方形プランを推定できる。東側は調査区外となり、南半は攪乱により床面が失われている。床面は極めて堅緻であり、部分的に焼土の堆積がみられる。柱穴は3ケ所に存在し、上部に礫を伴うピットもここに含まれる。

遺物　土師器・須恵器（図59－76～100）、土鈴（図65－17）が出土している。床面からの検出個体が多く、比較的完形に近いものが集中してみられる。

12 号住居址（図 12）

5.8×6.2 mの方形を呈し、壁高は 20～10 cmを測る。平安時代 7 号住が重複するため、床面の遺存は小範囲にとどまり、北西部は掘り方を検出したにすぎない。8 ヶ所のピットの内、深さ 30 cm以上の 3 本を基準とすれば、2.4～2.7 m間隔の 4 本柱を想定できる。カマドの遺存はみられないが、7 号住により攪乱された北西壁中央部に位置するものと考えられる。

遺物　土師器・須恵器（図 60－101～117）が出土し、北隅と南東壁際に完形に近いものが集中して検出されている。他はほとんどが小破片に属する。

13 号住居址（図 13）

5.4×5.7 mの方形を呈し、壁高は 30～ 5 cmを測る。平安時代 11 号住が重複するため、床面の遺存は約 1/3 にとどまる。主柱穴は 3 本が確認され、2.7 m間隔による 4 本柱を想定できる。カマドの遺存はみられないが、11 号住により攪乱された北西壁中央部に位置するものと考えられる。

遺物　土師器・須恵器（図 60－118～134）、小形手捏土器（図 65－13）が出土している。小破片個体がほとんどであり、出土総数は少ない。

14 号住居址（図 14）

5.1×5.2 mの方形を呈し、住居址群中にあって最小規模であり、大形の 3・17 号住の約 1/2 の面積に相当する。検出状況は良好であり、西隅が調査区外となるのみで、3 号住と並んで最も端正な形態が確認される。壁高は 40～20 cmであり、北東・南東壁際に幅 10～20 cm、深さ 5 ～10 cmの周溝が存在する。4 本の主柱穴は、掘り方が 2 段となり床から 40 cmの深さをもち、長軸 3.5、短軸 2.5 mの長方形に配列されている。北西壁際中央には、不整形で深さ 13 cmのピットが存在し、同位置にカマドの存在が予想されるところである。

遺物　土師器・須恵器（図 61・62・63－135～205）、小形手捏土器（図 65－ 3・4）、紡錘車（図 65－19）が出土している。覆土上部より多数の遺物が包含されており、床面あるいは床直上にも豊富な検出状況を示している。小形の坏類は完形に近い破片を含むが、ほとんど細破片となり散乱した状態にある。復元によりほぼ完形となった須恵器坏 2 点の出土は特筆される（169・170）。170 は床中央部に近い床面直上において検出され、169 は覆土中に細片となって存在していたものである。

15 号住居址（図 13）

一辺 5 m強の方形を呈するものと考えられるが、平安時代 18・21 号住が重複するため、北東・北西壁と床面の一部が遺存するのみである。壁高は最大 40 cmを測り、柱穴は未確認である。

遺物　土師器（図 63－206～211）の出土は少量であるが、小形手捏土器（図 65－ 7 ～ 9）、紡錘車（図 65－21）、滑石製模造品（図 66－ 5 ・10）の出土数は他の遺構を上回るものである。

17号住居址（図14・15）

7.3×7.6ｍの方形を呈し、３号住と並んで住居址群中最大規模に属する。平安時代19・20・23号住が重複するため、床面と南西壁は攪乱されている。壁高は25～10㎝であり、壁高には幅15㎝、深さ5㎝程の周溝が断続的に存在している。主柱穴は4本で、長軸4.0ｍ、短軸3.6ｍを測る。北西壁中央部にはカマドが存在する（図14）。壁外に80㎝突き出したゆるやかな傾斜をもつ煙道を有するもので、壁からやや離れた位置にある径70㎝、深さ10㎝のピットが燃焼部として把握されている。構築材はほとんど原形をとどめないが、左袖部が若干遺存しており、小石混じりの灰白色粘土により構築されたことが確認される。同カマドに隣接して径1ｍ前後、深さ15ｍの円形ピットが存在し、貯蔵穴と想定される。

遺物　土師器（図64－219～238）、土錘（図65－22）、石製模造品（図66－８・11・12・17・18）が出土している。土器はカマドと貯蔵穴の周辺に完形に近いものが集中してみられる他、小破片にとどまり出土量も少ない。石製模造品の出土数は住居址群中最多である。

3　古墳時代後期の遺構

6号住居址（図17）

一辺5.8ｍの方形を呈するものと考えられるが、西側半分以上が調査区外となっている。壁高は北壁で20㎝を測る。床面は判然とせず凹凸が著しく、南側はほぼ掘り方面に相当するものと言える。

遺物　土師器坏（図67－13）が出土した他全形を知り得る遺物はない。

8号住居址（図16）

5.4×5.6ｍの方形を呈し、該期において唯一全形を知り得る住居である。壁高は40～10㎝、短軸2.1ｍ、長軸2.4ｍに配列された4主柱を有する。北壁中央部に多数の遺物を伴うカマドが設けられるが、構築材と思われる礫は原位置にあらず、わずかに左袖部を遺存するのみである。

遺物　土師器（図67－１～12）のうち、壺（４）を除き全てカマド内及びカマド周辺より検出されている。壺は単独で床面よりやや浮いた状態で検出され、本遺構に伴うものと判断されたが、型式的には他の遺物より古い形態を呈することが明らかである。なお、南西隅からは平安時代遺物（図75－120～122）が一括出土しているものの、遺構の重複を確認するに至っていない。

9号住居址（図17）、**１号溝**（図７）

北西隅と床面の一部が検出された9号住は、東側が調査区外となり規模は明らかでない。南側には不整列な柱穴12本がみられる。壁は北壁で10㎝程度であり、他に比較し浅く、遺物の出土も極めて少ない。溝は住居と柱穴群を囲む位置にあり、南北17ｍの方形を呈するものである。幅１ｍ内外、深さ30㎝を測り断面はＵ形を呈する。遺物は土師器（図63－217・218）が出土している。

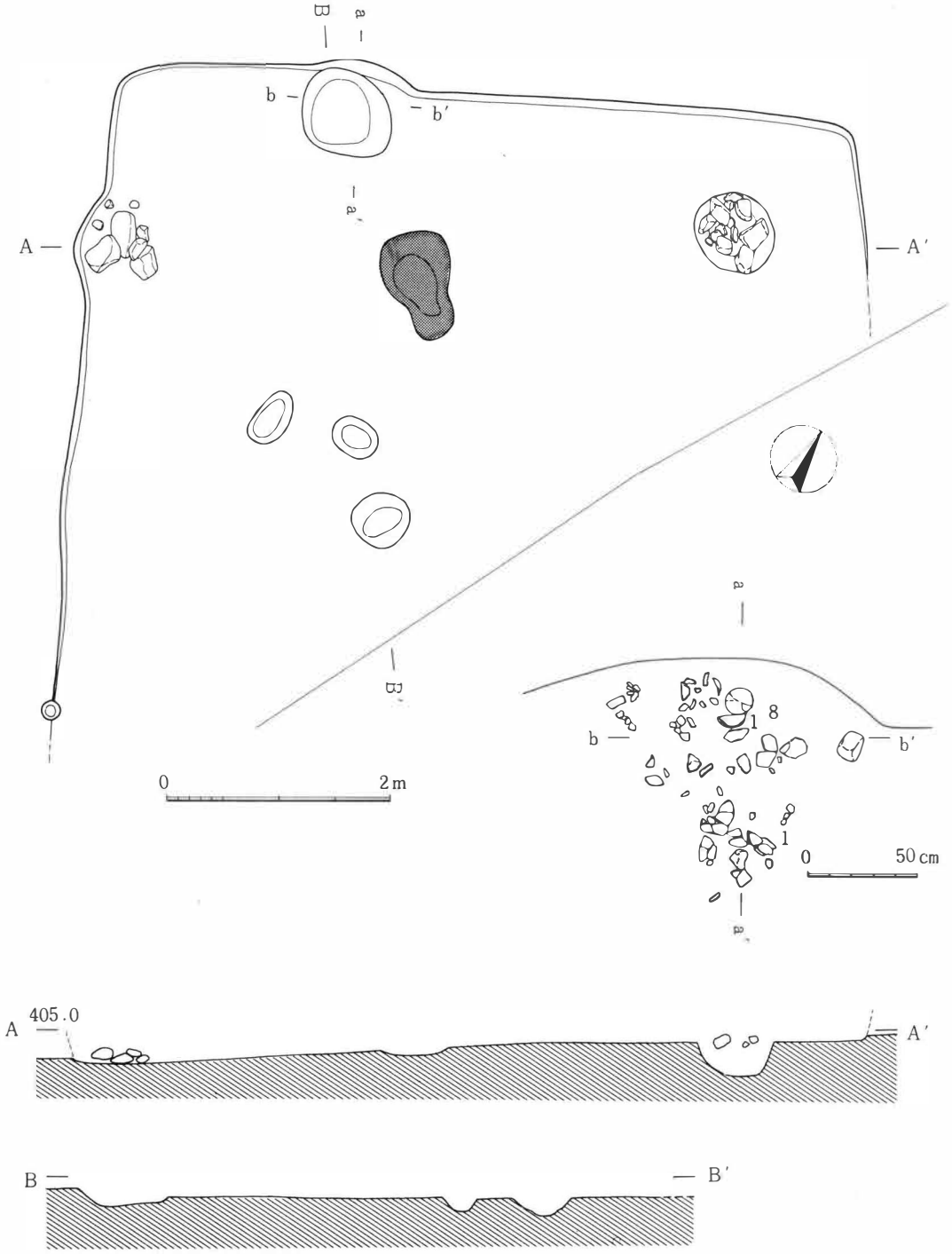


図9　B地点1号住居址実測図

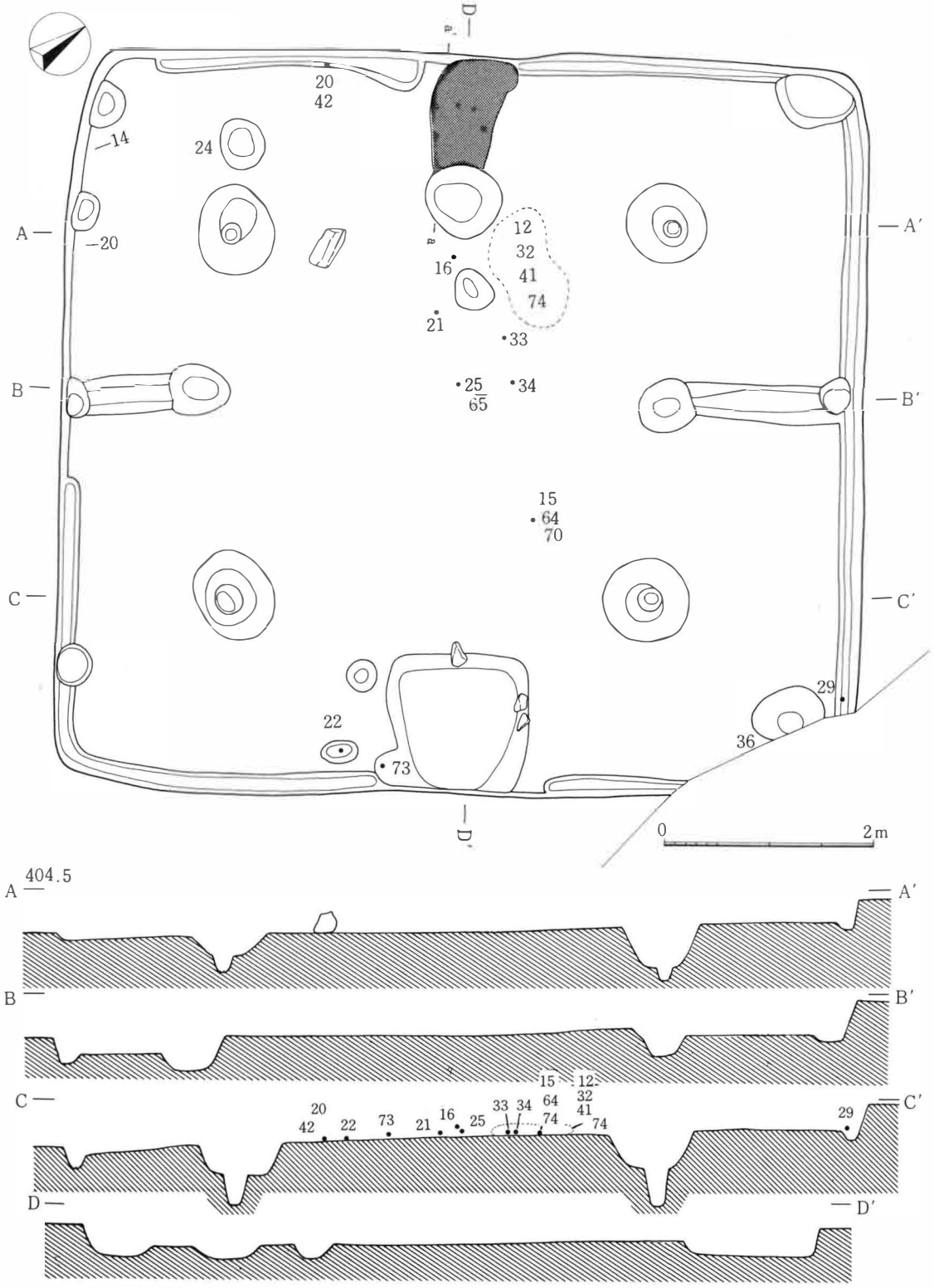
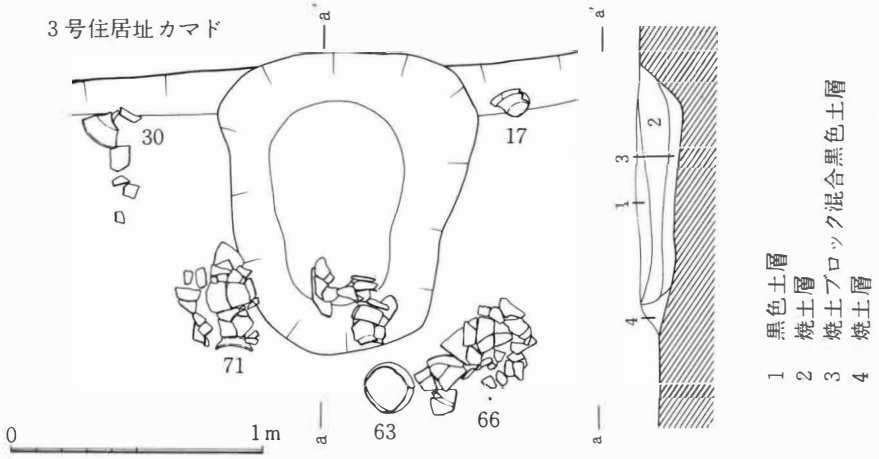


図10　B地点3号住居址実測図



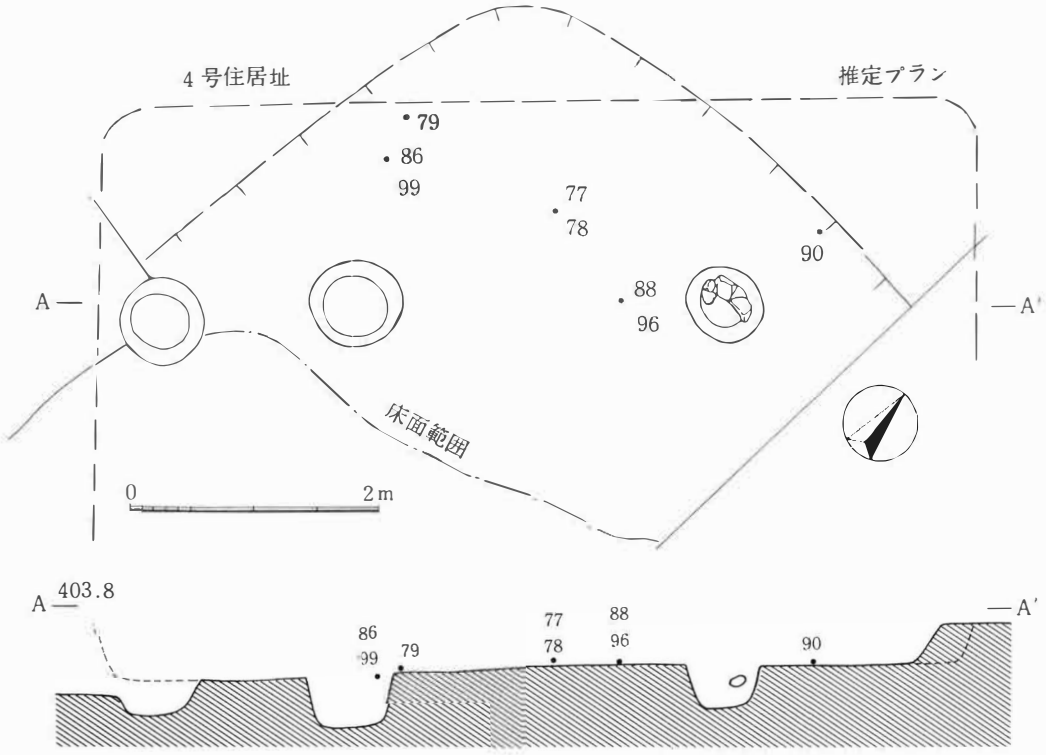


図11　B地点3号住居址カマド、4号住居址実測図

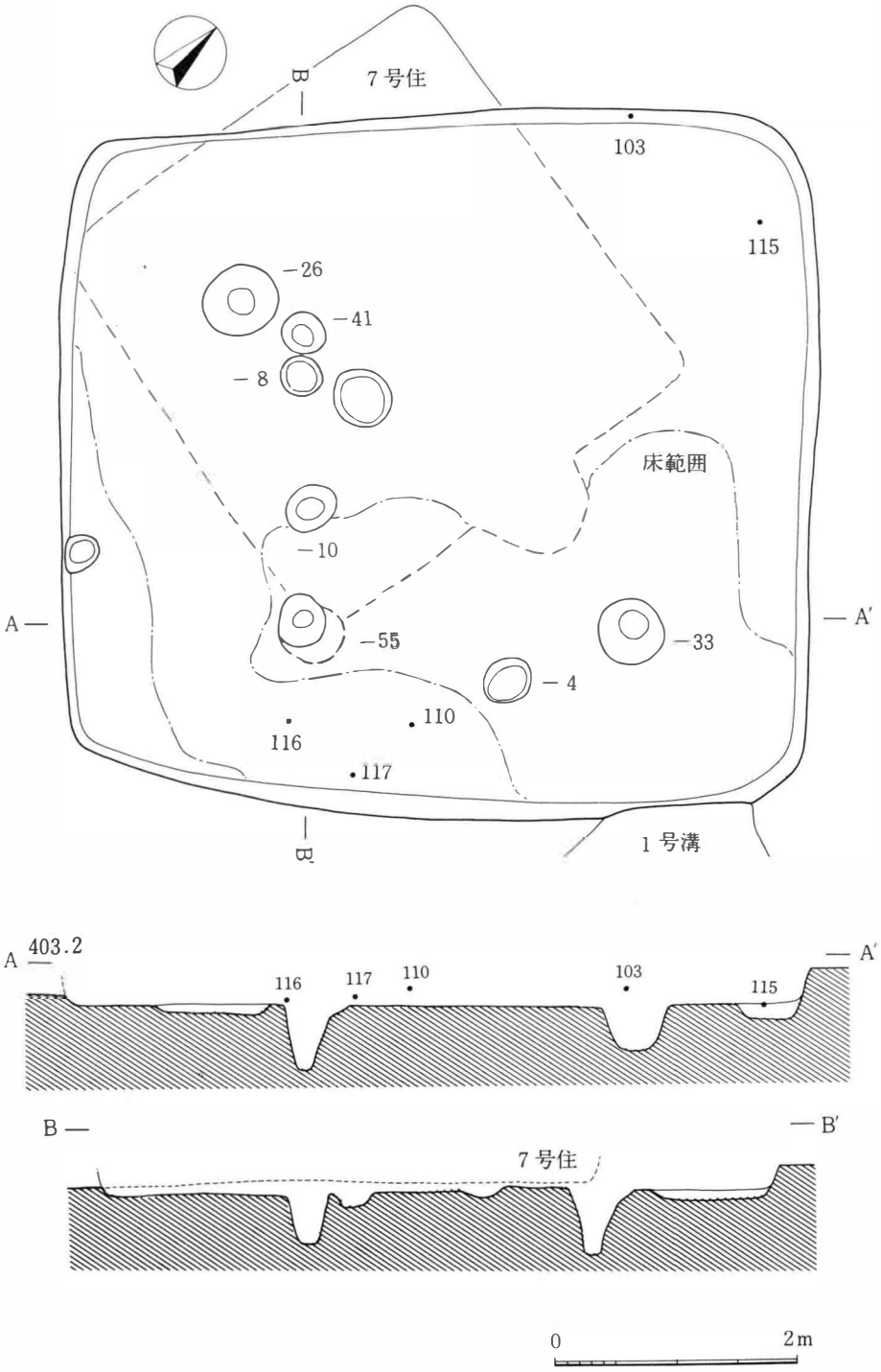


図12　B地点12号住居址実測図

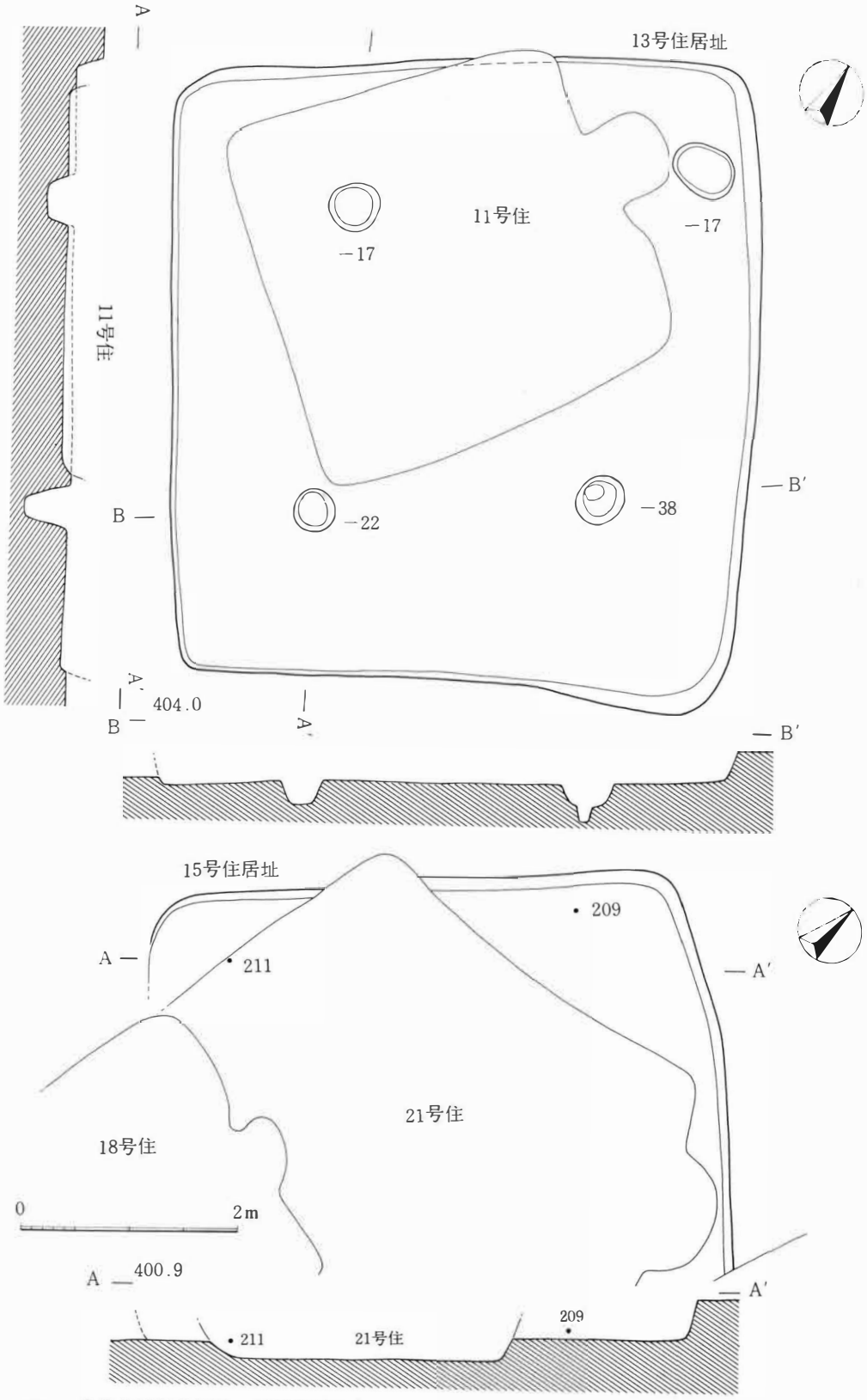


図13　B地点13号住居址・15号住居址実測図

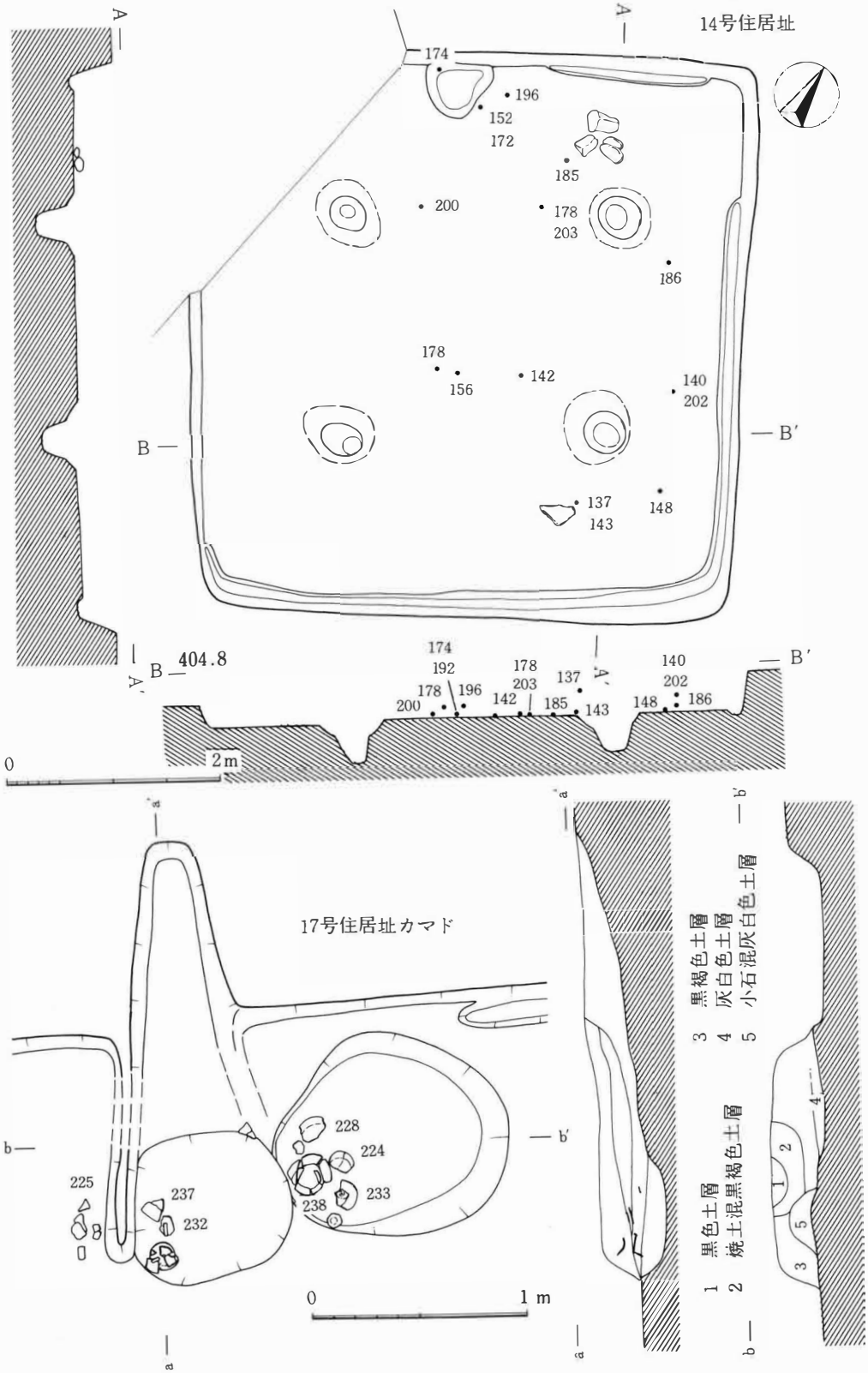


図14　B地点14号住居址・17号住居址カマド実測図

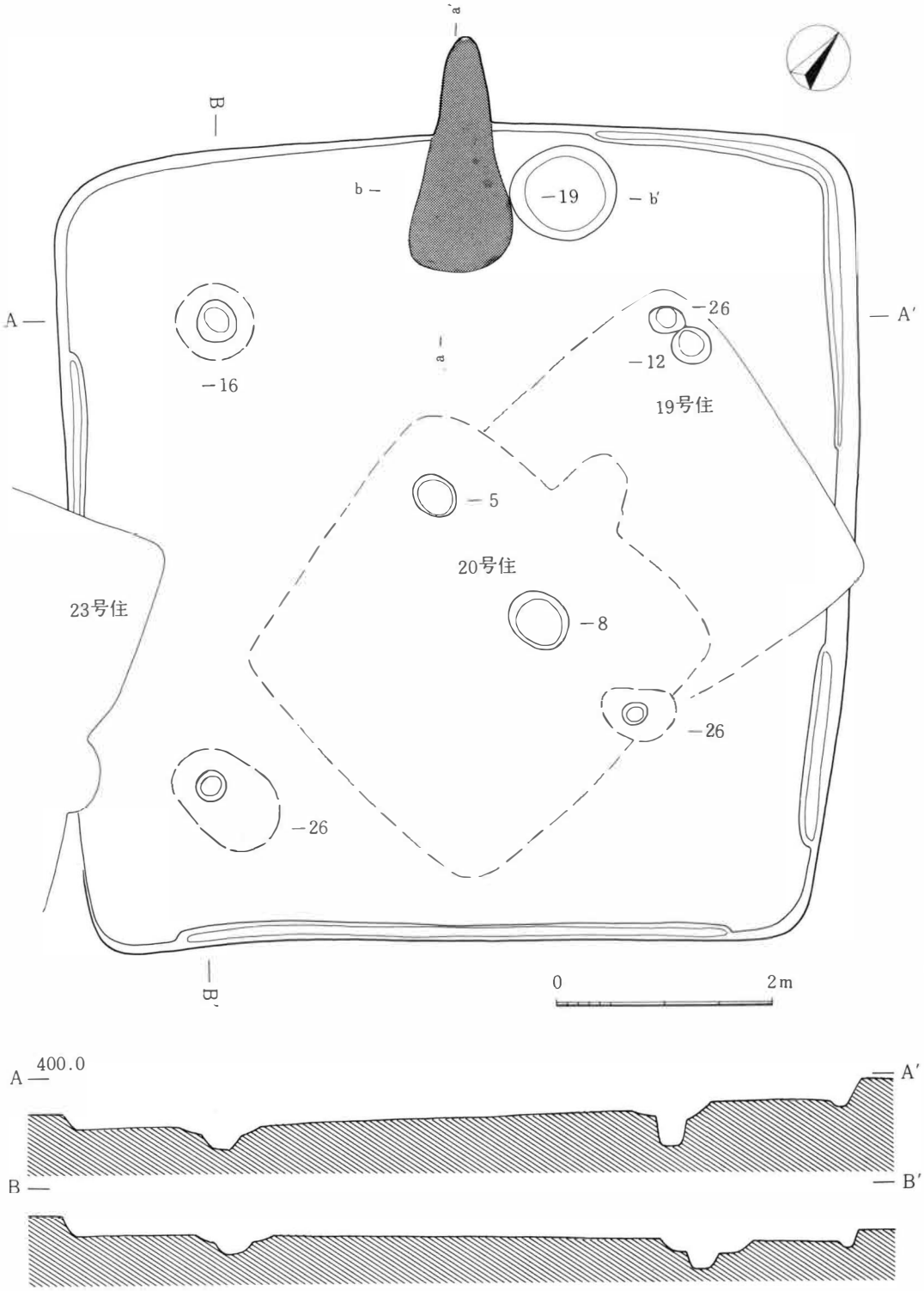


図15　B地点17号住居址実測図

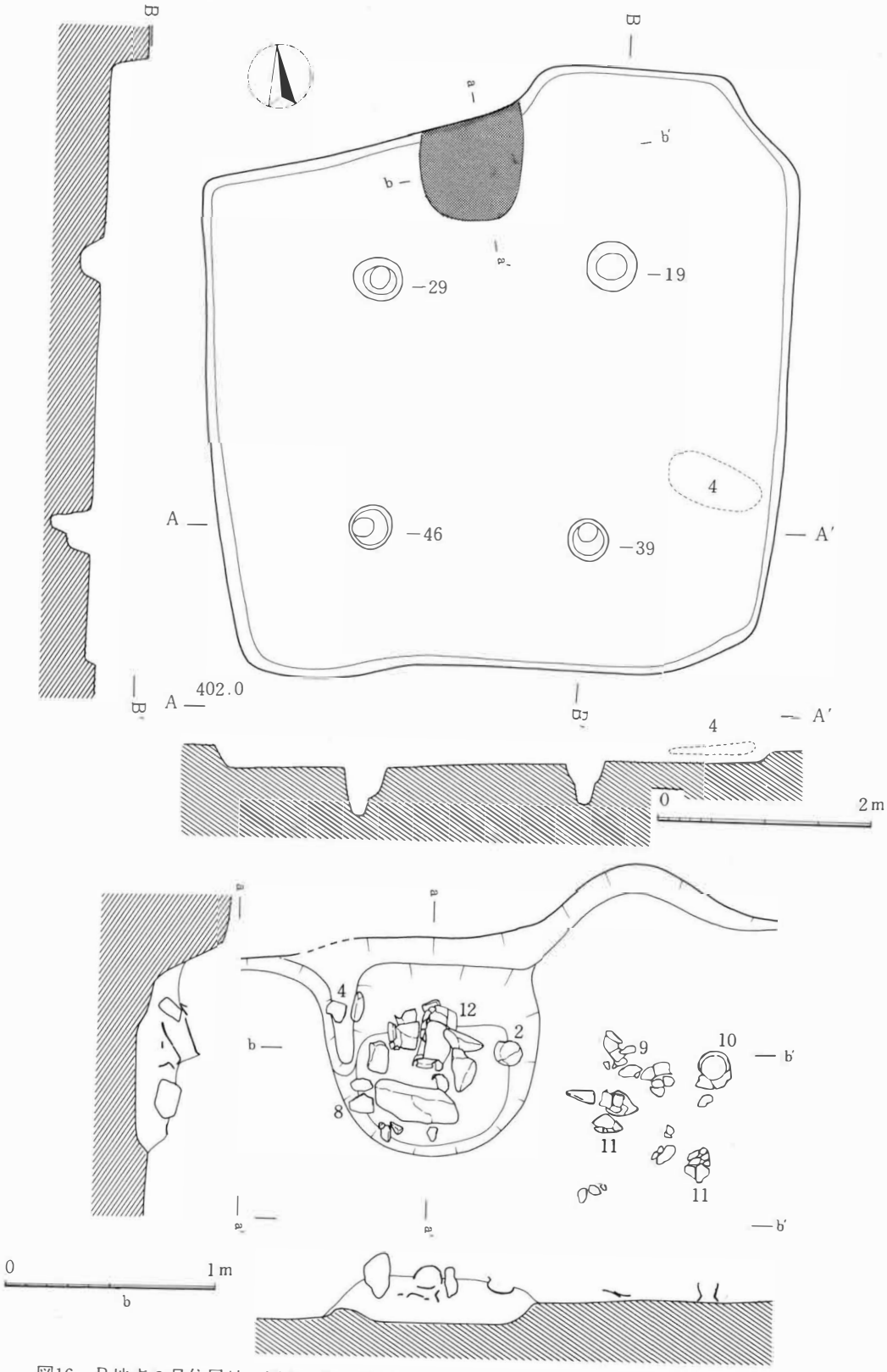
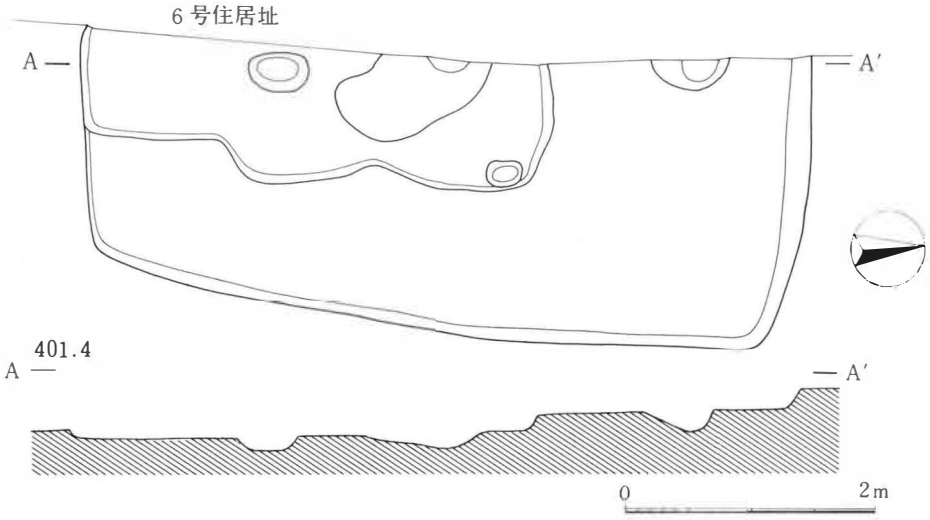


図16　B地点８号住居址、同カマド実測図



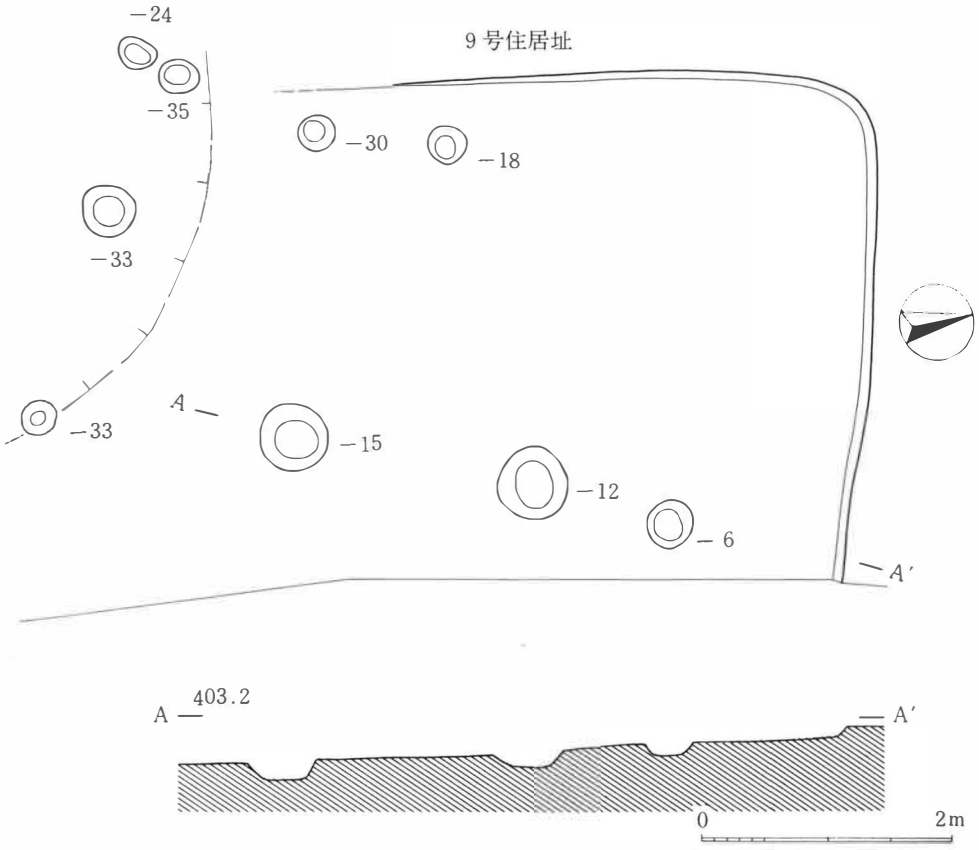


図17　B地点6号住居址・9号住居址実測図

4　平安時代の遺構

2号住居址（図18）

4.4×4.3ｍの方形を呈し、壁高は15ｃｍを測る。北壁際の床面に幅20～30ｃｍ、深さ15ｃｍの溝が掘り込まれているが、性格は不明である。東壁中央部に位置するカマドは、構築材が原形をとどめず、上部に薄い焼土層を伴う浅いピットとして遺存するのみである。なお北東隅、南西隅の壁外にそれぞれ小ピットが検出されている。

遺物　土師器・須恵器（図68－１～７）が出土している。床面からの出土はなく、全て浮いた状態である。

5号住居址（図19）

一辺3.8ｍの方形を呈し、壁高は15ｃｍを測る。北壁中央部に位置するカマドは、比較的遺存状況が良好で、焚き口袖を板状礫による石芯とし、架設された天井石が内部に落ち込んだ状況で検出されている。焚き口は深さ20ｃｍの凹みとなり、燃焼部が壁外に50ｃｍ程張り出す方形を呈し、煙道の一部が遺存している。カマドに向って右側には深さ10ｃｍの長円形貯蔵穴が存在する。

遺物　土師器・須恵器（図69－23～36）が出土し、カマド・貯蔵穴内とその周辺に集中してみられる。貯蔵穴内出土の甕（34）は、坏（32）を内包した状態で検出されている。

7号住居址（図20）

3.8×3.9ｍの方形を呈し、壁高は30～10ｃｍを測る。12号住に重複して構築されている。東壁中央部に位置するカマドは、焚き口袖の角礫による石芯が遺存し、燃焼部は壁外に50ｃｍ張り出し円形を呈するものである。カマドに向って左側には、壁に接して深さ15ｃｍ半円形の貯蔵穴がみられ、遺物とともに大小の礫が落ち込んだ状態で検出されている。

遺物　土師器・須恵器（図70－37～52）が出土し、カマド、貯蔵穴内とその周辺に集中してみられる。

10号住居址（図18）

一辺5ｍ内外の方形を呈するものと思われ、壁高は30～10ｃｍを測る。西側が調査区外であるため全形は明らかではなく、掘り込みの検出も不整形である。北壁にみられる張り出しは、カマドの痕跡となる可能性も考えられるが判然としない。

遺物　土師器・須恵器（図68－８～11）が出土している。出土量は少く全て破片である。床面出土の鉢（10）は古墳時代遺物の混入品である可能性が考えられる。

11 号住居址（図 21）

3.5×3.3 mの方形を呈し、壁高は 30 cm を測る。古墳時代住居址 13 号住に重複して構築されるものである。北東壁中央部に位置するカマドは、壁外に 50 cm 程張り出す方形のピットとして残されてる。燃焼部は火熱により焼土化しているものの、構築材の遺存はみられない。カマドに向って右側の壁際には、深さ 15 cm 径 90 cm の円形貯蔵穴が存在する。

遺物　土師器・須恵器（図 71－53～63）が出土している。出土個体は須恵器を除き土師器甕で占められており、坏類は検出されていない。特にカマド内には甕破片の集中が著しい。

16 号住居址（図 21）

一辺 4.3 mの方形を呈するものと思われるが、南壁と南半の床面は検出されるに至っていない。壁高は北壁で 20 cm を測る。カマドは北壁中央部に位置するが、ほとんど旧状をとどめず、不整形の凹みと若干の焼土が遺存するのみである。床面には小ピットが 3 ケ所と周溝様溝が存在する。

遺物　土師器・須恵器（図 68－12～16）が出土しているが、出土量は少い。

18 号住居址（図 22）

一辺 2.8 mの方形を呈するものと思われ、住居址群中最小の規模を示している。南壁と南半の床は検出するに至っていない。壁高は北壁で 10 cm を測り、かつ 21 号住に重複して構築されている。北壁中央部に位置するカマドは、壁外に 20 cm 程張り出す方形を呈し、構築材と思われる礫が内部に落ち込んだ状態にある。床面には小ピットが 3 ケ所に認められる。

遺物　土師器・須恵器（図 68－17～22）が出土している。出土量は少い。

19 号住居址（図 22）

一辺 3.4 mの方形を呈するものと思われるが、20 号住が重複して南壁は破壊されている。壁高は北壁で 15 cm を測る。カマド等の施設は検出されず、遺物の出土も認められない。

20 号住居址（図 22）

3.4×3.2 mの方形を呈し、壁高は 25～15 cm を測る。19 号住に重複して構築されている。カマドは北壁中央部に位置し、焚き口袖の石芯が片側のみ遺存している。燃焼部は壁外に 50 cm 程張り出し、深さ 15 cm の円形ピットとして遺存している。

遺物　土師器・須恵器（図 72－64～71）がカマド周辺を中心として出土している。

21 号住居址（図 23）

一辺 4.5 m前後の方形を呈するものと思われるが、東側は調査区外となっている。古墳時代住居 15 号住に重複し、平安時代住居 18 号住に重複されるもので、南壁は 18 号住により破壊されて

いる。壁高は北壁において25 cmを測る。カマドは北東隅に近い東壁に設けられているが、遺存状況は明瞭でなく、やや不整形に検出されている。構築材は石芯を用いず、砂混じりの粘質土によるらしく、焚き口の袖部がわずかに遺存した状況である。

遺物　土師器・須恵器（図73－78～95）が出土した他、平瓦の小破片も検出されている。土器はカマドを中心とした東南隅に集中してみられ、カマド内から多数個体の甕破片が検出されている。瓦破片は図示していないが、覆土中より出土したもので、B地点では他に出土例がない。

22号住居址（図23）

2号溝が重複し、西半は床面を一部確認したにとどまるが、一辺4.0m前後の方形を呈するものと考えられる。南壁も検出されるに至ってはいないが、北壁においての壁高は10 cmを測る。カマドは北東壁中央部に位置し、壁外に40 cm程張り出した円形を呈する。焚き口袖には角礫による石芯が遺存するとともに、階段状に落ち込んだ燃焼部中央に支脚と思われる長さ20 cmの柱状礫が遺存している。焚き口の巾は35 cmと狭小である。

遺物　土師器（図72－73～77）がカマド内より出土している。なおカマド上部検出中に北宋銭皇宋通宝（図98－5）が検出されたが、混入品と判断されるものである。

23号住居址（図24）

一辺3.7mの方形を呈するものと思われるが、南半が建物基礎により切削されている。壁高は25 cmを測る。カマドは北東壁中央に位置し、遺存状況は良好である。4枚の板状礫を石芯とし、焚き口天井部には角柱状の礫を架設している。燃焼部はやや凹み、壁外への張り出しはわずかとなっており、中央部には長さ15 cmの柱状礫を30 cm間隔に並置し支脚に用いている。

遺物　土師器・須恵器（図74－96～113）が出土し、完形あるいは完形に近い遺物が多い。カマド内及び周辺の床面に遺存しており、良好な一括出土品と把握される。

1号、2号土壙（図24）

16号住の東北に隣接するもので、15 cm程の円形の掘り込みにより、1号土壙は内部に集石を有する。その位置から、住居址との関連が想定されるところである。

遺物　1号土壙からは破片ながら比較的豊富に土師器・須恵器が集石に混じって検出されている（図75－114～118）。2号土壙は土師坏1点のみの出土である（図75－119）。

2号溝（図8）

8号住、22号住に重複するもので、ほぼ南北方位に走るものである。南北両端の掘り込みは次第に浅くなり、その連続は不明であるが、中央部で幅1.5m、深さ40 cmを測る。

遺物　出土量は少いが該期の土師器（図75－127・128）が検出されている。

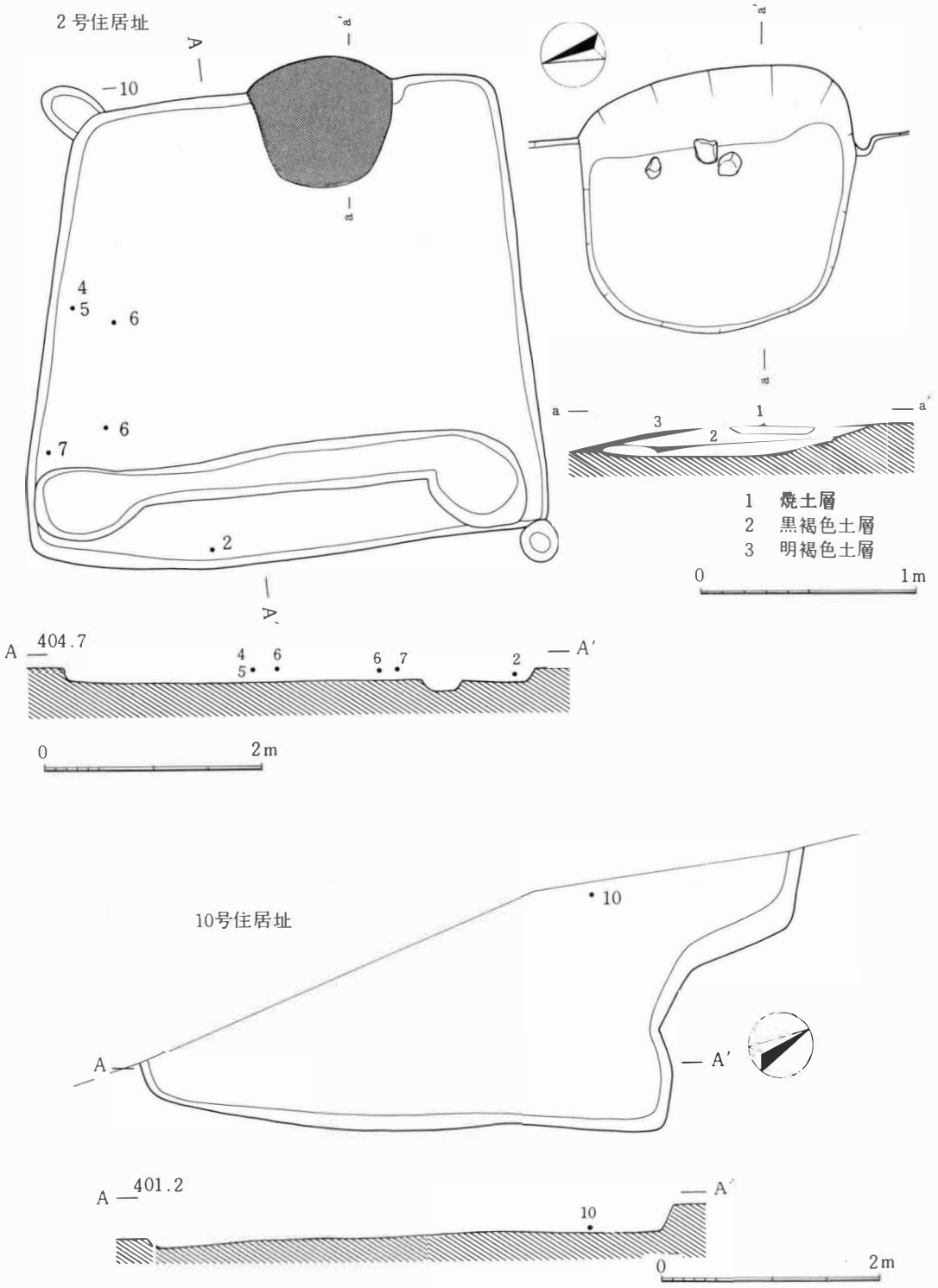


図18　B地点2号住居址・10号住居址実測図

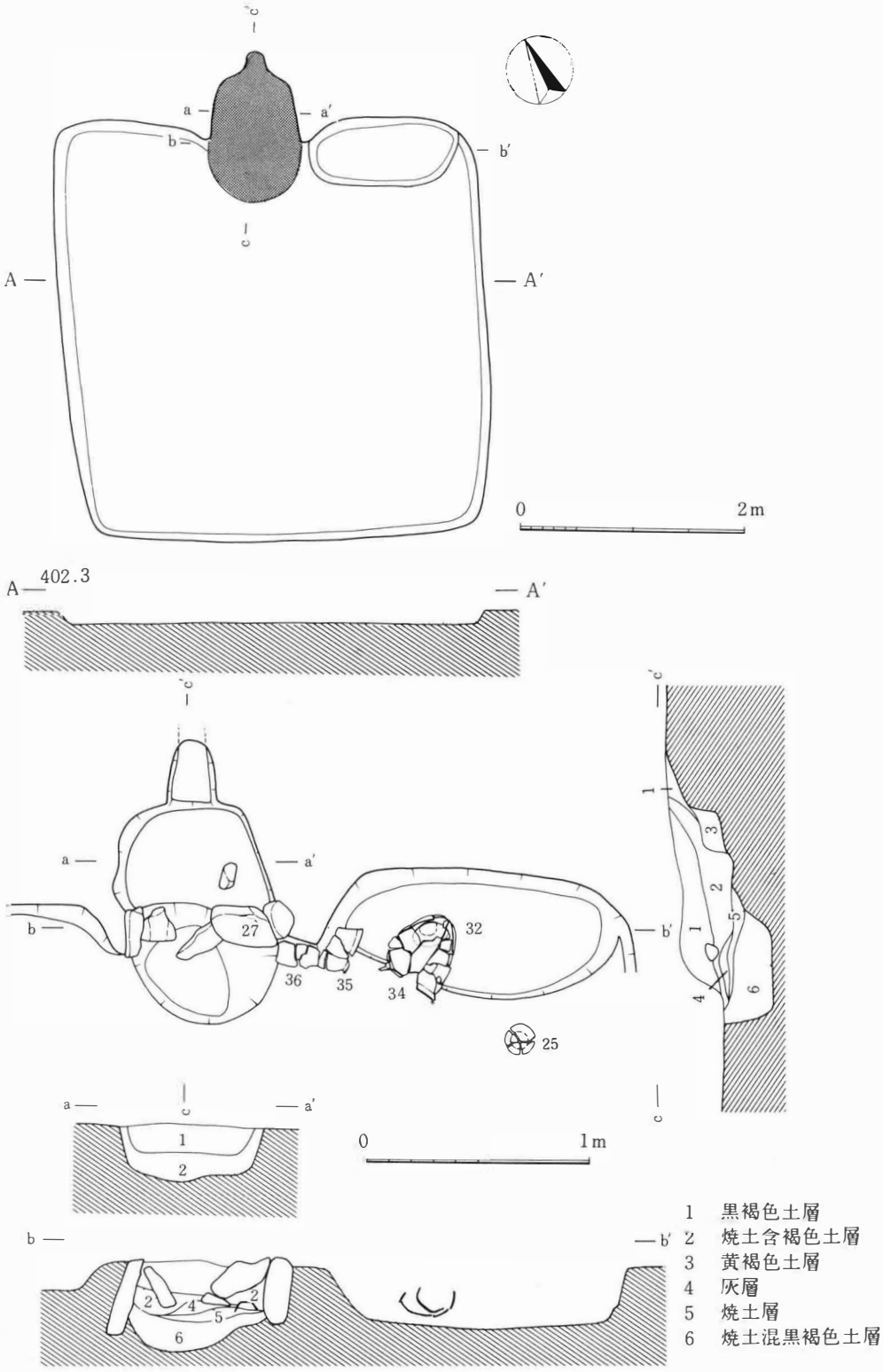


図19　B地点5号住居址、同カマド実測図

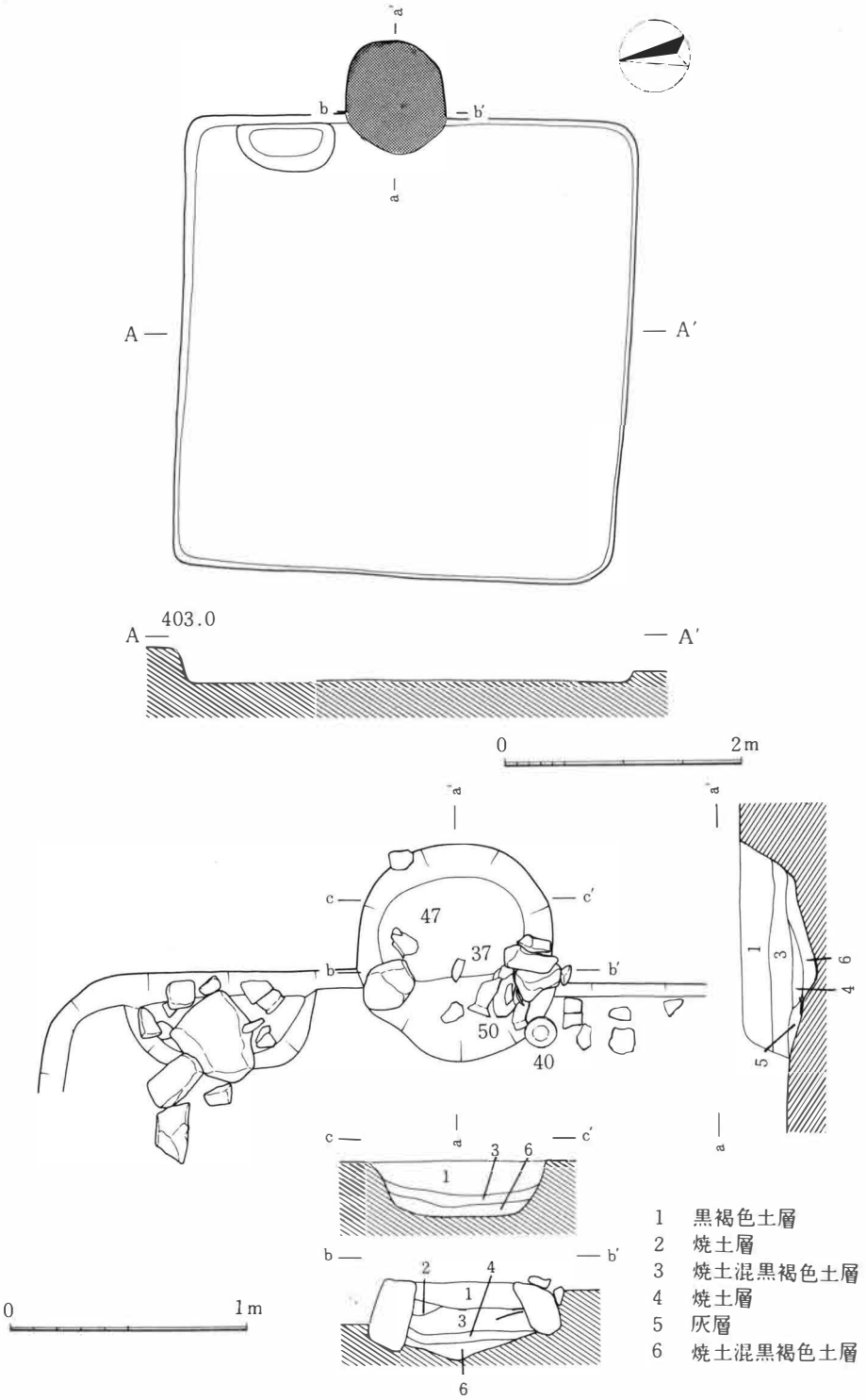


図20　B地点7号住居址、同カマド実測図

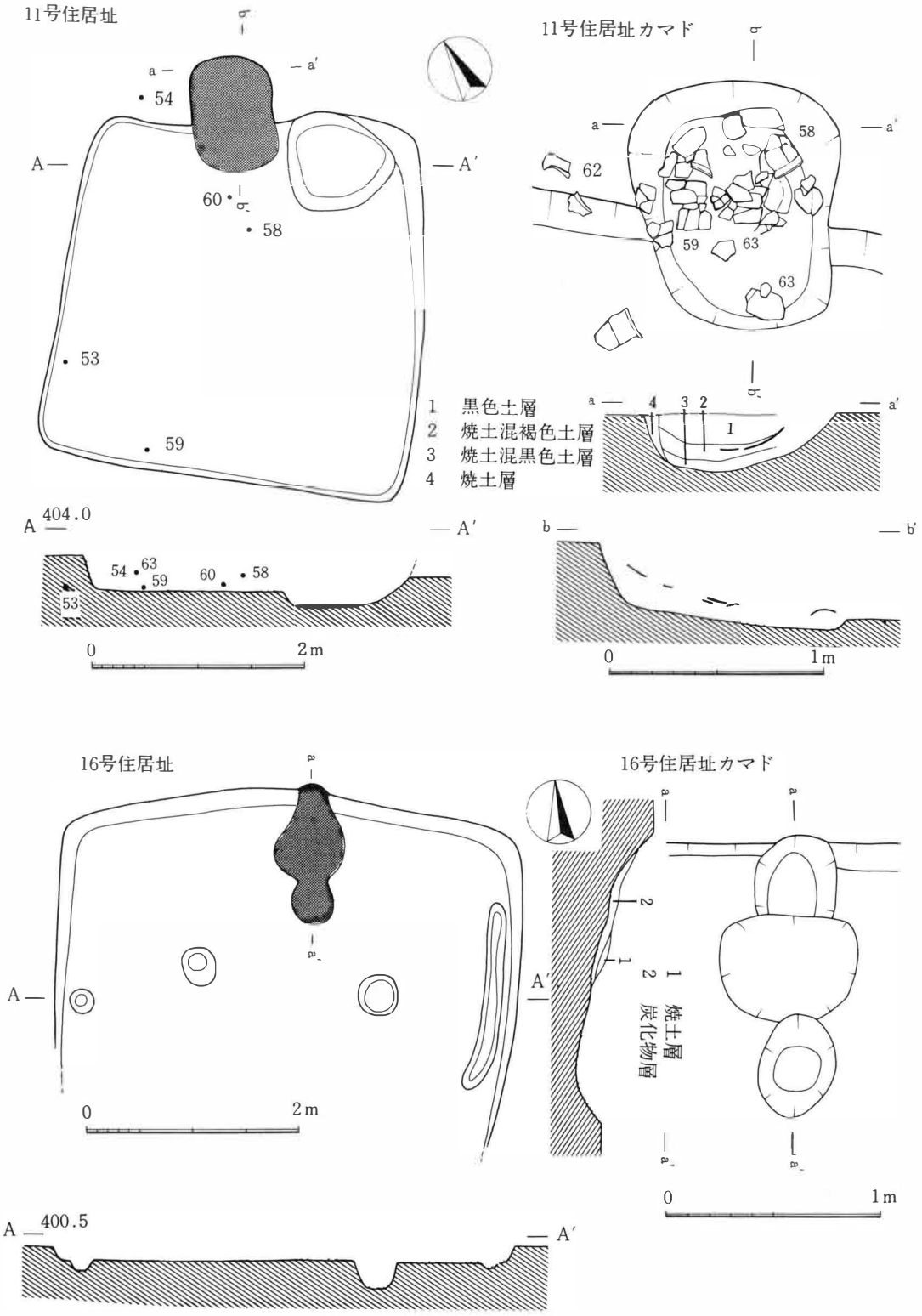


図21　B地点11号住居址・同カマド、16号住居址・同カマド実測図

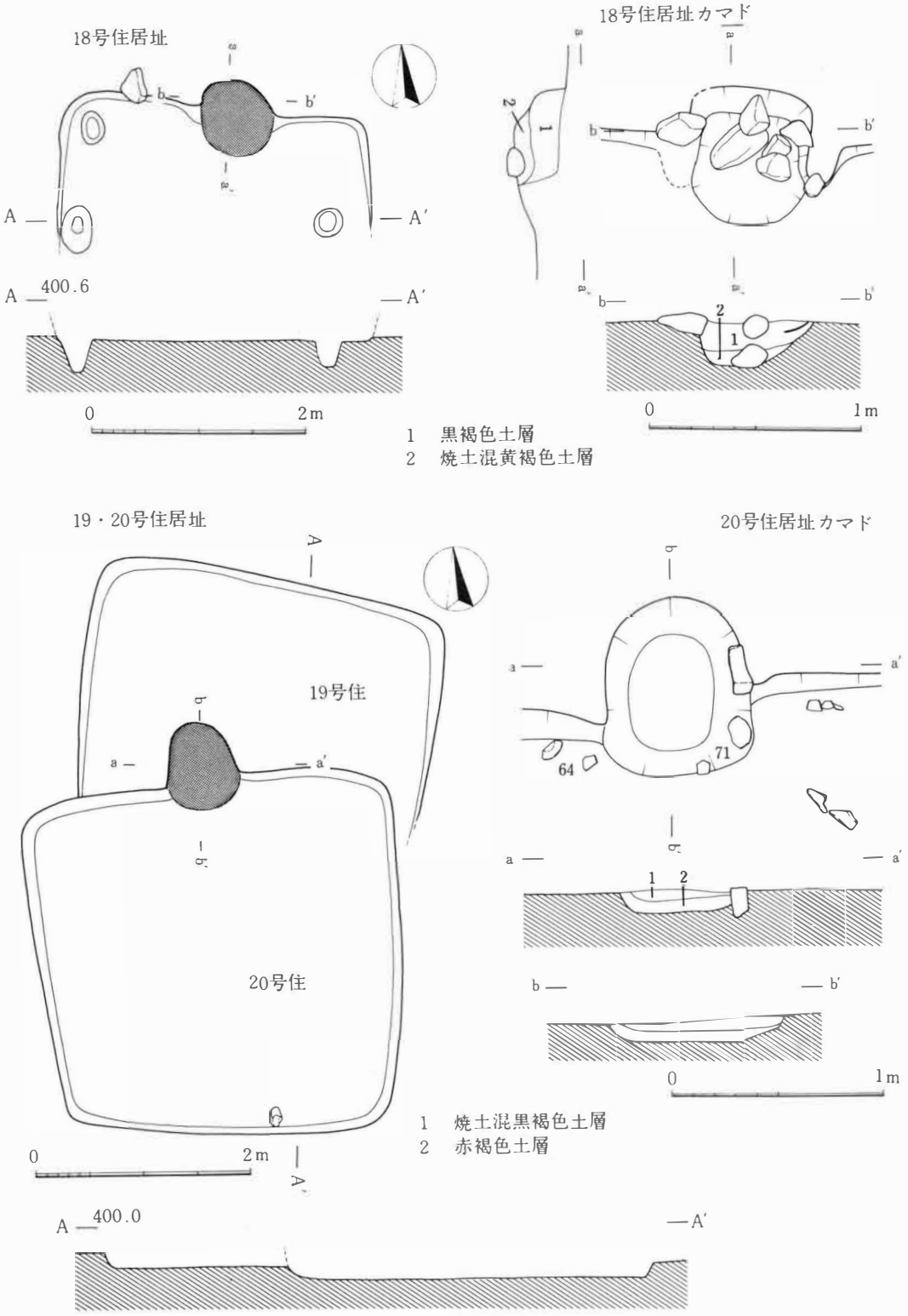
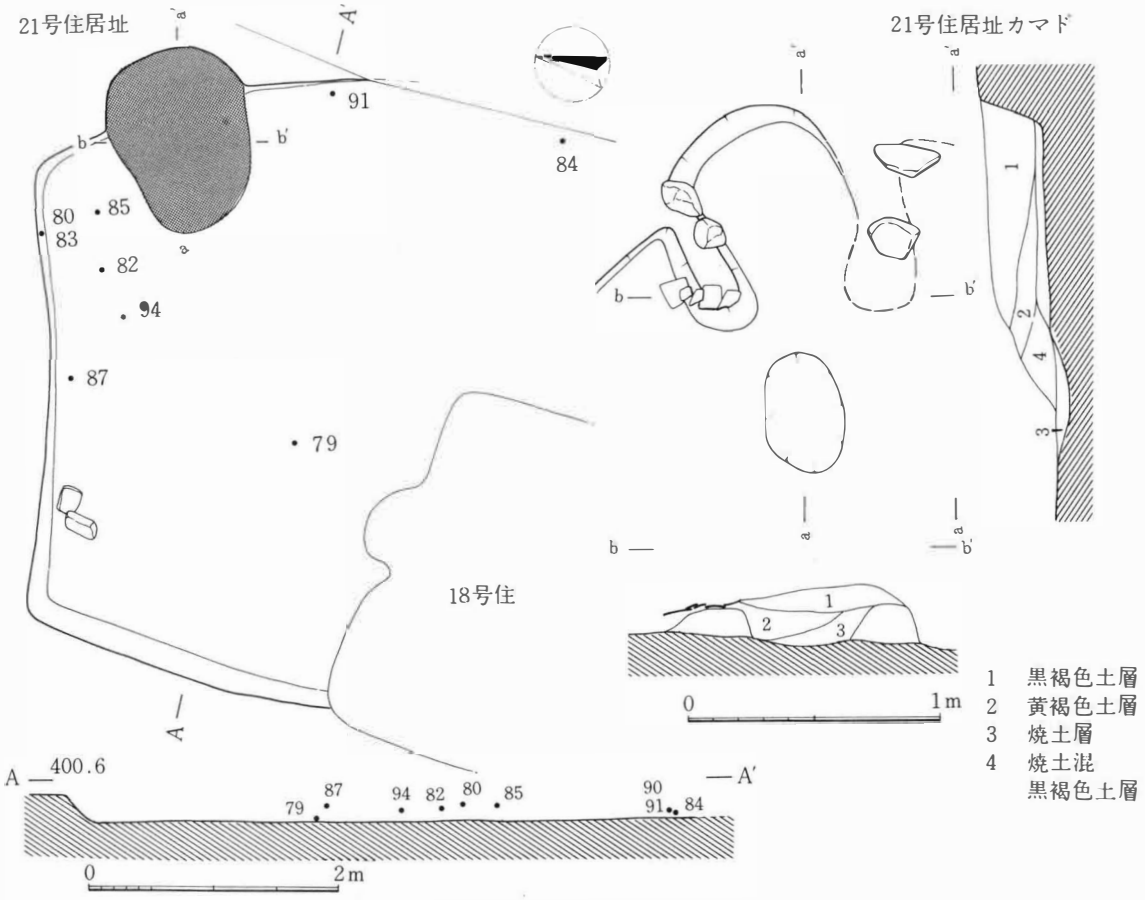


図22　B地点18号住居址・同カマド、19·20号住居址・20号住居址カマド実測図



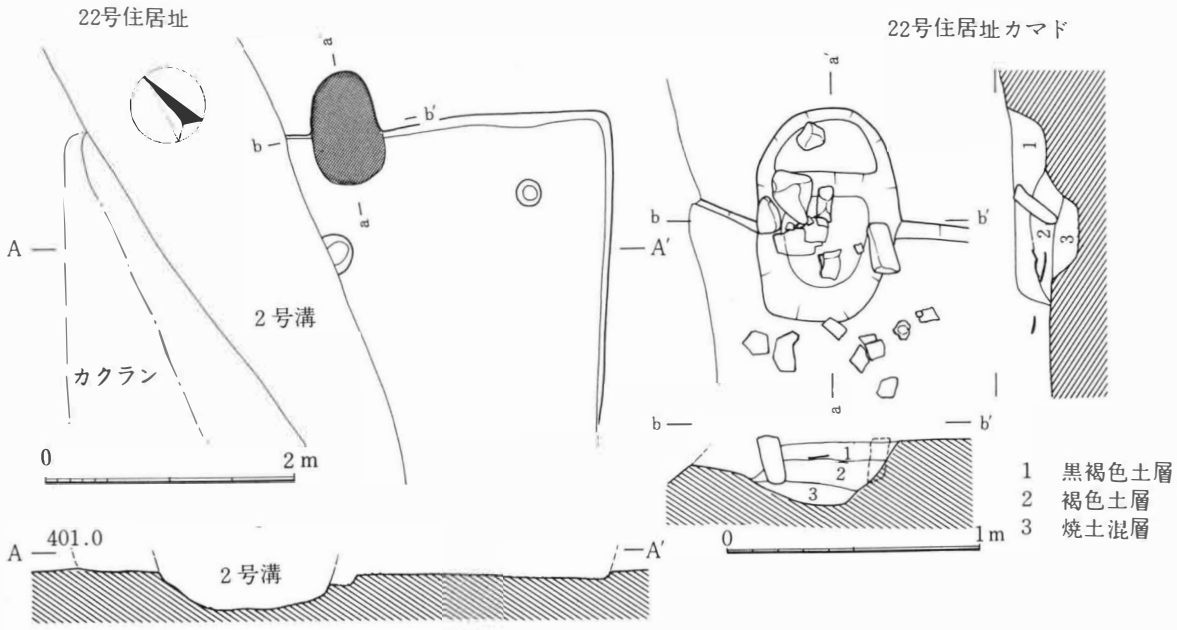
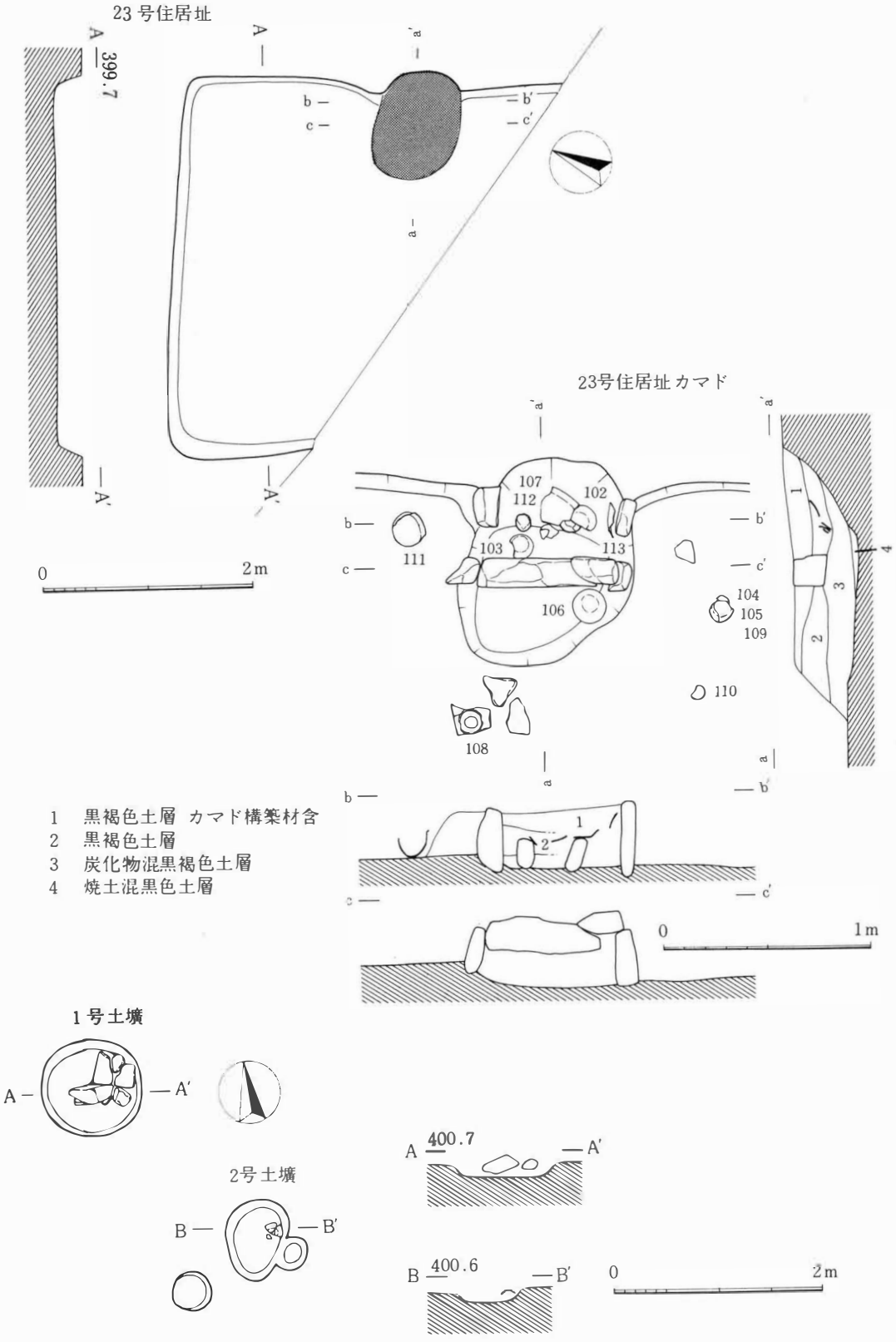


図23　B地点21号住居址・同カマド、22号住居址・同カマド実測図



1　黒褐色土層 カマド構築材含
2　黒褐色土層
3　炭化物混黒褐色土層
4　焼土混黒色土層

図24　B地点23号住居址・同カマド、1・2号土壙実測図

第Ⅳ章　C地点の調査

1　概要　（図25・26）

調査対象地は南斜面を見下ろす崖錐頂部に位置し、北側が浄水場の造成により盛土され、南側は畑地のため1mの段差をもって切削された状況である。遺構面における標高は、北端において430.5m、南端において428.5mを測り、南への傾斜地となっている。土層序は、小礫を混じえた黒褐色土より漸移的に転石を混じえた黄褐色砂礫質土へ移行し、均質な堆積状況が認められる。

検出された遺構は、住居址3軒、土壙15基、土壙墓1基、幅5mに及ぶ大溝である。住居址と溝は、出土遺物がほぼ同時代を示すもので、平安時代の末期に属するものと考えられる。土壙は、住居址とならない掘り込み、柱穴とは考えられないピット等をここに含めたため、その性格は必ずしも同質ではないものといえよう。調査地北半の1号住北側に集中する1～6号土壙は、出土遺物より住居址、溝とほぼ同時期に位置づけられるものと考えられる。調査地中央部に溝を伴って集中する8～14号土壙は、五輪塔・銭貨が出土しており、墓址である可能性が指摘され、年代も中世にまで下降するものと考えられる。土壙墓は、人骨の遺存状況、埋葬方法から考えて、近世以降の所産といえよう。

注目される遺物として、溝より単独出土した軒丸瓦瓦当部と、3号住居址から出土した製鉄関連遺物があげられる。後者はフイゴ羽口と鉄滓多数であり、溝内からも同様の遺物が若干出土しており、遺跡内に平安時代末の製鉄遺構が存在することを裏づけるものである。

2　遺構

1号住居址（図27）

北壁長3.2m南壁長4.8mの台形を呈し、壁高35～15cmを測る。床面は軟弱で径30～120cmのピットが9ケ所に存在し、深さ20～30cm掘り込みによる。ピットには整列した状況は認め難く住穴とは考えられない。南壁際の2つのピット上部には礫が集積され、壁外に張り出す状況にありカマドの痕跡とも考えられるが、焼土は確認されていない。東壁際のピットには礫群とともに多数の遺物が落ち込んだ状態で検出され、貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物　土師器・灰釉陶器（図95－1～24）、鉄製品・銅椀（図98－6・7・11）が出土し、量も豊富である。土器類は東壁際のピット内とその周辺床面に集中してみられ、銅椀は北東隅に近い北壁中位に張り付いた状態で出土している。

2号住居址（図27）

4.0×2.8mの方形を呈し、壁高は20～5cmを測る。西壁の一部は攪乱により失われている。

カマドは東壁に遺存するものの、構築材をとどめず、焼土の堆積を有した浅い凹みを残すのみである。床面には小ピットが11ケ所に存在するが、整列した状況は認められない。

遺物　土師器(図96－25～33)が出土している。出土量は少いものの、壁に張り付いた状態で完形坏3点が検出されている。

3号住居址（図28）

不整形の掘り込みにより平面形は判然としない。西側は調査区外のため未検出となっている。床面には小ピットが多数認められるが、いずれも10 cm内外の浅い掘り込みによる。東壁際のピットを中心として、製鉄関連遺物と若干の焼土が分布する。カマド、炉体の痕跡とも考えられよう。　遺物　土師器（図96－34～39)、フイゴ羽口（図98－8・9)、鉄滓が出土している。鉄滓は33点、総重量518 gを計るものであり、坏にも窯滓の付着したもの(38)が存在する。

土壙（図29・30）

1・2・3・5号土壙から土師器（図97－54～68)、8号土壙から北宋銭熙寧元宝（図98－2)、10号土壙から五輪塔水輪が出土している。1・2号土壙は遺物出土が豊富であり、特に1号土壙は細片となった坏類の出土が著しく多く、特異な遺棄の状況を示すものである。8～13号土壙は、2本の柱穴を伴うL字状の溝に画される形で群集し、出土遺物は墓址の可能性を示している。他に遺物の出土はないが、中世の墓とそれに伴う構築物の痕跡と判断される。7・15号土壙は他に比較して大きな掘り込みによるが、遺物の出土もなく性格は不明である。

溝（図31・32）

調査区を南北に縦断する大溝で、最大幅5.2 m、深さ80 cmを測る。掘り込みは部分的に数段におよび、その断面形は一様ではないが、最深部はV字形に近い形態をとる。堆積土層をみると、最下層に流水により形成されたと思われる砂礫層が存在し、水路としての機能がうかがえるものの、上部にはその痕跡を認め難く、常時流水していたかどうかについては疑問が残る。溝の埋没最終段階には、2ケ所に集石が形成されている。南端の集石からはフイゴ羽口(図98－10)と鉄滓（5点、総重量183 g）が出土している。出土土器類（図96－40～53)は集石の形成される上部土層中から検出されており、下部からの出土は認められない。軒丸瓦瓦当部(図87－1)も単独で同土層中から出土したものである。

土壙墓（図28）

溝に重複して構築されたもので、長径1.7 m、深さ50 cmの長円形を呈し、上部に人頭大から拳大の礫が集積されている。人骨は半ば腐食した状態ではあったが、頭位を北として西面仰臥し、膝を曲げた姿勢で埋葬されていることが確認される。伴出遺物は検出されていない。

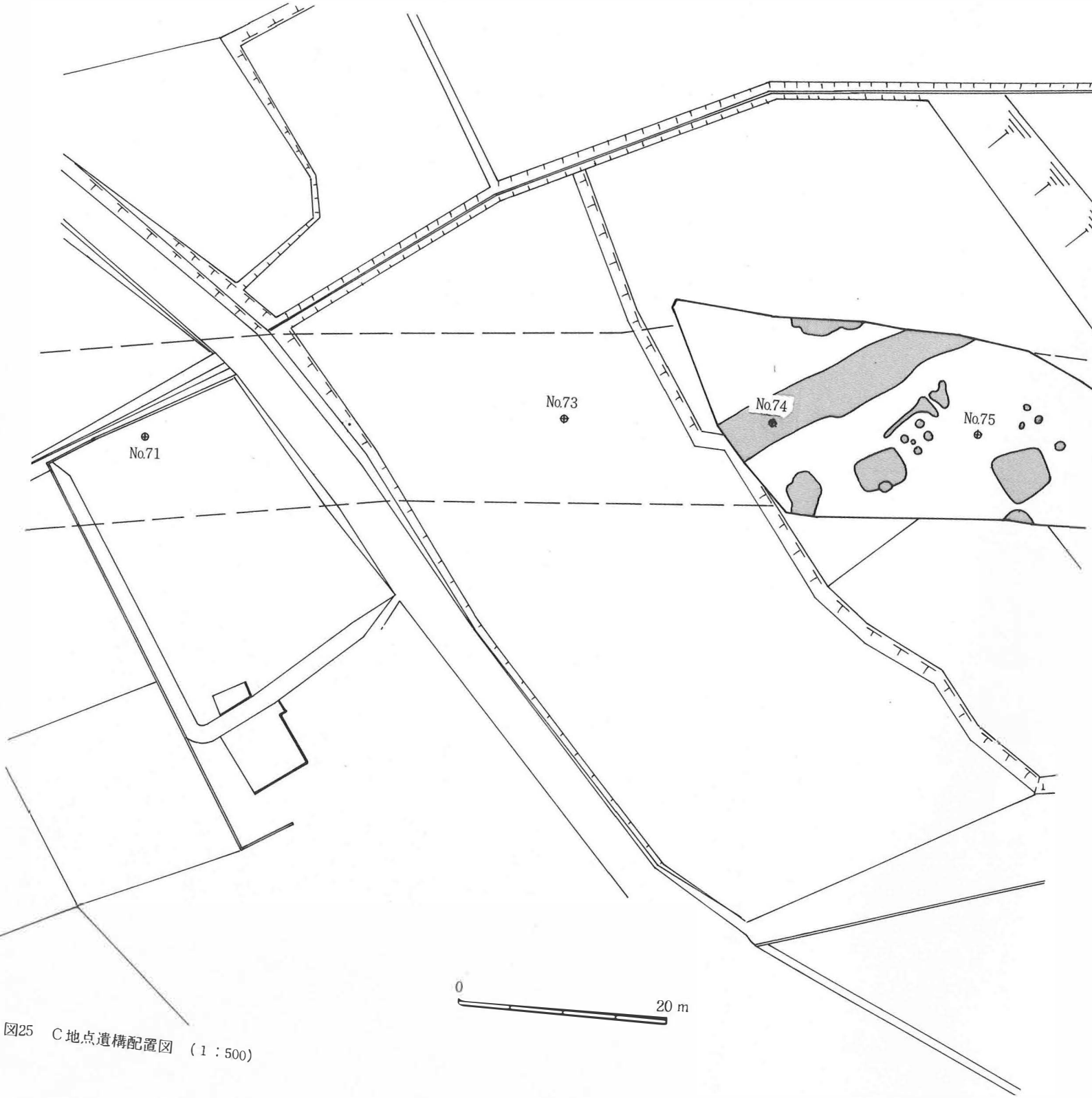


図25　C地点遺構配置図　（1：500）

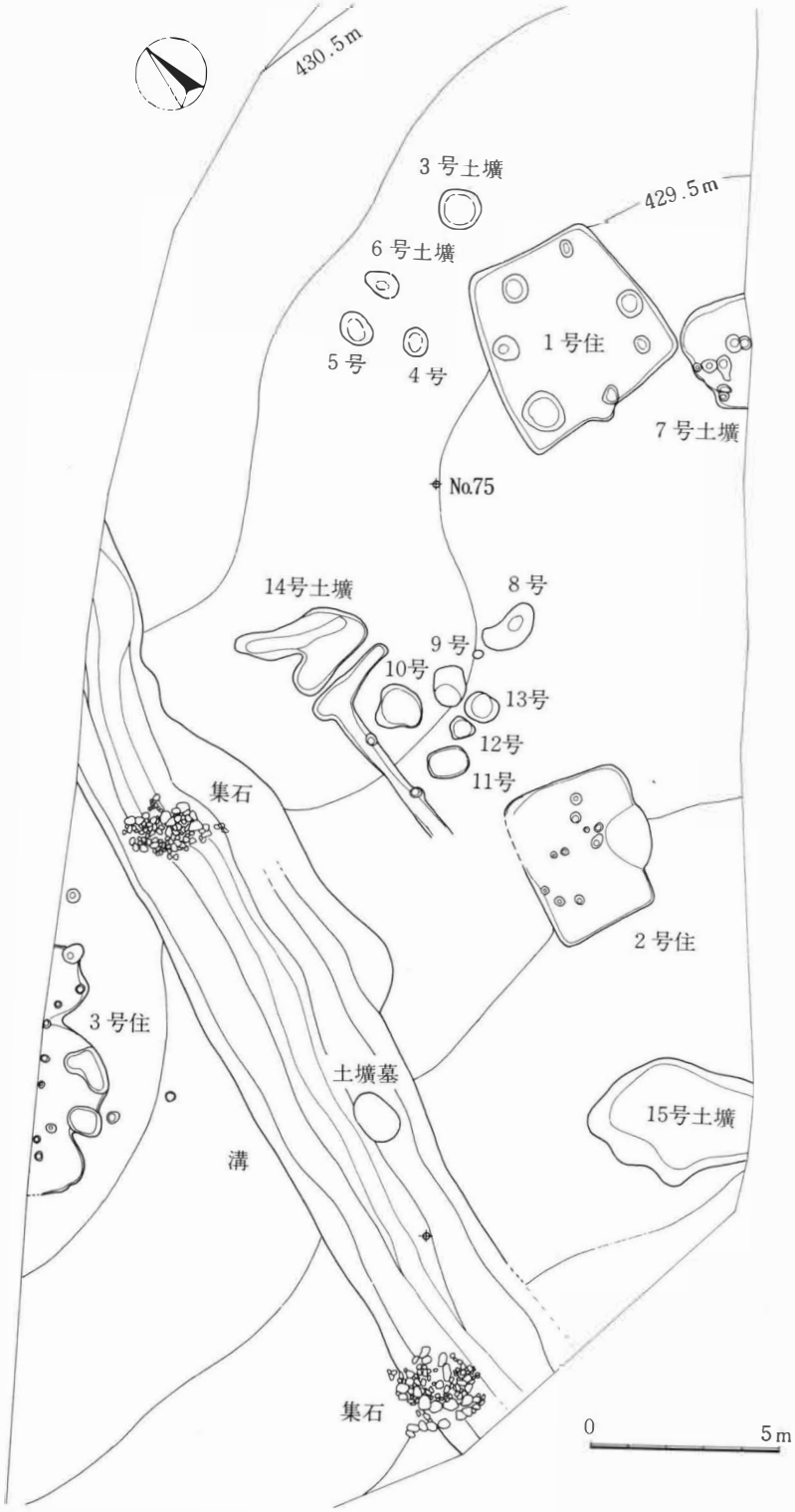
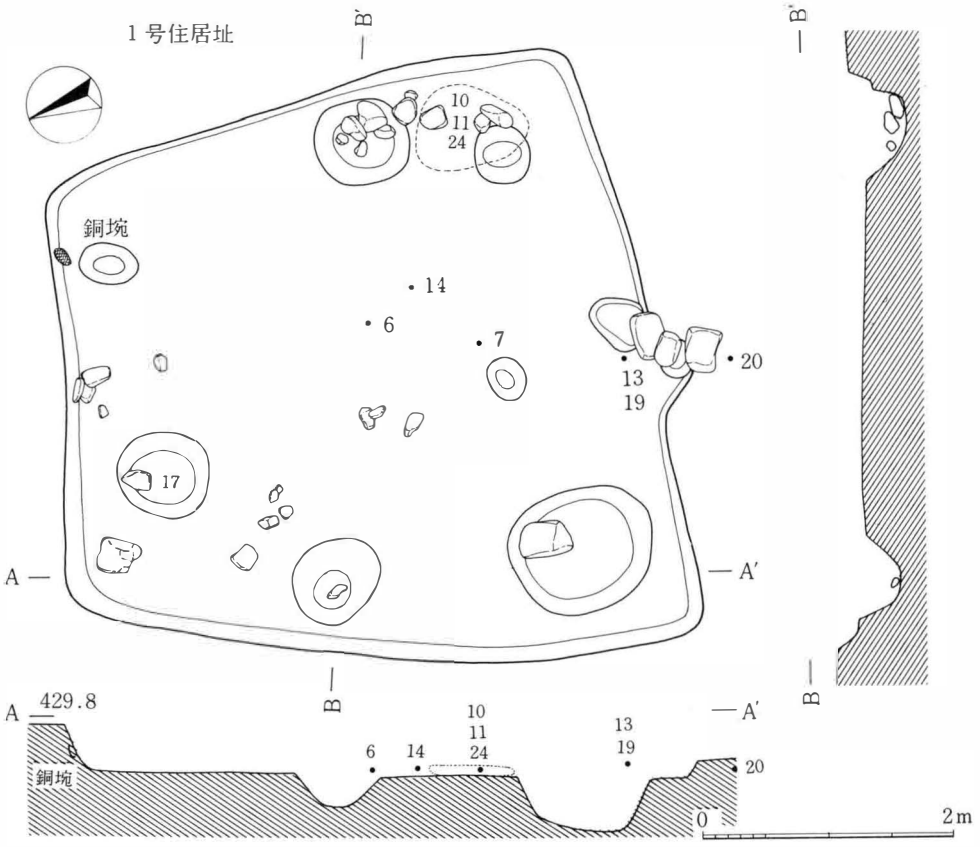


図26　C地点全測図　（1：200）



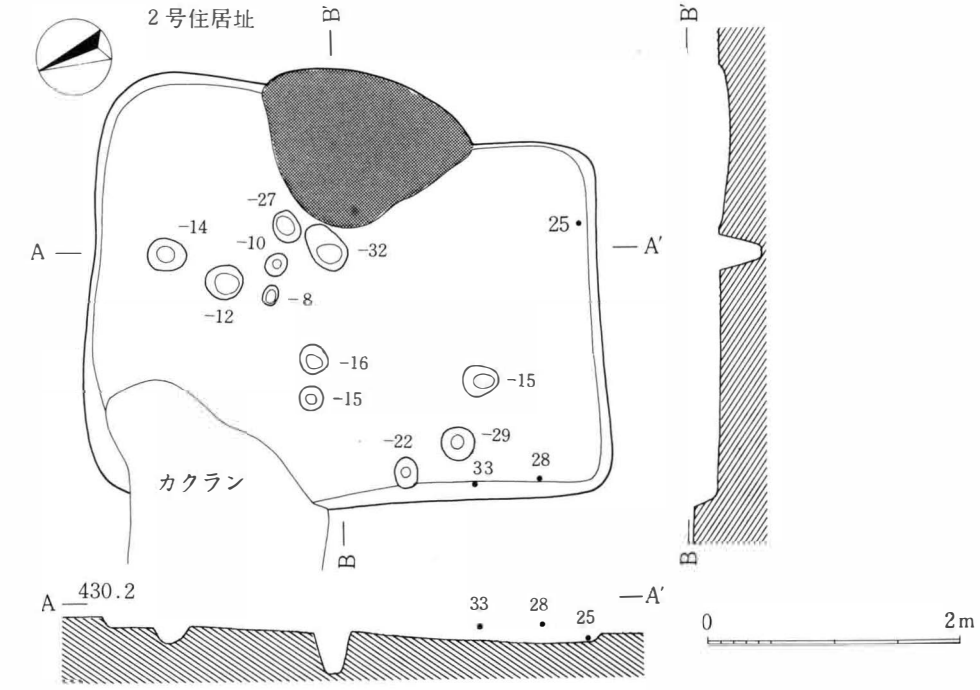


図27　C地点1号住居址・2号住居址実測図

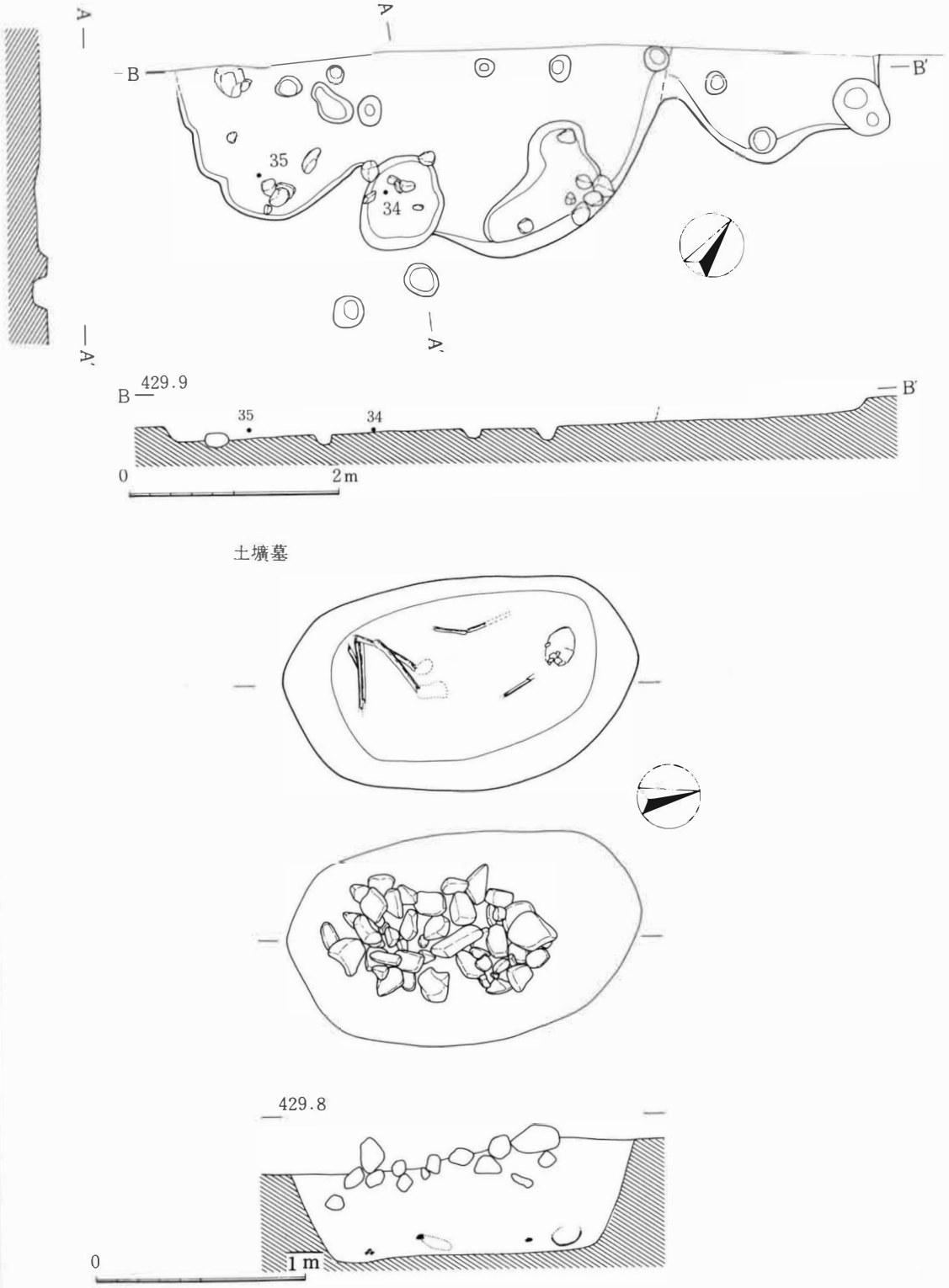


図28　C地点3号住居址・土壙墓(1：30)実測図

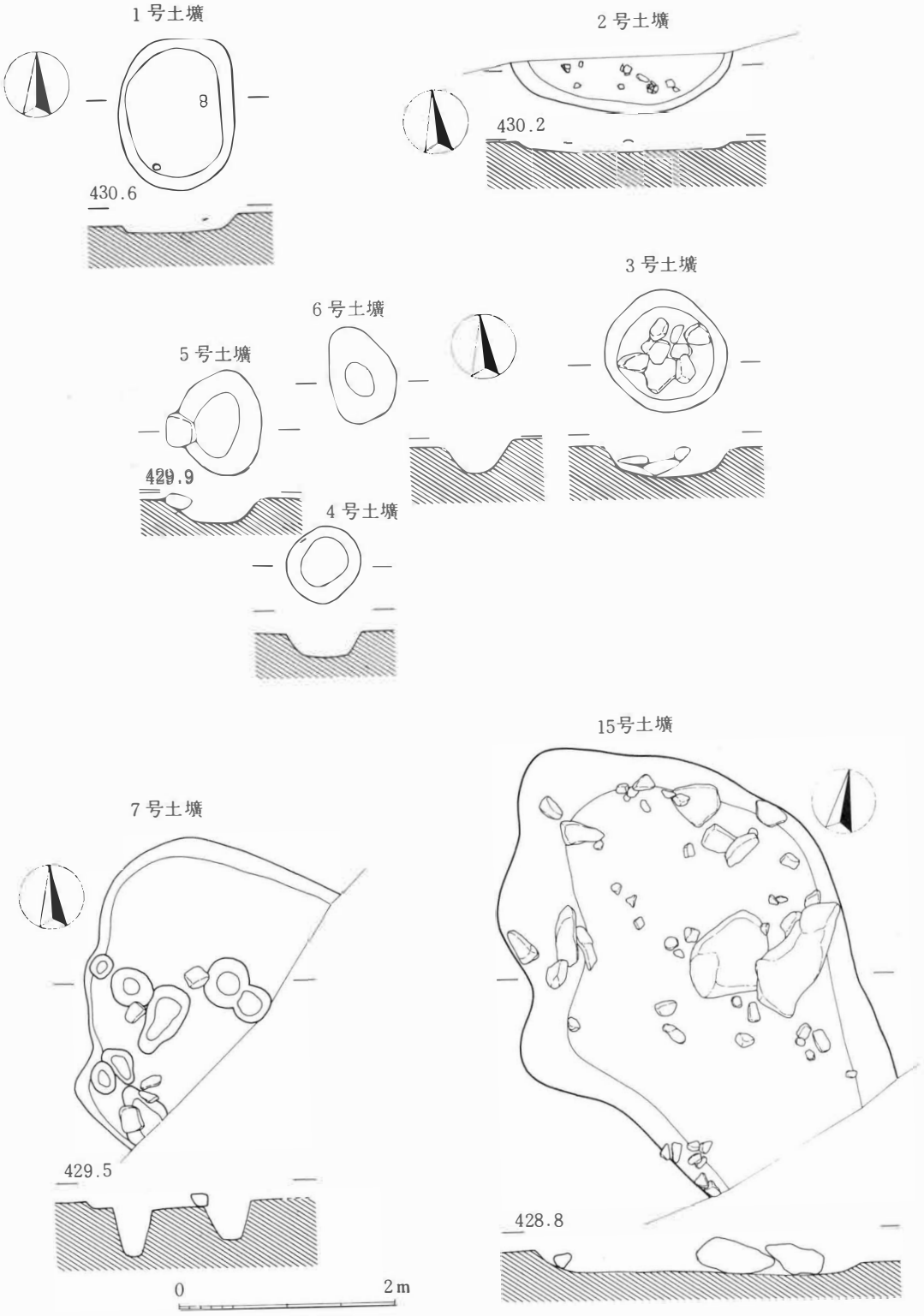


図29　C地点1～7・15号土壙実測図

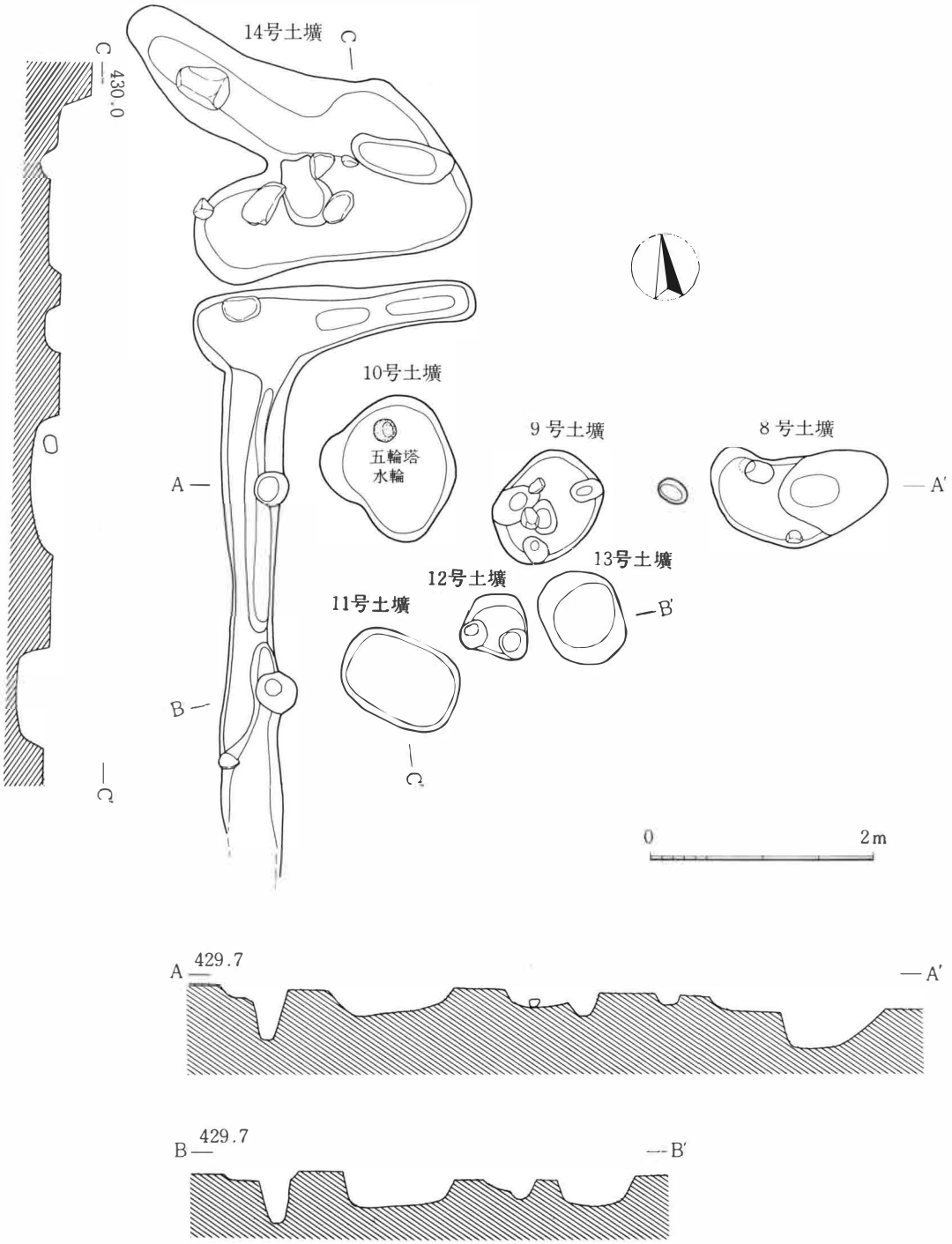


図30　C地点8～14号土壙実測図

図31　C地点溝実測図(1)

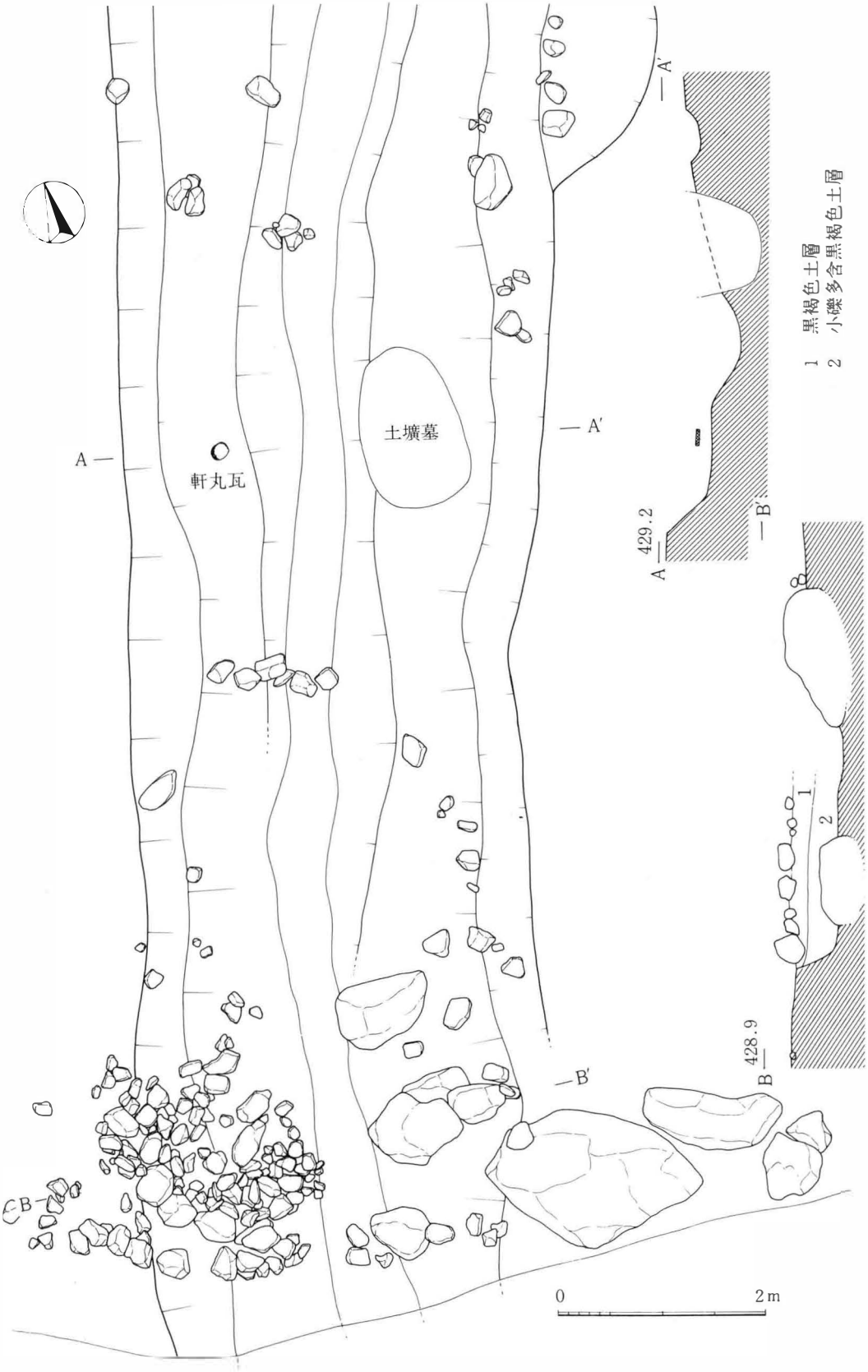


図32　C地点溝実測図(2)

第Ⅴ章　D地点の調査

1　概要（図33～36）

調査対象地は、土京山裾部を流下する土京川右岸の東斜面に位置し、県道に交わる東端が宅地により切削される他は果樹園として利用されている。遺構面における標高は西端において428.5m東端で420mを測り、その比高は8.5mに達する。表土の堆積は薄く、遺構確認面までの深さは30～40cmであり、土層序は小礫混黒褐色土を経て漸移的に大転石を混えた黄褐色礫質土へ移行し、均質な堆積状況が確認される。検出された遺構は住居址17軒、土壙、溝等であり、調査区東半に集中して存在する。住居址の時代別内訳は、弥生時代中期4軒、古墳時代前期2軒、平安時代11軒となり、平安時代住居址が過半を占めている。

(1)　弥生時代（1・2・16・17号住居址）

住居址平面形は径5m前後の円形プランであり、4～6本の主柱穴に囲まれた中央部に、掘り込みの深い炉を有するものである。各住居は調査地全域に疎らな分布状況を呈しており、出土遺物の示す時間幅から、ほぼ同時期に属するものと想定される。住居址の他には、調査区西端に1号土壙が存在するのみである。

(2)　古墳前期（3・4号住居址）

調査地中央部に10mほど間をあけて並列するもので、一辺5m内外の正方形を呈するものと考えられる。ともに炉及び主柱穴の位置は不明瞭であり、形態もやや不整形に検出されている。調査区全体での該期遺物出土は極めて少く、住居址の営まれた期間は短いものと推定される。

(3　平安時代（6～15号住居址）

住居址平面形は一辺4～5mの方形を呈し、カマドを有する住居(13～15)と、ほとんど焼土のみのカマド痕跡を有するもの（6～12）と、まったく痕跡をとどめないもの（5）とが存在する。カマドの位置は多様であり、南を除く各壁に付設されている。住居の配置は、調査区東半に集中し、7・8号、9～11号に重複関係が認められる。各住居址出土土器は、古・新の2様相に分けられることから、集落が5～6世代にわたる長い年代巾の中で営まれたことを想定できる。

特筆されるべきは、6号住を除く各住居址内から瓦片が多数出土し、検出面での採集品も含めて200点を越える点数を数えるものである。善光寺境内から出土したとされるいわゆる「善光寺瓦」と同笵の軒瓦も含まれており、その出土状況が注目されるところである。近隣に田中瓦窯址の存在が指摘されており、出土した瓦がその生産に伴うものである可能性は高い。出土状況には、意識的に住居床面に置かれた状況（5号住）も確認されることから、単なる混入遺物とは考え難いものと言えよう。

その他の遺構としては、集石土壙等が存在し、出土遺物から若干先行した年代が与えられる。

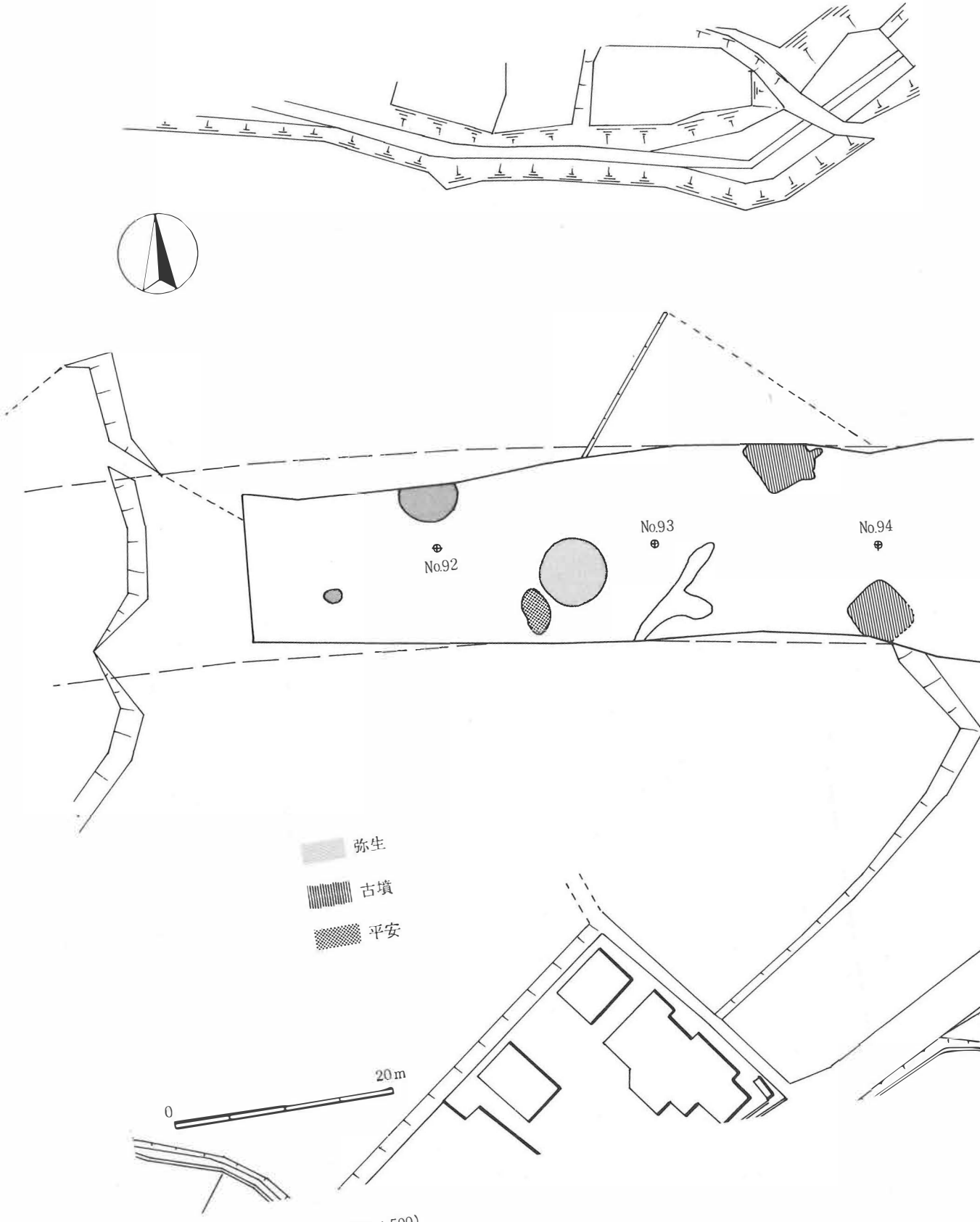


図33　D地点遺構配置図　（1：500）

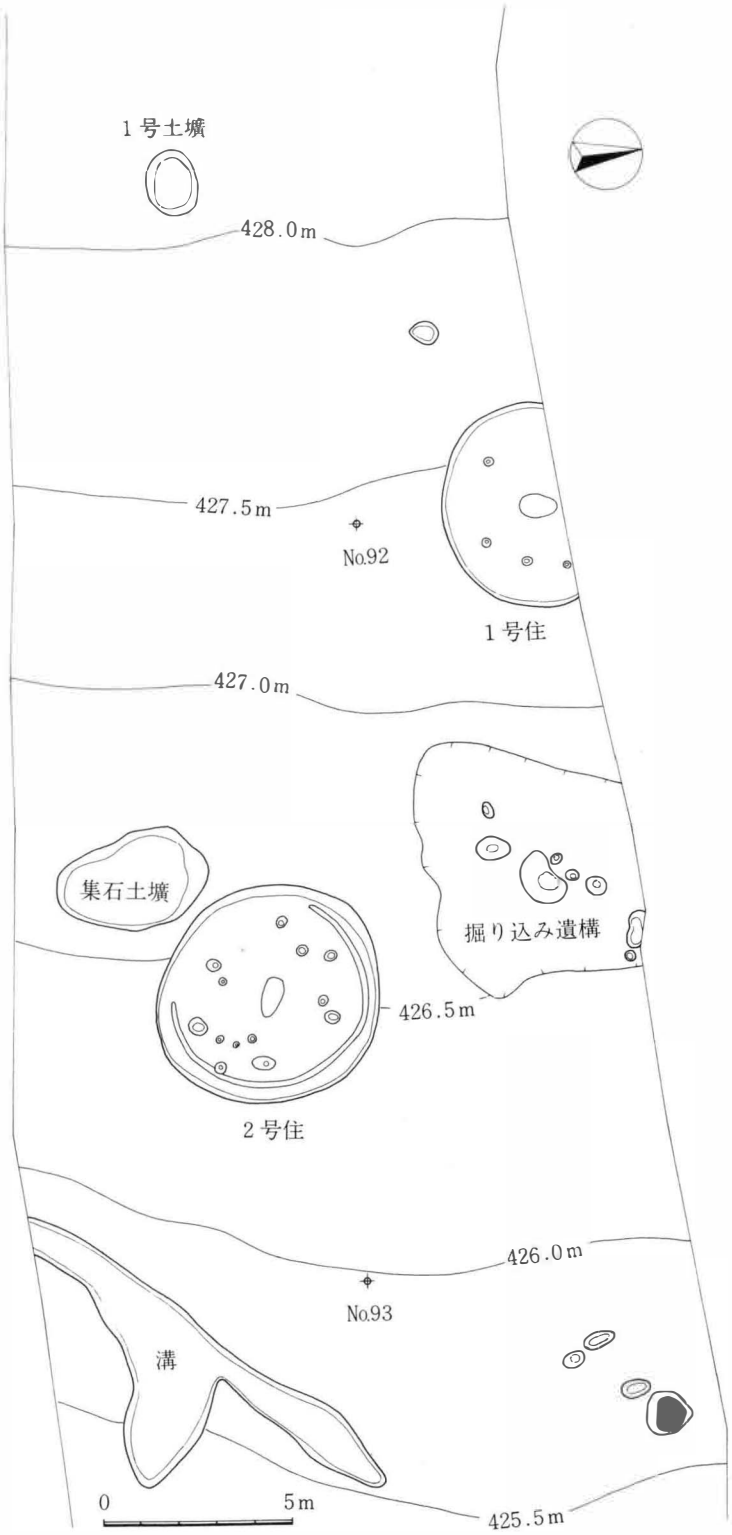


図34　D地点全測図1　（1：200）

図35　D地点全測図2　（1：200）

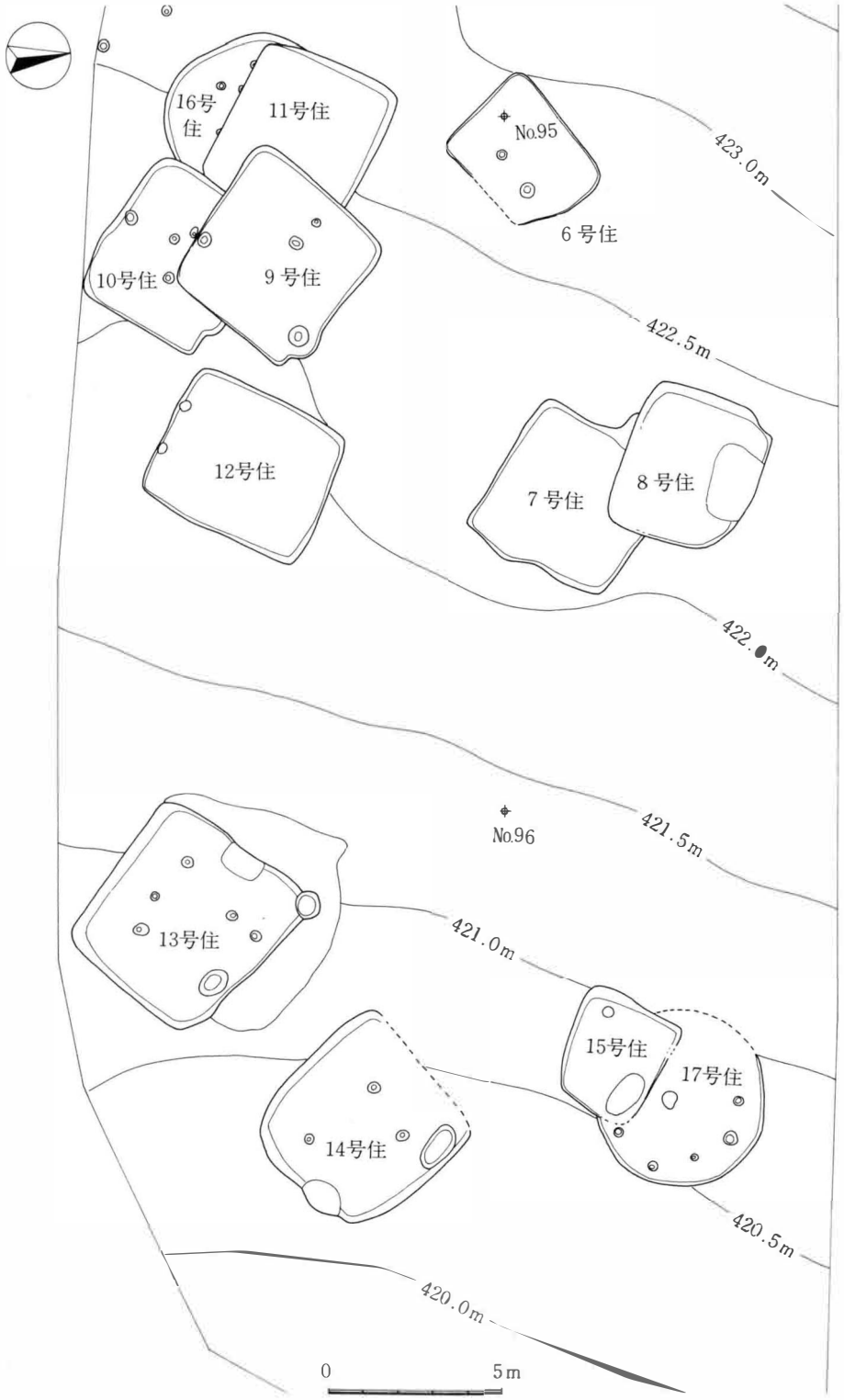


図36　D地点全測図3　（1：200）

2　弥生時代中期の遺構

1号住居址（図37）

径5.5ｍの円形を呈し、壁高は30～15 cmを測る。北側は調査区外のため未検出となっている。床面はやや軟弱である。柱穴は4本存在し、内3本は2.2ｍ間隔をとり主柱と目されるものである。炉は床面中央部に存在し、深さ20 cmを測る。炉穴内の土層は、上部に炭化物が集積し、下部は若干の焼土を含むものであり、炉底面はさほどの火熱を受けてはいない。

遺物　土器（図50－1～6、①～⑤）の出土量は少く、床面に大破片（2・5）がわずかに残されている程度である。

2号住居址（図37）

住居址群中唯一全形を確認したもので、構造等良好に確認されている。長径6.3 、短径5.8ｍの円形を呈し、壁高は50～20 cmを測る。床面は炉周辺部が特に堅くたたきしめられている。壁より40～20 cm離れて存在する周溝は、深さ5～10 cm、径5.0ｍであり、完周せずに3/4円弧にとどまるものである。柱穴は12本確認されるが、6角形に配列される6本を主柱穴と考えるもので、内4本は柱穴間2.2ｍ×3.0ｍの長方形を呈し、整列した配置による。主柱穴内側には2.2×1.5ｍの長方形に配列された4本の柱穴が存在し、壁から離れた床面上の周溝の存在も考慮すると、住居拡張以前の主柱とも考えられる。住居拡張の可能性は推定にとどまるもので、柱穴等の埋め戻し、貼り床などは確認されていない。炉は床面のほぼ中央部に位置し、長径1ｍ、短径50 cmの長方形を呈する。掘り込みは25 cmを測るが、炭化物焼土の堆積は上位に顕著である。炉を中心とした床面には、径2ｍの範囲にわたり、炭化物が厚さ1 cmをもって堆積している。炭化物層は炉上部も被覆するもので、住居廃絶時に形成されたものと判断される。

遺物　土器（図50、7～19、図51－⑥～㊵）、石鏃（図48－4・5）が出土している。遺物は柱穴上で検出されたもの（7・9）を除いて、床面に位置するものは細片少量であり、完形に近い個体や大破片は床面より浮いた状況で検出されている。

16号住居址（図38）

径5.0ｍの内外の円形を呈し、壁高は40 cmを測る。平安時代9・10号住により東側が破壊され、さらに上部に11号住が重複するため、攪乱を受けていない部分は南側の一部に限られる。床面はやや軟弱である。柱穴は8本が確認される内5～6本を主柱としたものと考えられるが、整列した配置は認められない。炉は床面中央部に位置し、長径80 cm、短径50 cmの長円形を呈し、深さは20 cmを測る。炭化物、焼土はやはり上部に集中してみられる。

遺物　土器（図52－20、㊶～㊿）が出土している。大巾に攪乱を受けているため出土量は少い。

17号住居址（図38）

径5.0ｍ内外の円形を呈し、壁高は45～10 cmを測る。東側は平安時代15号住により破壊され、攪乱が及んでいる。床面は軟弱であり、やや凹凸を有する。柱穴は7本確認され、内2～3本が主柱に含まれるものと考えられるが、整列した配置では検出されていない。床面中央部に位置する炉は、径50 cmの円形を呈し、深さは25 cmを測る。炉穴内の焼土、炭化物は顕著ではない。

遺物　土器（図52－21～26、図53－㊶～㊹）、磨製石斧（図49－15・18・19）が出土している。土器類は大多数が覆土上部に包含され、出土量は豊富である。3本の石斧も同様の状況にある。

1号土壙（図38）

長径1.7ｍ短径1.4ｍの長円形を呈し、深さ50～40 cmを測る。覆土は炭化物を含む黒色土であり下部に拳大の礫が包含されている。

遺物　土器（図52－27～31）の出土は比較的豊富であり、大破片を含むものであるが、完形品は出土していない。

3　古墳時代前期の遺構

3号住居址（図39）

5.5×4.7ｍの長方形を呈するもので、壁高35～25 cmを測る。北側約1/3は調査区外のため未検出となっている。西壁際は、幅40 cmにわたり床面より15 cmほど高くなり、階段状を呈しており、同部分に遺物が集中して検出されている。床面は軟弱であり、10ケ所にピットを有するが、整列した柱穴の配置状況は認められない。また、炉の存在も焼土等の分布がみられず、明確ではない。

遺物　土師器（図55－1～5）が出土している。出土量は少いが、西壁際の階段状部分より一括出土し、完形に近い遺存を示すものが多い。

4号住居址（図39）

一片5.0ｍの方形を呈するものと思われ、壁高は40～20 cmを測る。59年度調査区の南端に位置するため、南壁側が未検出となっており、同部分は60年度調査の際も検出されるに至っていない。床面は極めて軟弱であり、凹凸が著しい、柱穴様のピットも数ケ所に検出されているが、整列した配置状況は認められない。北壁から1ｍ離れた床面に焼土の分布がみられ、炉と判断されるものであるが、堀り込みを伴わず、焼土の堆積もわずかなものとなっている。

遺物　土師器（図55－6～16）が出土している。全て細片で、床から浮いた状態で検出されている。出土量に関しては3号住を上回るものである。

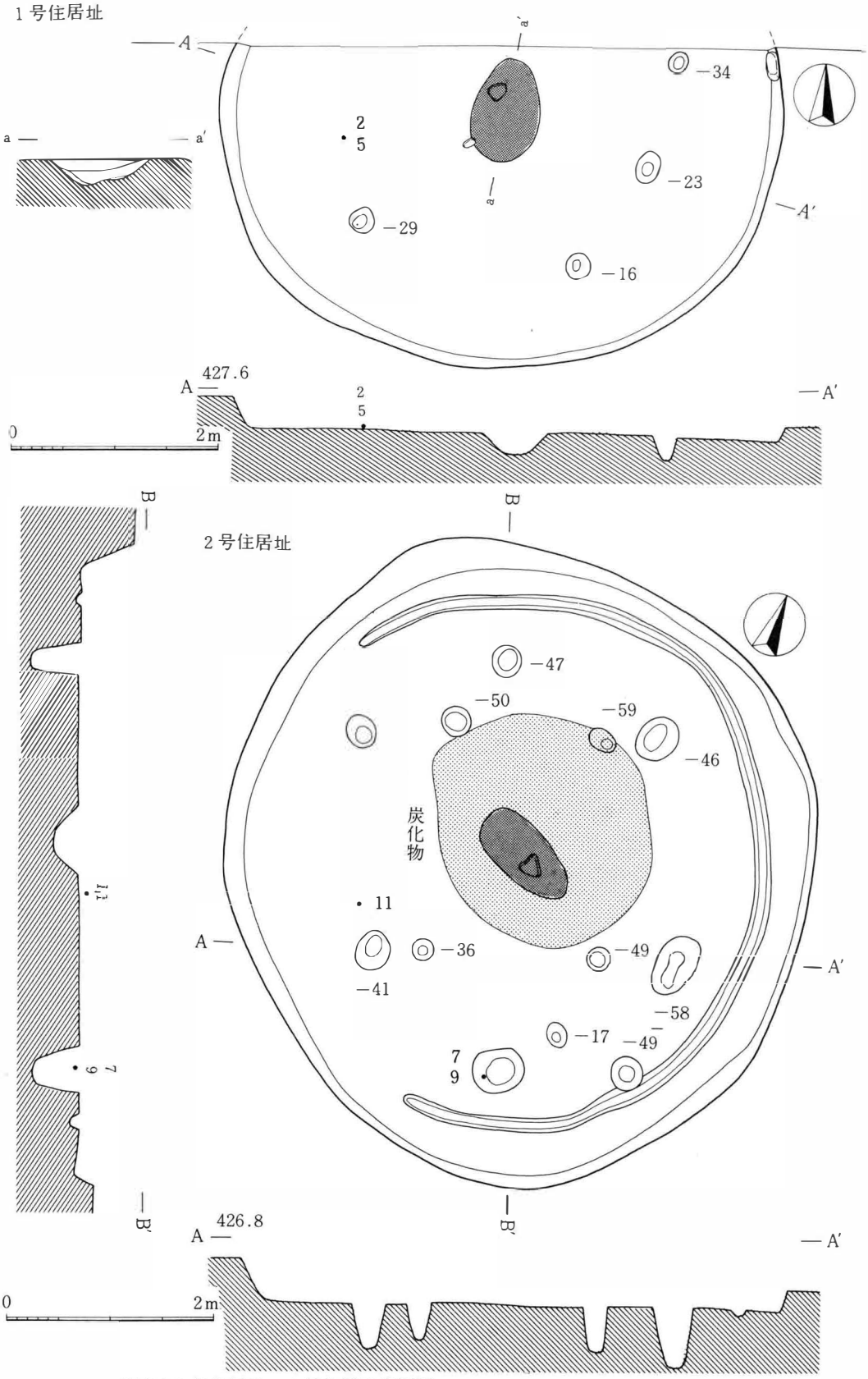


図37　D地点1号住居址・2号住居址実測図

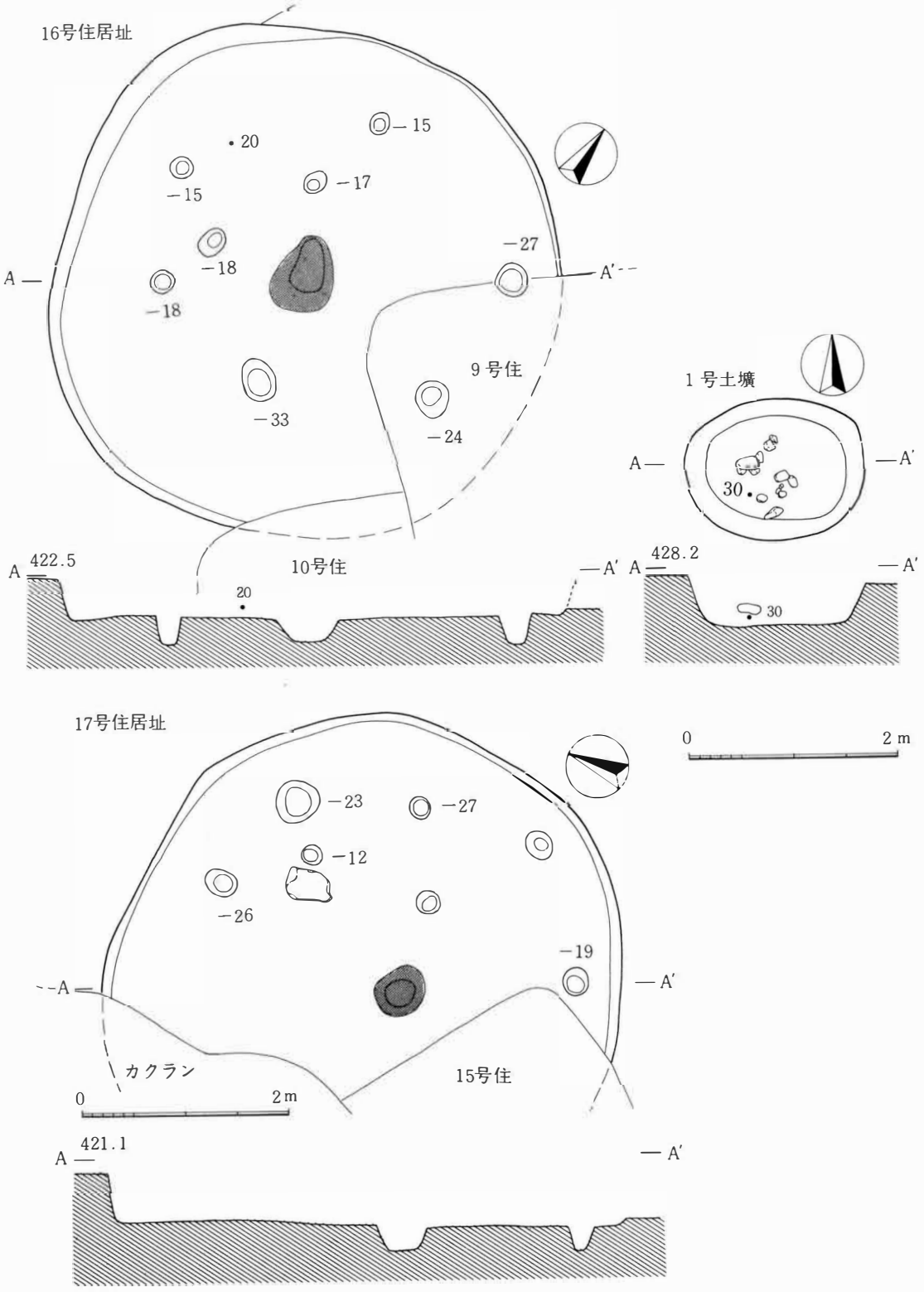
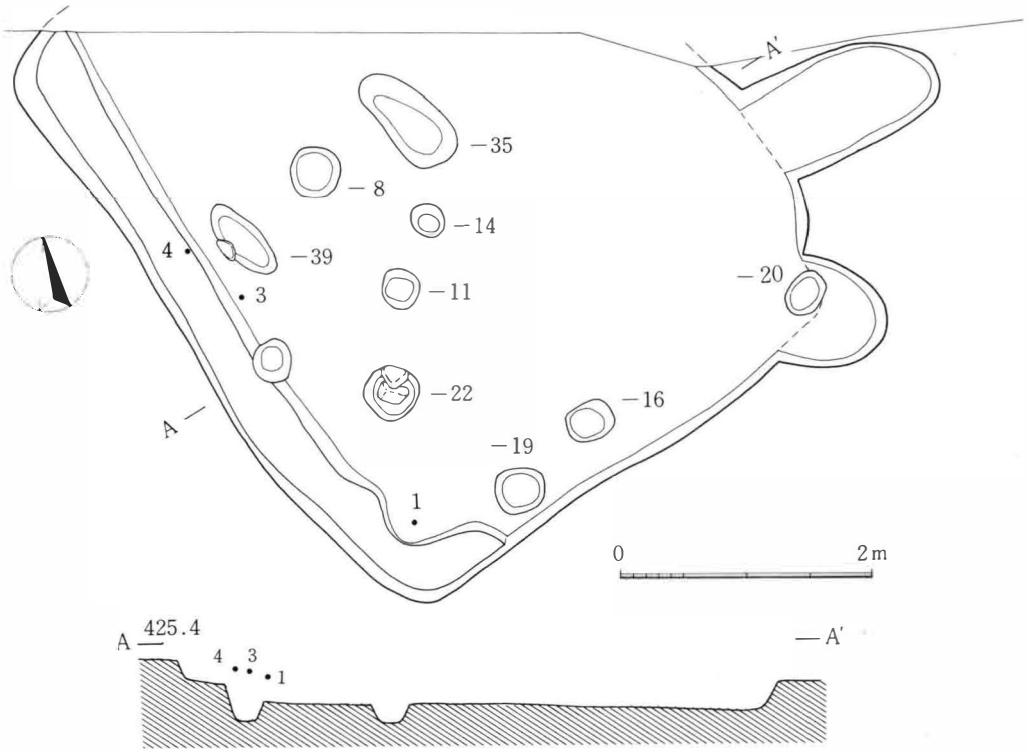


図38　D地点16号住居址・17号住居址、1号土壙実測図

3号住居址



4号住居址

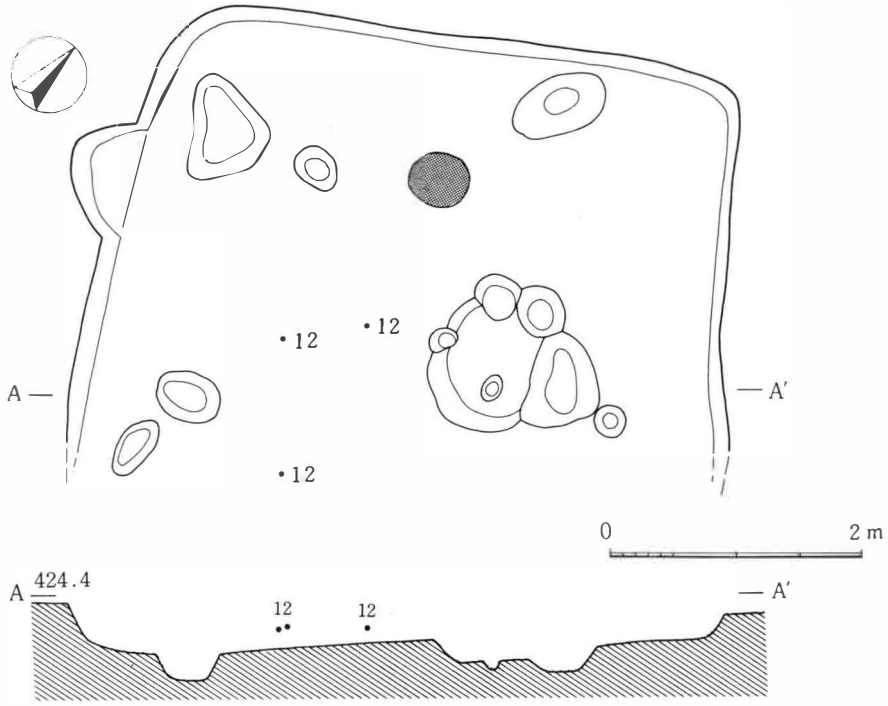


図39　D地点3号住居址・4号住居址実測図

4　平安時代の遺構

5号住居址（図40）

4.2×3.5 mの方形を呈し、壁高は40～15 cmを測る。床面に4本、北東、北西壁に3本の小ピットと、西隅にやや大きめのピットが存在する。カマド等の存在を示す構築材及び焼土は確認されていない。この他南隅に人頭大の礫群が存在するものの、人為的な集積状況はみられない。

遺物　土師器・須恵器（図76－131～143）、瓦（図87－6、図89－8、図92－23）が出土している。このうち、須恵器鉢（143）、軒平瓦（6）、丸瓦（8）が床面中央部より一括出土したものである。出土状況は、瓦当部1/2を欠損し裏面を上にした状態の軒平瓦を中心とし、須恵器、丸瓦が折り重なり床面に密着した状態にあり、軒平瓦のみ原形を保つが、瓦当面は原位置より外れて上部に重なるものである。なお須恵器鉢の接合破片が11号住床面直上より検出されている。

6号住居址（図40）

4.0×3.0 mの方形を呈し、壁高は25～5 cmを測る。南東壁の一部は樹根の攪乱により失われている。床面には4本の小ピットが認められるが、整列した配置は認められない。北西壁際のほぼ中央部に焼土の分布範囲が認められ、カマドの痕跡と考えられる。

遺物　土師器・須恵器（図77－144～147）が出土している。出土量は少く、住居址群中唯一瓦出土が認められない。

7号住居址（図41）

一辺4.5 mのほぼ正方形を呈し、壁高は50～20 cmを測る。8号住居址が重複し、北隅は失われている。北西壁中央に若干の焼土を伴った張り出し部分が存在し、カマドの痕跡と伴断されるものの、8号住の攪乱を受けるため判然としない。東隅に小ピットを有する他、南隅付近に人頭大の礫が集積された状態にある。同礫は埋没過程での転石流入の可能性が考えられる。

遺物　土師器・須恵器（図77－149～157）、瓦が出土している。土器類は礫群中より集中して検出されている。瓦の出土は極少にとどまるものである。

8号住居址（図42）

4.5×3.7 mの方形を呈し、壁高は50～15 cmを測る。7号住居址に重複し構築されている。北東壁中央部に位置するカマドは、構築材をとどめず、ほとんど焼土のみの堆積範囲として把握されるもので、同範囲のほぼ中央に存在する径70 cmの円形ピットが焚き口及び燃焼部と推定される。

遺物　土師器・須恵器（図78－158～172）、瓦（図92－18・23、図94－40・42）が出土している。特にカマド付近の床面に集中してみられ、土器類は完形品に近い形で遺存する。瓦は小破片ながら土師器坏（163）上部に密着して検出されるなど、土器類と同時廃棄の状況を示している。

9号住居址（図41）

4.7×4.6 mの方形を呈し、壁高は45～10 cmを測る。10･11号住と弥生時代16号住に重複するものである。床面には5本の小ピットが認められるものの、整列した配置は認められない。北東壁際の中央部に焼土の分布範囲が存在し、1 m離れた位置にも同様の焼土堆積が検出され、カマドの痕跡と判断されるが、構築材は遺存していない。

遺物　須恵器・土師器（図79－173～184）、瓦（図91－14、図92－19・21、図93－29、図94－37・46）が出土している。瓦は覆土上部から床面にかけて分布し、濃密な出土状況を呈している

10号住居址（図43）

4.6×3.9 mの方形を呈し、壁高は30～20 cmを測る。11号住、弥生時代16号住に重複するもので、9号住が重複し、北側が攪乱により失われている。床面は中央部が堅く、壁際は軟弱であり、隅角付近は凹みを呈している。確認された5本のピットは整列した配置にはない。焼土等カマドの存在を示すものはないが、10号住に重複する東南壁に位置した可能性が考えられる。

遺物　土師器・須恵器（図79－185～191）と少量の瓦が出土している。

11号住居址（図43）

一辺4.5 mの方形を呈するものと思われ、壁高は最大50 cmを測る。弥生時代16号住に重複し、9・10号住が重複しているもので、南東壁は失われた状況にある。床は中央部を中心として堅緻な面が存在するものの、壁際は極めて軟弱である。カマドは南東壁南隅よりに位置するが、9・10号住の攪乱により大半が失われ、わずかに焚口袖部の石芯が1点遺存するのみである。

遺物　土師器・須恵器・灰釉陶器（図80－192～206）、瓦（図87－5、図90－11・12、図93－26）が出土している。土器類は北東壁際床面上、瓦は覆土上部から集中して検出されている。軒平瓦（11）は12号住床直上出土個体と接合関係にあり、5号住須器鉢の接合破片も検出されている。

12号住居址（図44）

4.9×4.2 mの方形を呈し、壁高は30～20 cmを測る。床は中央部付近は堅緻であるが、壁際は軟弱で凹凸が激しい。特に隅角部は著しく凹み、ピット状を呈している。柱穴は南西壁際に2本存在している。南東壁際中央部には焼土の堆積が認められ、カマドの痕跡と判断される。

遺物　土師器・須恵器・灰釉陶器（図82－236～259）、瓦（図90－11、図93－24、図94－33・35）、鉄製品（図86－7）が出土している。瓦は床面および床直上に位置するものが多く、軒平瓦（11）は11号住出土個体と接合関係にある。

13号住居址（図45）

5.4×5.0 mの方形を呈し、壁高は65～40 cmを測る。北西・北東壁の外縁には深さ40 cmの

不整形な掘り込みが認められ、床より一段高いテラス面を形成している。別の遺構が重複する可能性も考えられるが、住居構築に伴うなんらかの施設と判断するものである。床面には大小のピットが7本存在するものの整列した配置は認められない。北西壁中央に位置するカマドは、焚口袖部を角礫により構築するもので、礫組は半ば崩壊した状態にある。カマド横には80×60 cm、深さ20 cmの方形ピットが存在し、遺物、礫が落ち込んだ状況を呈し、貯蔵穴と考えられる。

遺物　土師器・須恵器（図80－207～218、図81－219～235）、瓦（図90－13、図91・92－17、図93－25・27・28、図94－34～36・41・47）、鉄製品（図86－9）が出土している。土器類はカマド、貯蔵穴内及びその周辺から集中して検出されている。瓦は覆土上部に包含され、床面からの出土はみられない。壁外のテラス状堀り込み部からは、単独で平瓦（17）が検出されるのみである。

14号住居址（図46）

5.2×4.8 mの方形を呈し、壁高は60～40 cmを測る。壁の崩落が著しく、床面も軟弱となっている。小ピットが4本存在する他、北東壁際に貯蔵穴様の長円形ピットが検出されている。南東壁東隅よりに位置するカマドは、焚き口袖部を角礫を用いて石芯とし、燃焼部は壁外に30 cmほど張り出している。燃焼部中央には、柱状礫による支脚が設置されている。

遺物　土師器・須恵器（図83－260～283）、瓦（図87－2、図94－43～45）、帯金具・丸鞆（図86－1）、鉄製品（図86－4・5・8）が出土している。瓦は全て覆土上部に包含されるものである。

15号住居址（図44）

弥生時代17号住に重複するものであり、カマドを中心とした一辺3.5 mの方形掘り込みとして検出されている。規模やカマド位置が竪穴住居としては規格外であり、その構造には疑問が残るところである。カマドは焚き口を南東に向け、7個の板状礫を芯として構築されるもので、燃焼部中央に柱状礫を支脚として設置している。

遺物　土師器・須恵器（図84－284～299）、瓦（図87－4）、鉄製品が出土している。

掘り込み遺構（図47）

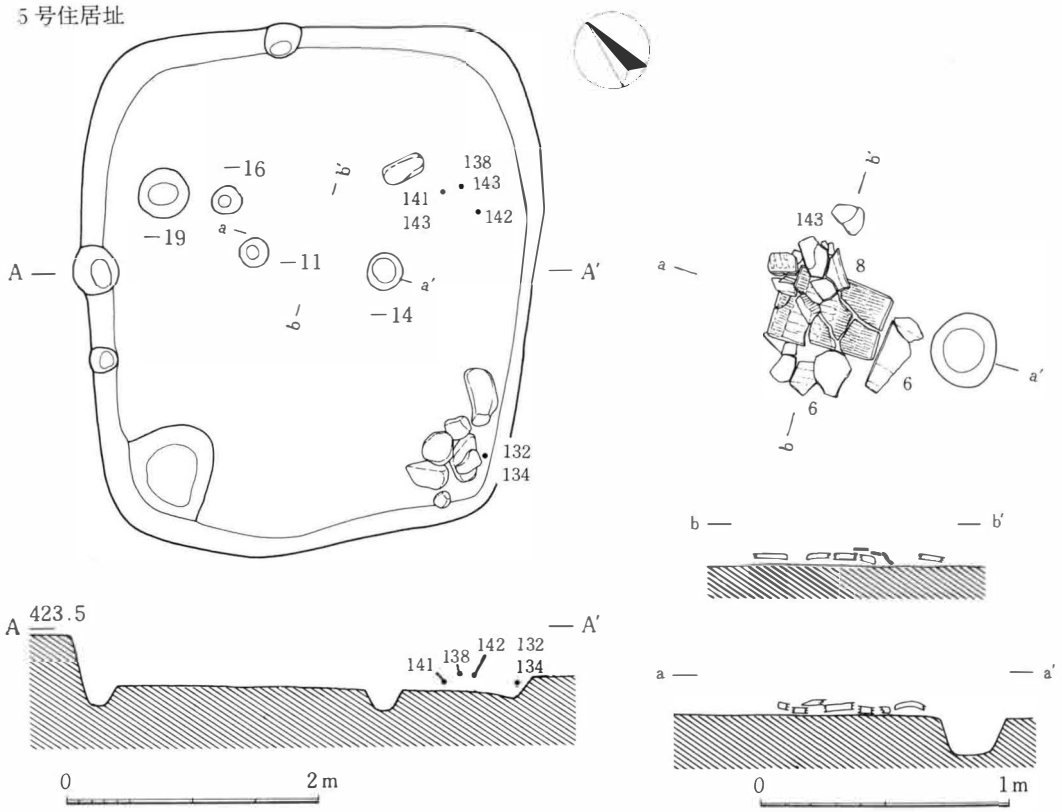
検出面からの深さ15 cmを測る不整形の堀り込みが5～6 mの範囲にわたるもので、掘り込み内に大小のピット8本が存在する。住居址構造を示すものではなく、なんらかの目途による掘り込みと判断される。遺物はピット内より土師器甕（図85－304）が出土したのみである。

集石土壙（図47）

4.0×2.5 mの長円に近い不整形を呈し、深さは20～15 cmを測る。覆土中には多量の礫が包含されており、意識的に礫を混えて埋められたものと判断される。遺物は土師器・須恵器（図85－300～303）が礫群の間から出土し、量的には少いものの完形に近い状況で遺存している。

（青木和明）

5号住居址



6号住居址

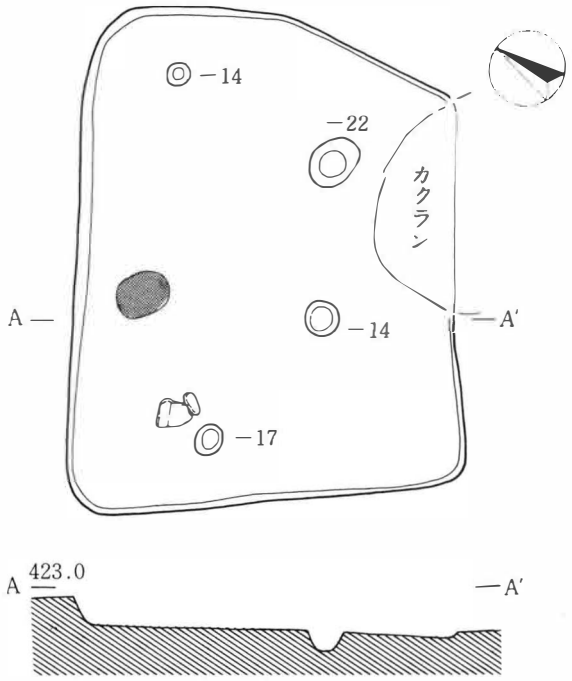


図40　D地点5号住居址・6号住居址実測図

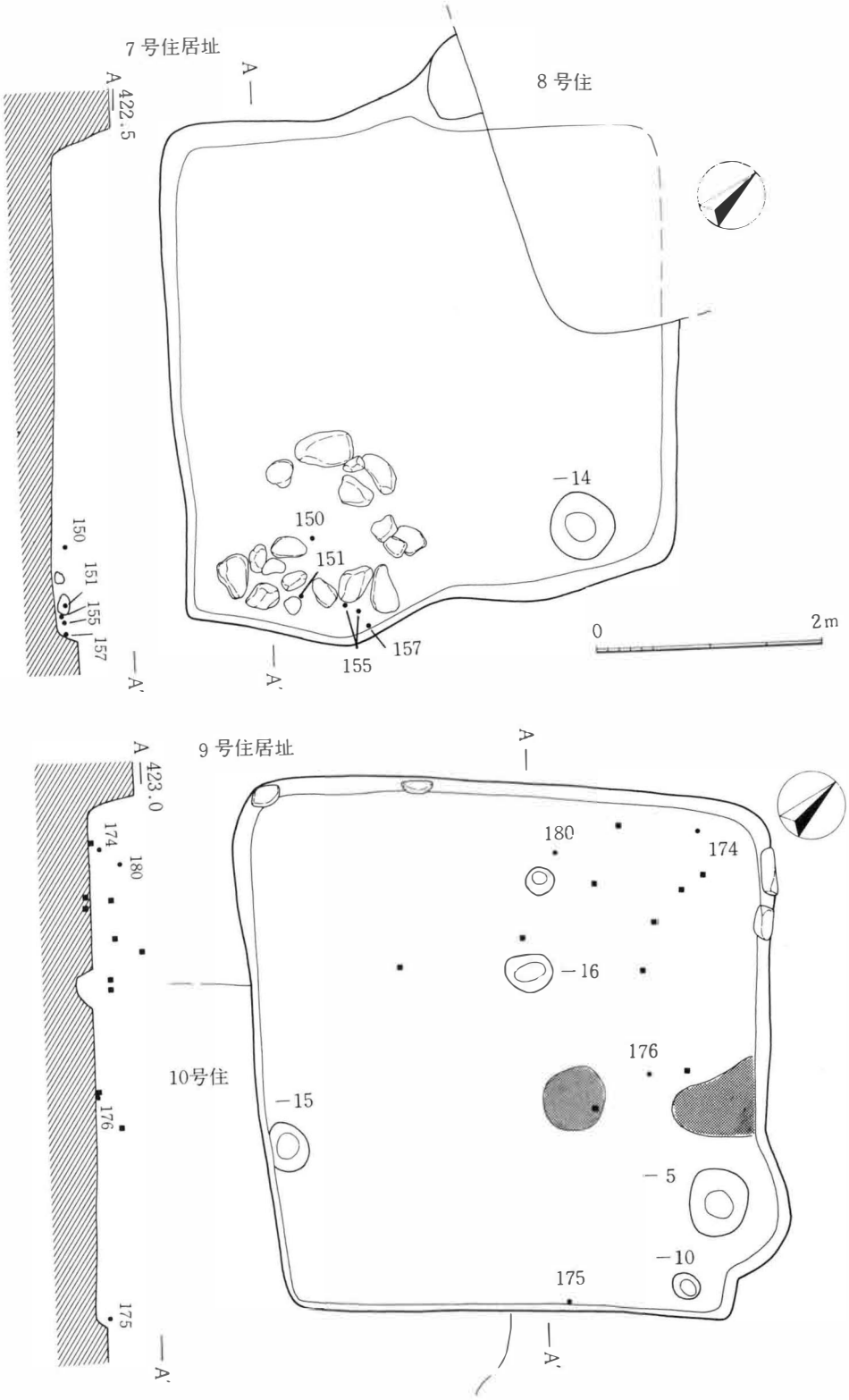


図41　D地点7号住居址・9号住居址実測図

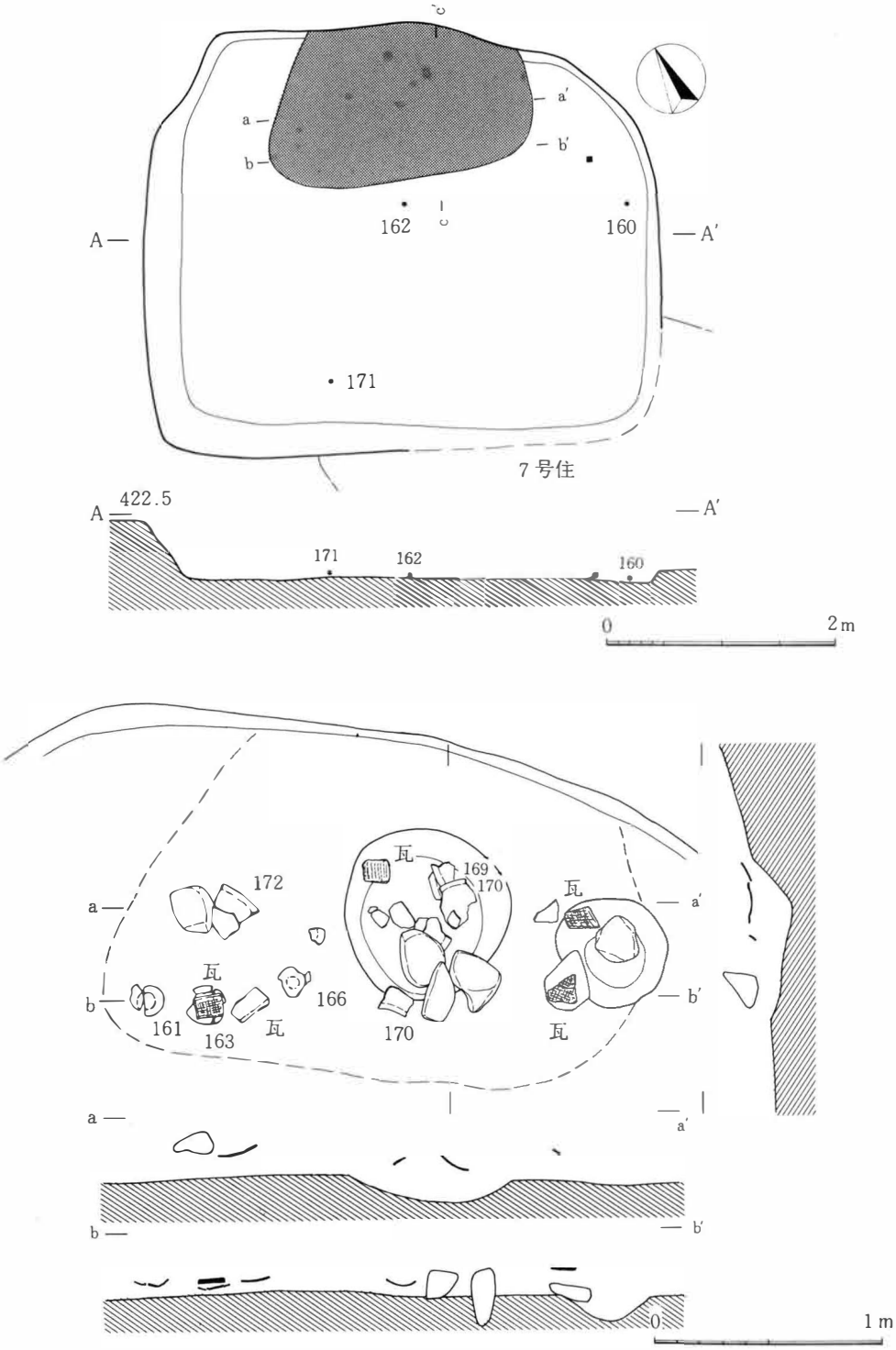


図42　D地点8号住居址、同カマド実測図

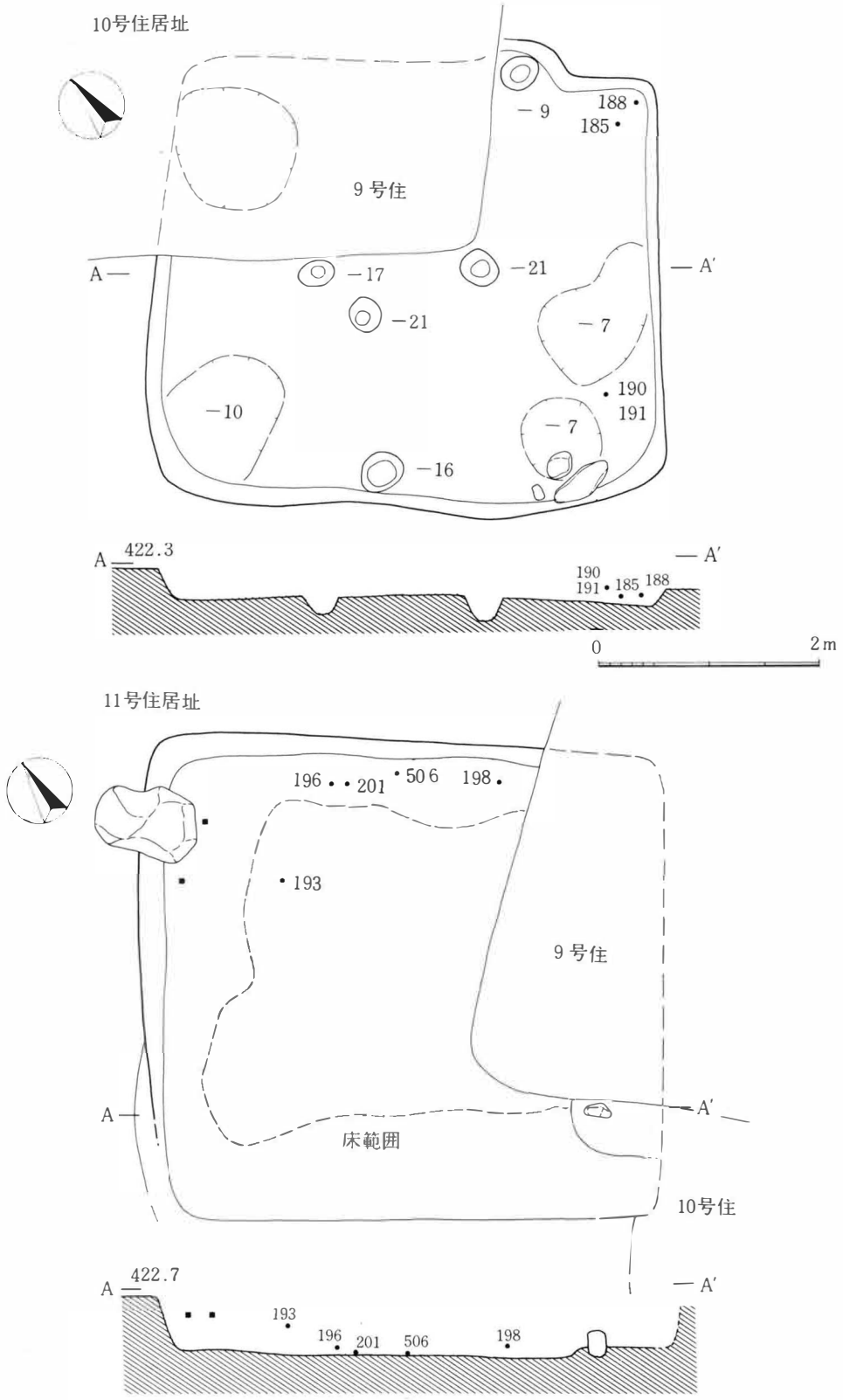


図43　D地点10号住居址・11号住居址実測図

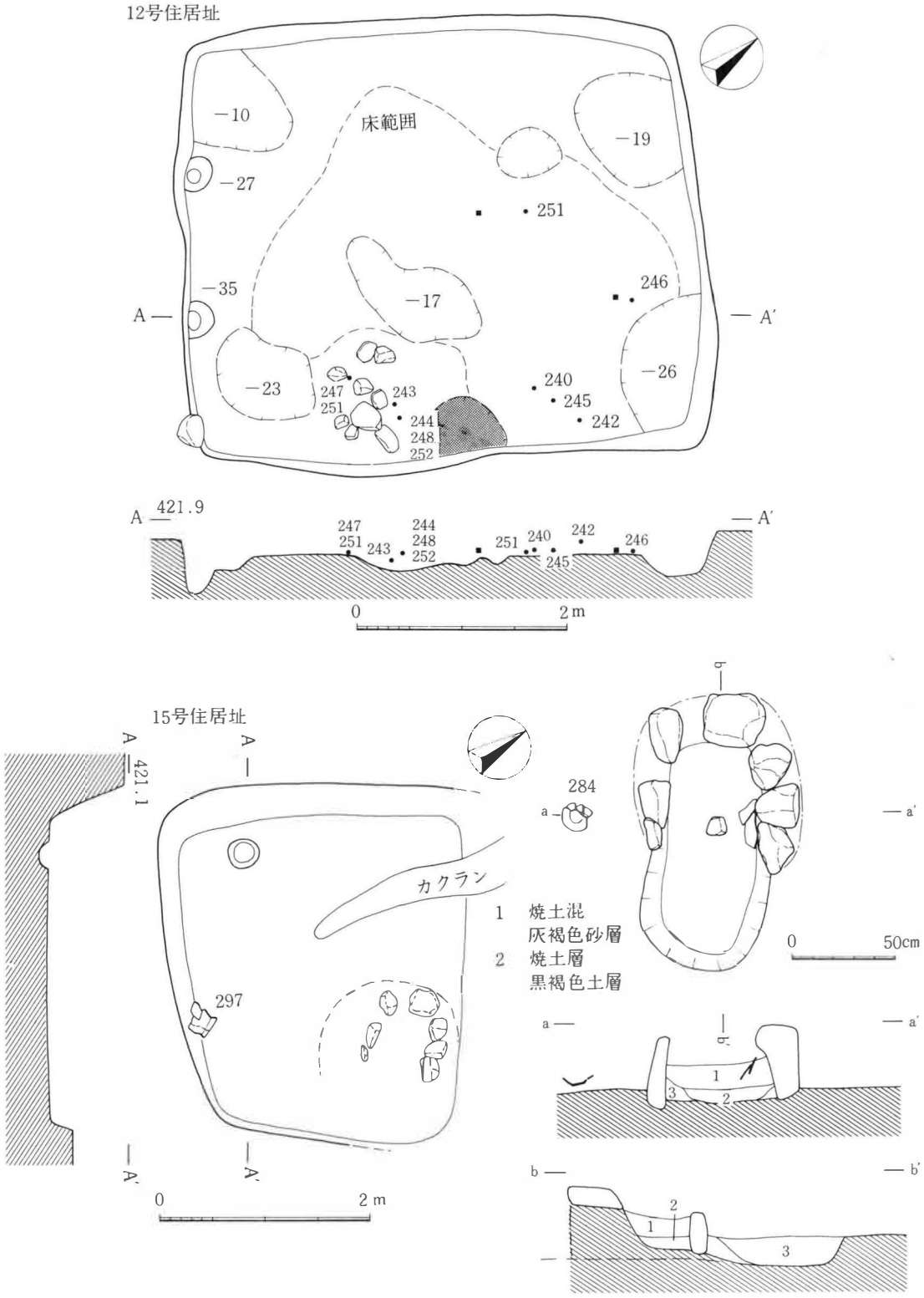


図44　D地点12号住居址・15号住居址、同カマド実測図

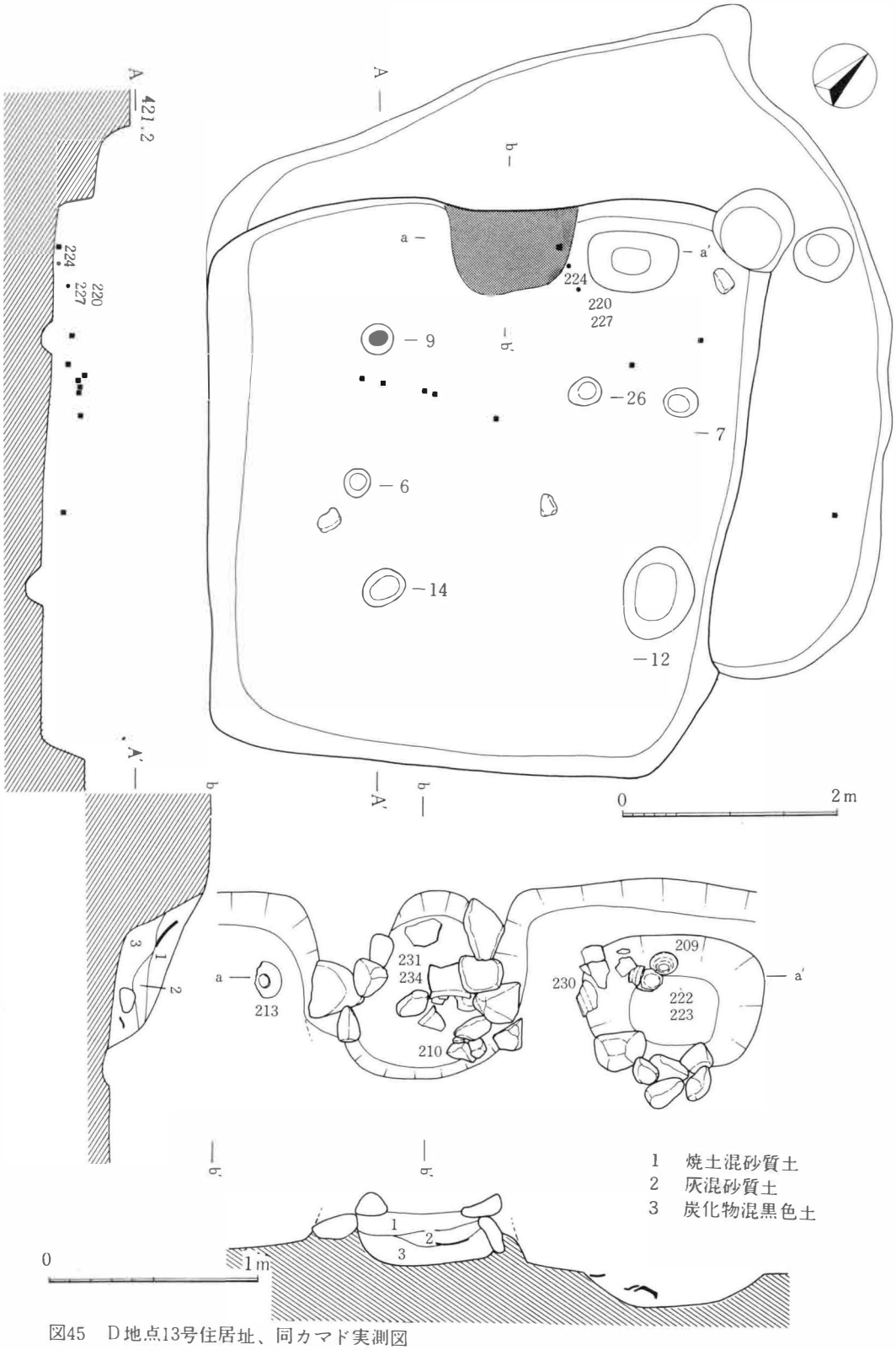


図45　D地点13号住居址、同カマド実測図

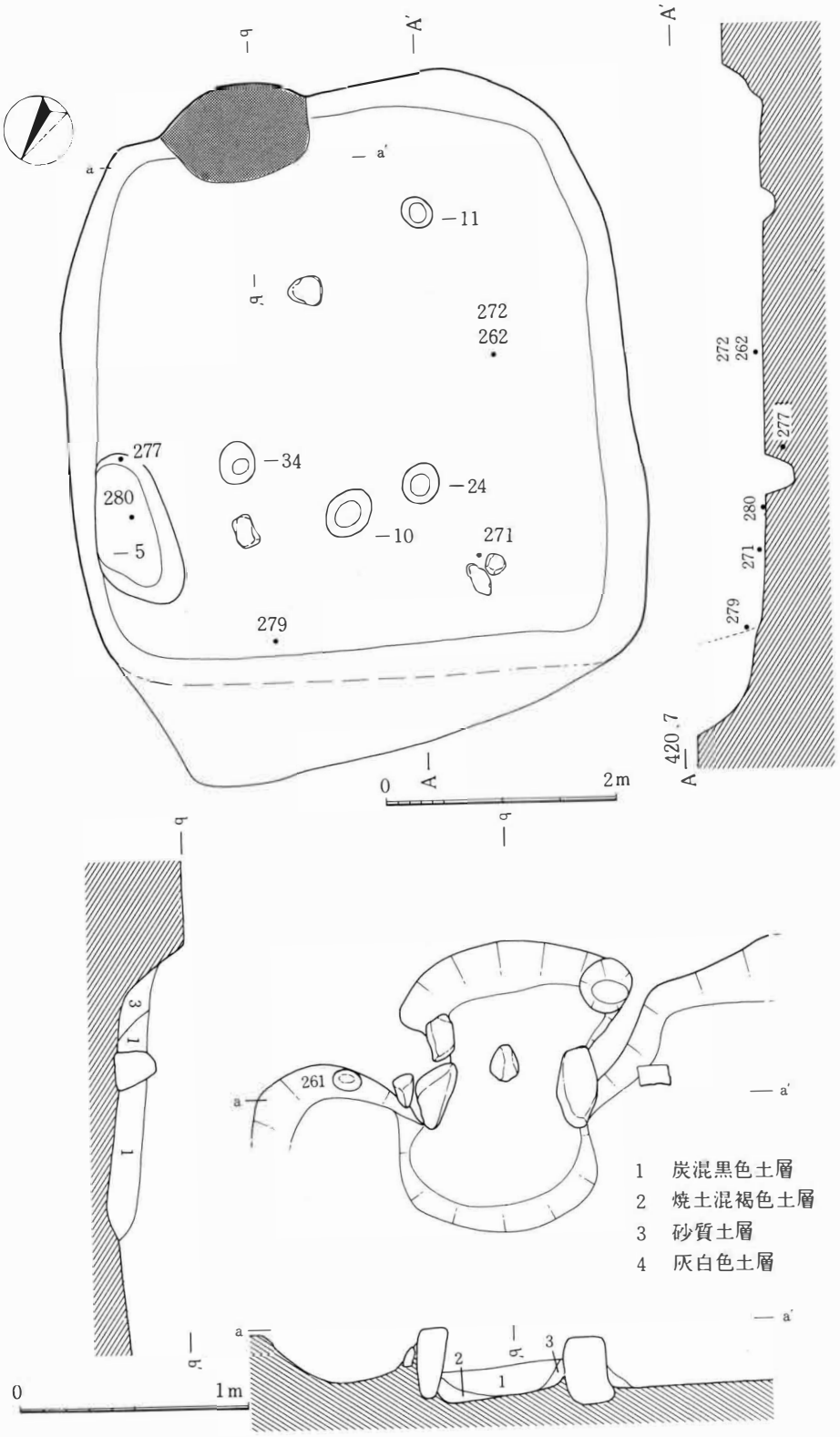
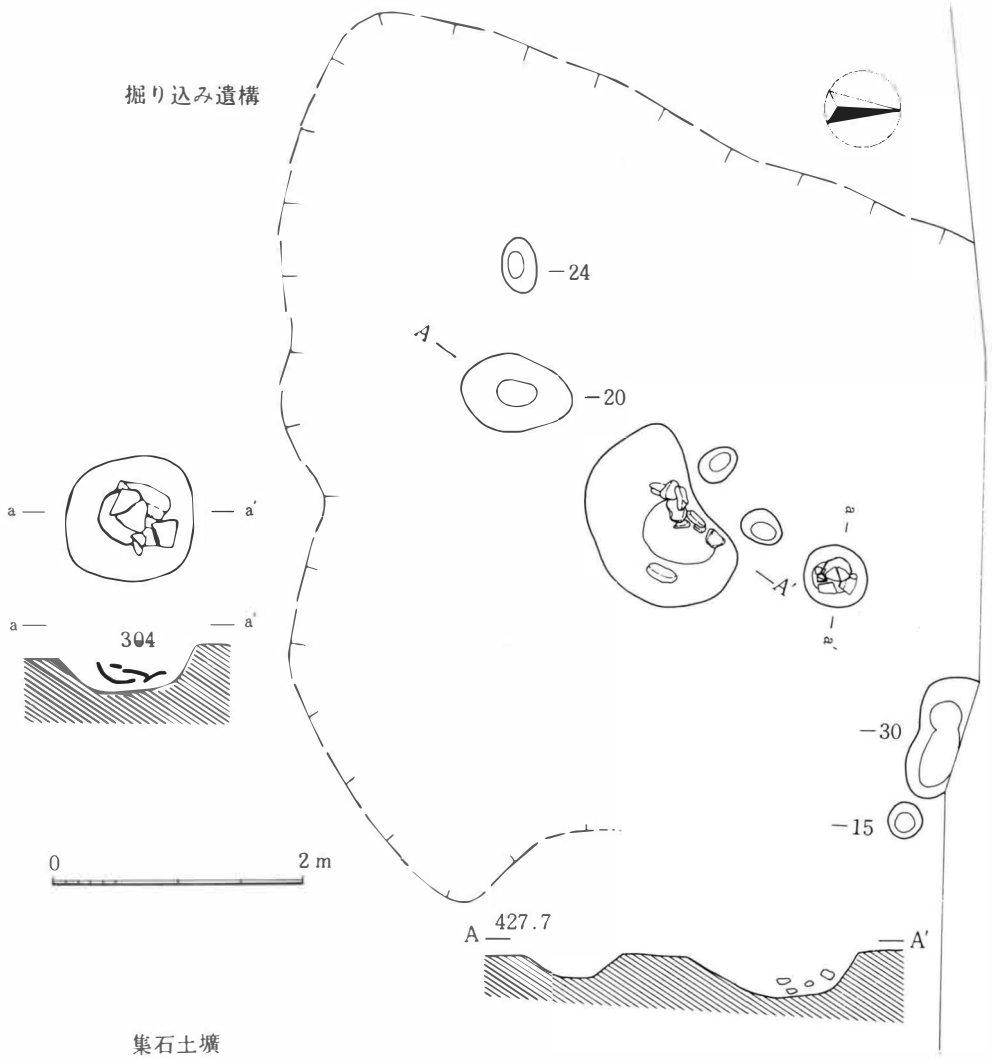


図46　D地点14号住居址、同カマド実測図



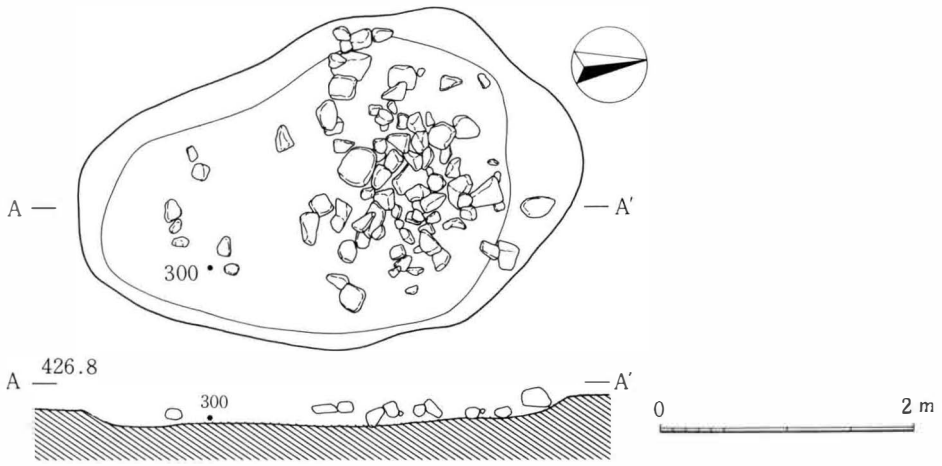


図47　D地点掘り込み遺構、集石土壙実測図

第Ⅵ章　遺物各説

1　縄文時代～弥生時代

(1)　石器（図48・49）

石鏃（1～11）：凹基有茎（1～3・5）、凸基有茎（4）、平基無茎（6・7）、凹基無茎（8～10）、尖基（11）の5形態がみられ、石材としてはチャート・黒曜石・硅質頁岩を利用している。鏃長は、欠損している個体を除けば、有茎・無茎とも4cm以内に納まり、ほとんどが2～3cmである。重さは0.5g～3.2g間に分布し、2g以上が2点、1～2gが4点、1g未満が5点（欠損している個体も含む）となっている。これらの石鏃は2例（4・5）を除き、弥生時代以降の住居址から出土しているが、形態的には1～7・11は弥生時代、8～10は縄文時代の遺物である可能性が強い。

石匙（12・14）：12は台形状をなす左右対称形の横形石匙で、つまみは四角形に作り出されている。表面の調整はつまみ部分と刃部を含む縁片部について行われ、裏面では刃部以外について行われており、刃部は直刃で鈍い。硅質頁岩製である。14は硅質頁岩製で半月状の縦形石匙である。調整は表面の刃部と縁辺部、裏面の刃部に施されている。12・14とも縄文時代の遺物である可能性が強いと思われる。

打製石斧（13）：硬砂岩製で薄手の撥形を呈する。調整は両側面と刃部について行われている。刃部は円刃をなし、刃部中央では使用痕と思われる線状痕が確認できる。B地点3号住居址（古墳時代中期）からの出土であるが、縄文時代の遺物である可能性が強いと思われる。

磨製石斧（15～20）：6点とも閃緑岩製の太形蛤刃石斧である。体部に着柄痕のみられるもの（17～19）、扁平片刃石斧に形状が類似するもの（15）、刃部が潰れたもの（16）などがみられる。17は、折断部分が研磨を受けており刃部破損後にも再利用されたことがうかがえる。15・18・19は他と様相を異にしており、頭部に着柄がなされていた可能性がある。20は刃部破損後、意図的に頭部を截断したものと考えられる。ほとんどが弥生時代の住居址から出土しているが、17（平安時代の住居址）と20（検出面）は、破損した弥生時代の遺物を加工し再利用したものと考えられる。

砥石（21）：凝灰岩を利用した薄手の板状を呈する。研磨に使用された面はわずかに摩滅している。表面は肉眼で確認できる程度の細かい擦痕が全面を覆っているが、際立った凹凸はなく平坦面を呈している。

凹石（22）：輝石安山岩製である。現状は半円形であるが、本来は円形もしくは楕円形を呈していたと思われる。凹みは1ヶ所だけ確認され、裏面は平坦である。C地点1号住居址（平安時代）から出土しているが、縄文時代の遺物が混入したものと考えられる。

（田中寿賀子）

表1　縄文・弥生石器観察表

	図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	基部	出土遺構	備考
石鏃（図48）	1	3.5	1.1	0.45	3.2	チャート	完形	凹基有茎	D地点	黄褐色
	2	(2.4)	1.55	0.4	1.7	硅質頁岩	茎部末端	〃	D地点　8号住居	黒色
	3	(2.4)	(1.2)	0.4	1.0	チャート	先端・片脚	〃	D地点　13号住居	赤褐色
	4	2.0	1.1	0.5	0.75	黒曜石		凸基有茎	D地点　2号住居	
	5	1.95	1.1	0.45	0.5	黒曜石	完形	凹基有茎	D地点　2号住居	
	6	2.7	1.7	0.55	1.3	チャート	先端・胴部	平基無茎	D地点　13号住居	黒色
	7	2.3	1.05	0.32	0.7	チャート	完形	〃	D地点　13号住居	緑灰色
	8	(1.35)	1.2	0.3	0.55	チャート	先端・片脚	凹基無茎	B地点　17号住居	緑灰色
	9	(2.4)	(1.2)	0.4	1.0	黒曜石	両脚	〃	B地点　1号溝	
	10	(1.7)	1.25	0.5	0.7	黒曜石	先端	〃	C地点　1号住居	
	11	3.8	1.3	0.65	2.6	硅質頁岩	完形	尖基無茎	D地点　5号住居	床直上覆土中より出土。灰色

	図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土遺構	備考
石匙（図48）	12	3.9	(4.4)	0.7	14.4	硅質頁岩	一部欠	C地点　溝内	
	14	(13.0)	3.4	1.5	44.9	硅質頁岩	一部欠？	D地点　12号住居	縦形石匙

	図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土遺構	備考
打製石斧（図48）	13	9.1.	4.95	1.4	75.6	硬砂岩	完形	B地点　3号住居	

	図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土遺構	備考
磨製石斧（図49）	15	11.8	5.9	3.0	410.0	閃緑岩	完形	D地点　17号住居	刃部のみ研磨、床直上覆土より出土。
	16	(9.9)	7.5	3.7	513.0	閃緑岩	頭部欠損	D地点　16号住居	全面研磨、敲打によりつぶれる。
	17	10.1	6.5	3.9	494.0	閃緑岩		D地点　14号住居	磨きは不完全、破損後二次加工
	18	(19.1)	(7.1)	3.8	669.5	閃緑岩	一部欠損	D地点　17号住居	全面研磨
	19	(20.0)	11.3	3.7	752.0	閃緑岩	一部欠損	D地点　17号住居	全面研磨
	20	(5.7)	(7.1)	4.5	366.5	閃緑岩	刃部欠損	D地点　検出面	残存部は全面研磨

	図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土遺構	備考
砥石（図49）	21	(10.1)	(11.5)	2.2	165.5	凝灰岩	一部欠損	D地点　14号住居	

	図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土遺構	備考
凹石（図49）	22	(9.8)	(11.3)	(4.4)	609.0	輝石安山岩	一部欠損	C地点　1号住居	凹みはほぼ中央部に1ケ所

(　)内数値は遺存部計測による。

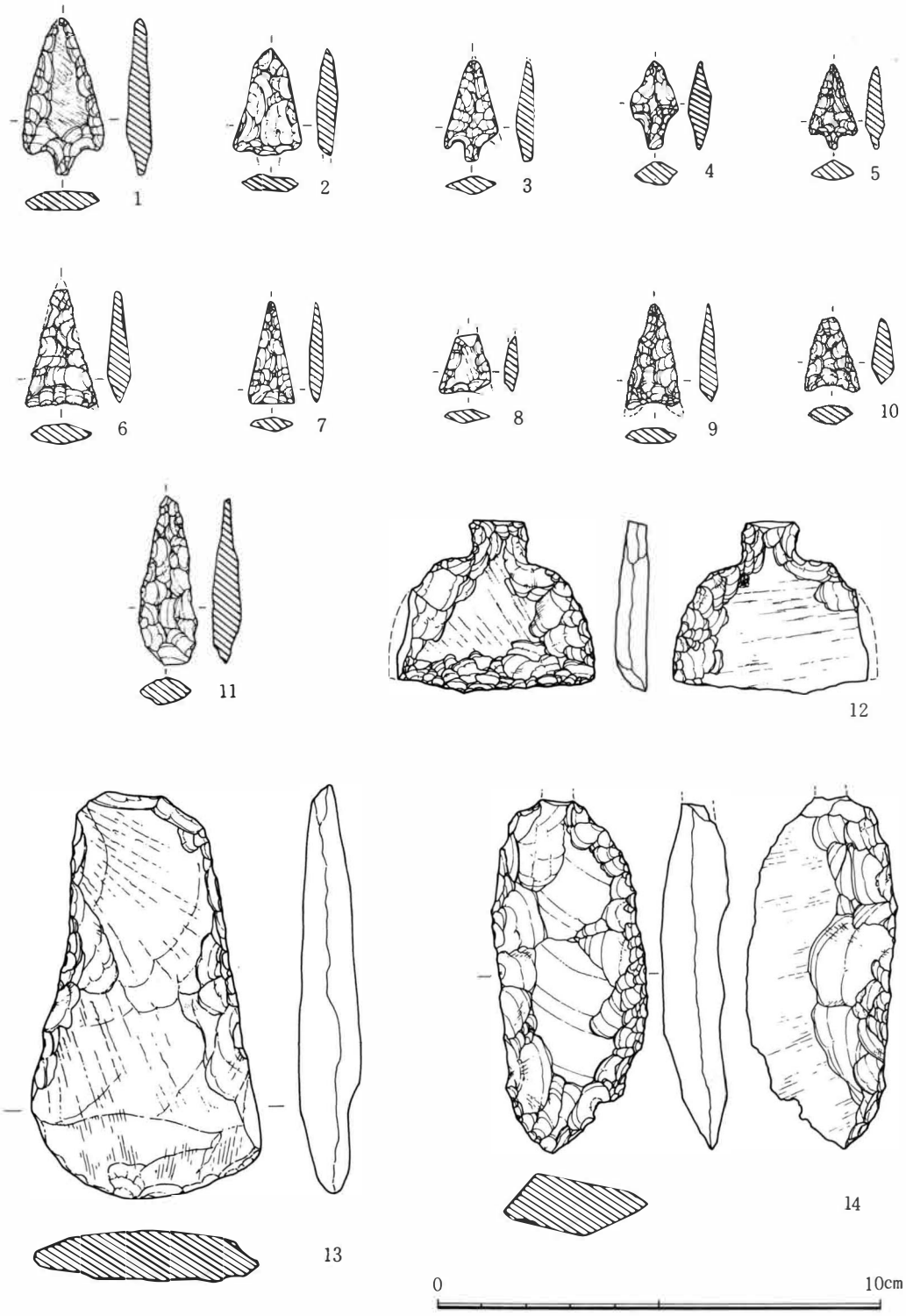


図48　B・C・D地点出土石器(1)

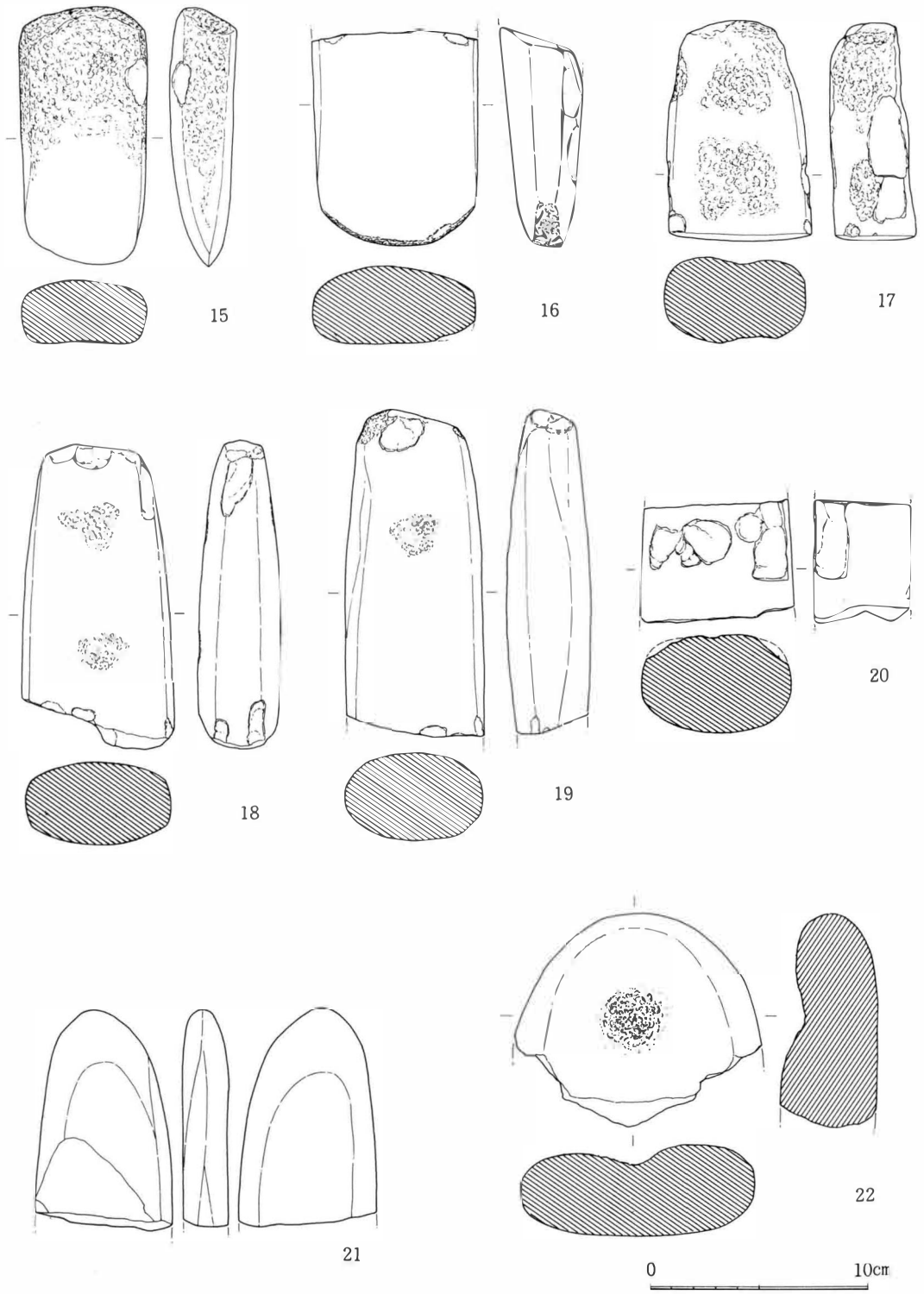


図49　B・C・D地点出土石器(2)

(2) 弥生土器

壺 完形品の出土はないが、各部破片から類推すれば、壺の形態は口縁部が小さくラッパ状に開き、短く細く締まった円筒状の頸部から長球形に膨らむ胴部へは緩やかな曲線を描いて移行し、最大径が胴中央部から下半部に位置する平底の細頸壺になるものと思われる。施文は口縁部から胴部にかけて施されており、口唇部が縄文・刺突文、頸部が太篦描沈線文と刺突文、胴部が太篦描沈線文と縄文・刺突文・櫛描沈線文によって加飾されている。以下、各部の施文について述べてみたい。

口縁部 口縁部端まで残存している資料5点中、施文が明瞭であったものは3点で、縄文(⑥、27)と刺突文(㊶)が認められた。他2点は、摩耗が著しいため施文の有無が明確ではないが、施文されていた可能性が強いと思われる。

頸部 頸部の文様帯は太篦描沈線文を中心とした横方向の施文が主体をなしている。具体的には、太篦描沈線を2～3条横平行にめぐらせるだけにとどまり、充填文を施さない例(7・27)、太篦描沈線を横平行にめぐらせた間に刺突文を充填している例(1・32)が掲げられる。

胴部 胴部資料は破片が多く、拓本資料に頼らざるをえないので、便宜上、上半部・中央部・下半部に区分して検討していくことにする。まず、胴上半部では、概して、太篦描沈線文によって文様が描かれ、縄文・刺突文・櫛描沈線文などを充填文として用いている。太篦描沈線による横平行文を文様としている例では、充填文として縄文(㊹～㉑・㉓・㉔)、縄文と棒状工具による刺突文(㊽・㊻)、縄文と横位の櫛描沈線文(⑪・⑫・㊺・㊽・㊿)、櫛状工具による刺突文と横位の櫛描沈線文(⑧～⑩・㉑・㊻)が用いられている。他には、太篦描沈線によって変形工字文が描かれ、縄文で充填している例(⑳)、太篦描沈線で懸垂文が描かれ、縦方向の櫛描沈線文と縄文を充填文としている例(㊾・㉑)などがみられるが、数例にすぎない。したがって、胴上半部では太篦描沈線による横平行文が、文様構成の主体をなしていたものと思われる。胴中央部は、横方向の施文のみで構成されている。施文は胴上半部と同様、太篦描 の横平行沈線文・弧状文・鋸歯文が描かれ、縄文・刺突文・櫛描沈線文などを充填文として用いている。太篦描横平行沈線文が施された場合は、縄文と刺突文(㉔・㊷)、櫛描沈線文(㊺)、櫛描沈線文と櫛状工具による刺突文(㊶・㊷)、櫛描沈線文と棒状工具による刺突文(㊻)などによる充填の他に、縄文を地文として充填した後、細篦描波状文が施されている例(㊷)もみられる。鋸歯文が描かれた場合には、縄文(㉒・㉓)、縄文と刺突文(⑰～⑲・㊼・㊾)、縄文と櫛描沈線文(⑬)、刺突文と櫛描沈線文(⑮)、櫛描沈線文(㊹)が充填文として用いられている。弧状文が描かれている場合は、縄文(②・⑥・㉘・㉝)、刺突文(㊶)、縄文と刺突文(③・⑯)によって充填されている例と、充填文が施されていない例(④)が確認されている。その他には、変形工字文が施された例もみられ、刺突文(⑳)、縄文(㊸)による充填が行われている。以上のように胴中央部では、横平行沈線文に鋸歯文や弧状文が加わり、胴上部に比べてより変化に富んだ文様構成が採用されていたことがうかがえる。胴下半部は、無文のままになっており、加飾が行われている例は1例も認められない。壺下半部から底部の資料

をみると、下半部の調整は、刷毛のち磨きを行っている例（8・33)、削りのち磨きを行っている例(22)がある。形態的には、底部から丸味をもって緩やかに開きながら立上がる例（8）と、底部から直線的に開く例（9・22・33）の2種がみられる。

以上、各部位における文様について概観してきたが、ここで、出土例の多い胴部に着目した場合、壺の文様構成は大きく3群に分類できるものと思われる。

A群：太箆描沈線によって横方向の文様を施している。資料では、横平行文、鋸歯文、弧状文によって文様が描かれ、縄文・刺突文・櫛描沈線文を充塡文として用いている例が大半である。

B群：太箆描沈線によって縦方向の文様を施している。資料では、懸垂文によって文様帯を区画し、縄文・櫛描沈線文で充塡している例が2点だけみられる。

C群：太箆描沈線によって幾何学文をモチーフにした文様を施している。資料では、変形工字文、重山形文、三角形連続文などを描き、縄文・刺突文・櫛描沈線文で充塡している例がある。さらに、胴部における文様の組み合わせについて、他遺跡出土資料を参考にしながら、上記の各群の中で考えてみた。

〔A群：横方向の施文を中心とする場合〕

A_1：胴上半部・中央部とも同一の文様・充塡文を施している。これは21に代表される組み合わせ例で、拓本資料では胴上半部の㊽・㊻と中央部の㉔が該当するものと思われる。

A_2：胴上半部・中央部とも同一の文様・充塡文を施しているが、上半部と中央部の境に全く異なる充塡文を一列配することによって、胴部の張りを強調している。これは28にみられる組み合わせ例である。拓本資料での確認は得られなかった。

A_3：胴上半部と中央部では文様が異なり、それに応じて充塡文も違っている。2に代表される組み合わせ例で、拓本資料による限りでは、上半部に太箆描沈線による横平行文を施し、中央部には鋸歯文、弧状文が描かれる場合が多い。充塡文は縄文・刺突文・櫛描沈線文が用いられている。拓本資料のほとんどはこの組み合わせになると思われる。

〔B群：縦方向の施文を中心とする場合〕

B：胴上半部に懸垂文が施されている例で、拓本資料㊾（縦櫛描沈線文で充塡）・㊶（縦櫛描沈線文と縄文で充塡）にみられる。これらは上半部しかなく中央部の文様は不明であるが、栗林遺跡、平柴平遺跡などの出土資料をみる限りにおいては、中央部は横方向の施文が多く、横平行沈線文（栗林遺跡）・重三角文と弧状文（平柴平SKY05）、重山形文と連弧文（平柴平SBY04）、重鋸歯文（平柴平SKY03）などが施されている。

〔C群：幾何学文を中心とする場合〕

C_1：胴上半部あるいは中央部に変形工字文が施されている例で、拓本資料⑳（上半部、一部を刺突文で充塡）・㉑（中央部、⑳と同一個体）、㊸（中央部、縄文による充塡）が出土している。変形工字文を施した例は、伊勢宮遺跡、栗林遺跡出土資料などにみられ、充塡文として縄文をもつ横平行沈線文との組み合わせが多くみられる。

C_2：胴中央部に重三角形連続文が施されている例である。拓本資料⑥⓪・⑨⑦にみられ、刺突文による充塡がなされている。これに類似する資料として、上半部に懸垂文をもつ平柴平ＳＫＹ０３が掲げられるが、上半部の文様は確定できない。

C_3：胴中央部に重山形文が施されている例で、29にみられる。類似する資料として、上半部に懸垂文が施されている平柴平SBY０４出土資料が掲げられるが、重山形文の施文範囲、位置、規格などが異なるので、資料29の上半部に懸垂文が施されていたと断定することはできないと思われる。

甕　口縁部形態には、口唇部が丸味をもち強く外反する例（4・13・14・15・㉜・㉝・㉞・㉟）、口唇部が肥厚し外反する例（37・38）、口唇部が平坦でわずかに外反する例（㉚・31・㊼）と強く外反する例（㊽）がみられる。胴部は口径より大きくなることはなく、14・㊾以外は顕著な膨らみをもたないまま底部へと収束するものと思われる。底部はすべて平底である。

施文は、口唇部・頸部・胴部に施されている。頸部への施文は稀であり、２例だけにみられる。

口唇部　縄文のみを施文している例（4・30・31・㊼・㊼）、刺突文を施している例（13・⑨⑧・⑨⑨）、縄文を転がして後、刺突文を施している例（㉜～㉞・㊽）がみられる。

胴部　櫛描沈線文を１段だけ施文している例（4・14・38・⑤・㉜～㉟・㊼・㊾・⑤⓪・⑧②～⑧③・⑨⑨・⑩②）が多く、次に櫛描横羽状文を施文した直上・直下あるいは方向変換点上に刺突文を１列めぐらせている例（15・31・㊱・㊴・㊾～㊶・⑩③）がみられる。さらに少数ではあるが、櫛描横羽状文を２段施した例（㊵、櫛描波状文の直下に刺突文１列をめぐらせている例（㊲）、櫛描縦線文の直下に刺突文が１列めぐらされている例（㊳）、櫛描波状文（⑩①）、櫛描Ｔ字状文（㉚）が施されている例などもみられる。

頸部　櫛状工具による押引文（14）と刺突文（37）の２種類がみられる。

甕の文様の組み合わせは、口唇部に縄文が施された場合、胴部文様には櫛描横羽状文（4・㊼）、櫛描横羽状文と刺突文の組み合わせ（31）、櫛描Ｔ字状文（㉚）がみられ、刺突文の場合は櫛描羽状文（13・⑨⑧・⑨⑨）、縄文と刺突文と施された場合には櫛描横羽状文（㉜～㉞）、口縁部に施文がない場合は櫛描横羽状文（14）が施され、口唇部は無文である（14・37）。

鉢　口縁部が外反し、体部に太筬描沈線文で施文された浅鉢状のもの（10・㉛・㊺・㊻）、厚手で体部への施文はなく、口唇部のみに縄文が施されているもの（35）、口縁部が内弯し赤色塗彩が施されているもの（23・24）、片口の深鉢状をなし口唇部に縄文が施されているもの（11）、大形で、口縁部がほぼ直角に外反し、内側に縄文地文の上に太筬描鋸歯文を施しているもの（41）、口唇部に縄文、口縁部の輪積み段下に刺突文を施し、段上に縄文を施しているもの（㉚）と無文のもの（㉙）などが出土している。

甑　３点出土している。口縁部はやや内弯し、穴はほぼ中央に１ヶ所開けられている（12・20・36）。穴の形状は円形になると思われるが、12は隅丸三角形状に穿孔されている。

小形壺　口縁部はわずかに外反し、７㎜の間隔をおいて並行に２ヶ所穿孔されている。胴部は

下半に最大径がある。施文は口唇部に縄文、頸部～胴部上半に太箆描沈線で横並行文がめぐらされ、胴部下半には山形文が施されている（3）。

蓋　つまみは欠落している。厚手に作られており、口縁部には本体と結びつけるためのものと思われる一対の孔が穿たれている。天井部には縄文を地文とし、その上に太箆描沈線で山形文を描いた文様が施文されている（34）。

以上、本遺跡出土の弥生土器について述べてきたが、これらを周辺遺跡（図102・103）出土の栗林式土器と比較した場合、(1)甕の頸部文様帯が定着していない、(2)壺では懸垂文の例が少ない、(3)壺、甕ともに翼状口縁がないことが指摘される。中でも本遺跡出土弥生土器の時期を決定する上において注目されるのは、甕の頸部文様帯である。簾状文・波状文などの頸部文様帯は栗林期以前には認められないことから、本遺跡出土の弥生土器を栗林式土器の範疇で捉えるとすれば、上記した遺跡出土の栗林式土器よりも古い段階に位置づけてもよいものと思われる。

（田中寿賀子）

表2　弥生土器観察表

出土地点	図番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	色調		焼成	成形	調整	施文	備考
				口径	底径	器高		外	内		外面	内面		
D地点1号住	1	Y	壺	7.0			完	d	d	粗	ミガキ？	ミガキ？		磨耗著しい
	2	Y	壺				1/4	d	d	粗	ハケ→ミガキ 縄文、刺突、櫛描、沈線	まもう		
	3	Y	壺	8.4			1/4	b	b	粗	ミガキ 縄文、沈線	ハケ→ミガキ		口縁部 緊縛孔
	4	Y	甕	16.4			1/5	b	b	粗	櫛描横羽状条痕文	ミガキ		
	5	Y	甕		5.4		1/4	b	b	良	ミガキ	ミガキ		
	6	Y	甕		7.6		1/2	b	b	良	ミガキ	ハケ		炉内
D地点2号住	7	Y	壺	9.6			完	e	e	良	ハケ→ミガキ？ 沈線	？		磨耗著しい
	8	Y	壺		7.2		1/2	c	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ		磨耗著しい
	9	Y	壺		6.6		1/3	e	e	良	？	？		磨耗著しい
	10	Y	鉢	17.6			1/6	e	e	良	ハケ→施文→ミガキ 沈線	ミガキ？		高坏？
	11	Y	鉢	22.8	7.1	12.7	3/4	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ		片口
	12	Y	甑	16.3	5.6	11.0	1/3	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ		磨耗著しい
	13	Y	甕	21.0			1/4	e	e	良	ハケ→施文 櫛描横羽状条痕	ハケ→ミガキ		

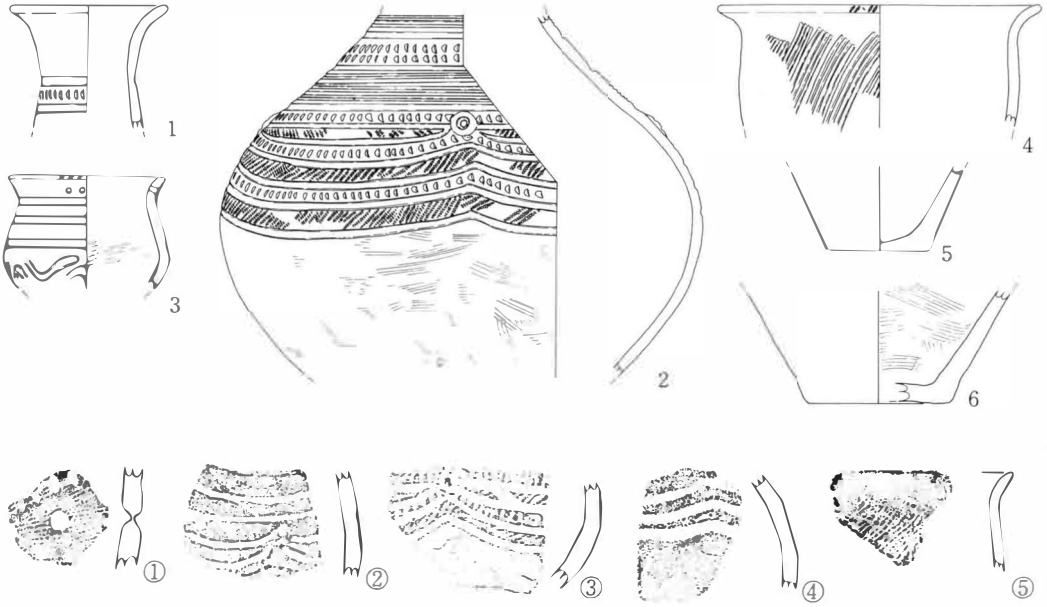
b―黒褐　c―灰褐　d―黄褐　e―赤褐　（表2―1）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
D地点2号住	14	Y	甕	19.6			1/8	e	e	良	ハケ→施文（櫛描）	ハケ→ミガキ	
	15	Y	甕	23.6			1/8	e	e	良	ハケ→施文（櫛描横羽状条痕、刺突）	ハケ→ミガキ	
	16	Y	甕		6.6		3/4	e	a	良	？	？	磨耗著しい
	17	Y	甕		5.8		3/4	c	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	18	Y	甕		6.8		1/3	e	e	良	ミガキ	ハケ→ミガキ	磨耗著しい
	19	Y	甕		4.8		1/2	c	e	良	ミガキ	ミガキ	磨耗著しい
16号住	20	Y	甑	15.7	6.0		1/8	be	e	良	ケズリ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
D地点17号住	21	Y	壺				1/4	e	c	良	ハケ→施文→ミガキ（櫛描、櫛刺突、沈線）	ハケ→ミガキ	
	22	Y	壺		7.0		完	e	e	良	ケズリ→ミガキ	ハケ	外面黒斑有
	23	Y	鉢	13.8	5.4	6.0	1/3	a	f	良	ケズリ→ミガキ	ハケ→ミガキ	内面赤彩
	24	Y	鉢	13.5	5.8	5.4	3/4	f	f	良	ケズリ→ミガキ	ミガキ	内外面赤彩
	25	Y	甕		6.8		1/2	b	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ	
	26	Y	甕		5.8		1/2	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ	外面黒斑有
D地点1号土壙	27	Y	壺	8.4			3/4	d	d	粗	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	磨耗著しい
	28	Y	壺				1/4	b	d	良	施文→ミガキ（沈線、刺突、鋸歯文）	ハケ	外面黒斑有
	29	Y	壺				1/5	d	d	良	施文→ミガキ（山形沈線、櫛描充塡）	ハケ	
	30	Y	甕	18.6			1/4	b	d	良	施文（刺突、櫛描T字文）	ハケ	
	31	Y	甕	19.0			1/4	d	d	粗	施文（縄文、櫛描横羽状条痕）	ハケ	内外面黒斑有
D地点検出面	32	Y	壺				1/2	e	e	良	ハケ→施文（沈線、刻み）	ハケ	
	33	Y	壺		7.2		1/2	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ	
	34	Y	蓋	9.0			1/2	e	e	良	ハケ→施文（縄文→沈線）	ハケ	
	35	Y	鉢	11.1	5.7	4.8	3/4	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	外面口縁部黒斑
	36	Y	甑		7.2		1/2	e	b	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	外面黒斑有
	37	Y	甕	26.4			1/6	e	e	良	ハケ	ハケ	
	38	Y	甕	16.6			1/5	b	b	良	ハケ→施文（櫛描横羽状条痕）	ハケ→ミガキ	
	39	Y	甕		5.8		完	b	b	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	40	Y	甕		6.8		1/3	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	41	Y	鉢？	33.6			1/5	e	e	良	ハケ→ミガキ（口縁部縄文→沈線）	ハケ→ミガキ	高坏？

a—黒　b—黒褐　c—灰褐　d—黄褐　e—赤褐　f—赤

（表2—2）

1号住



2号住

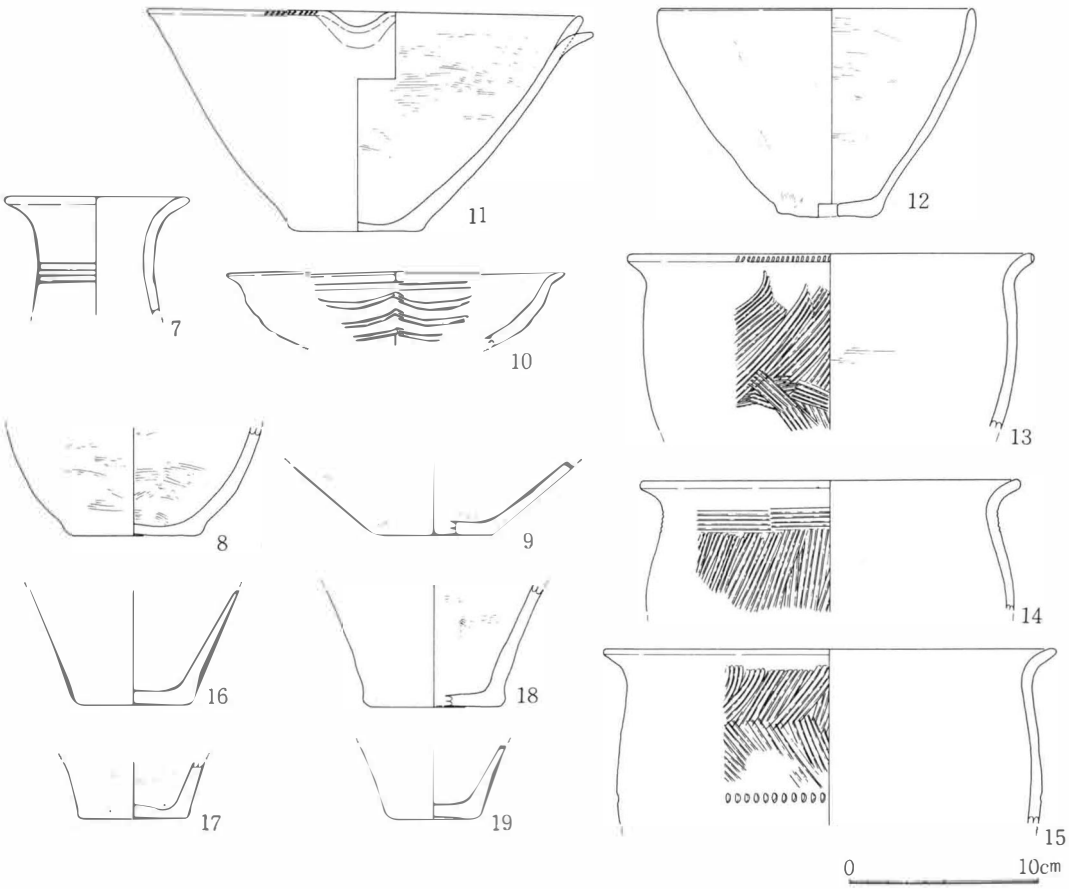


図50　D地点1号住・2号住出土土器

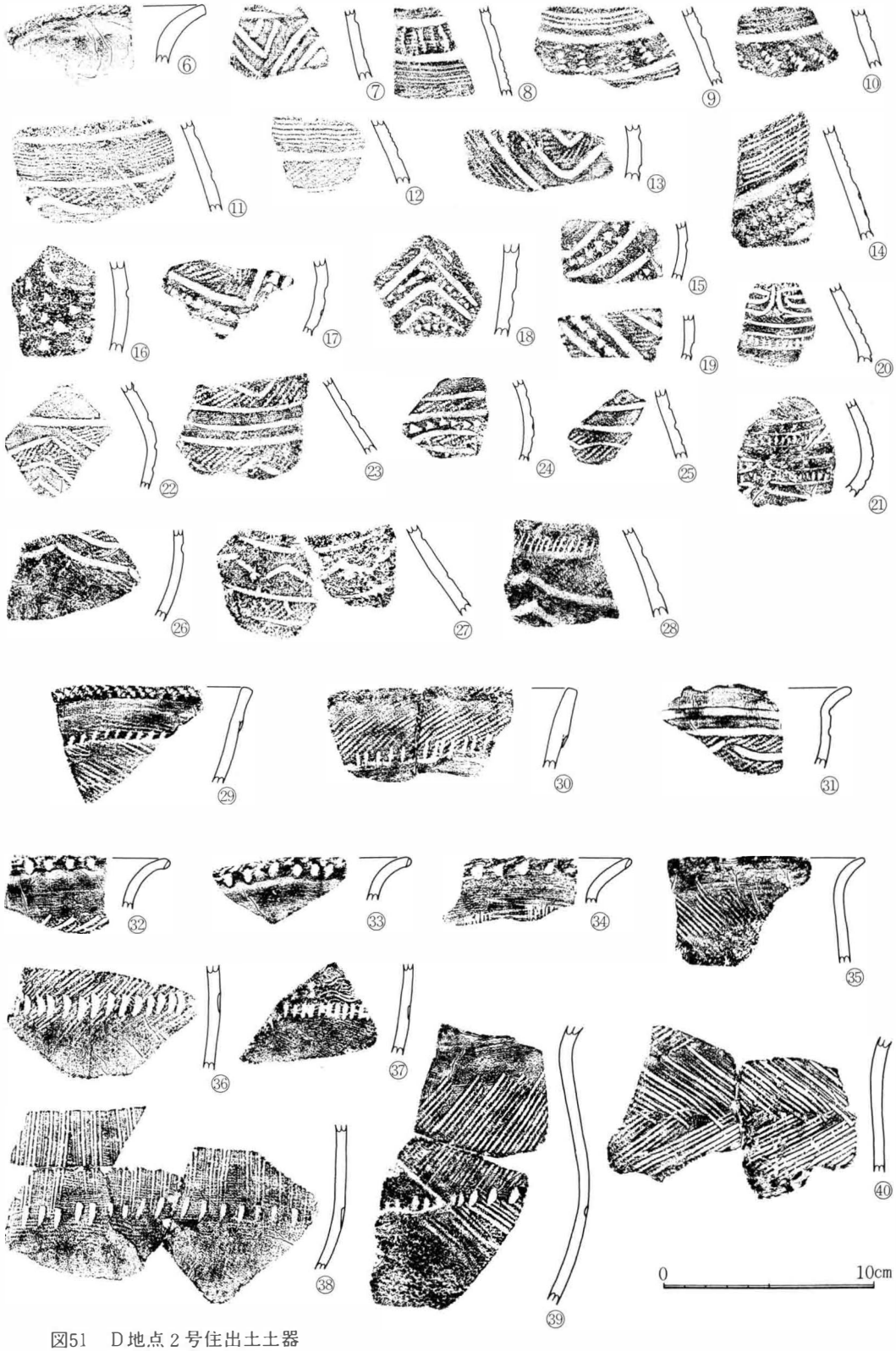
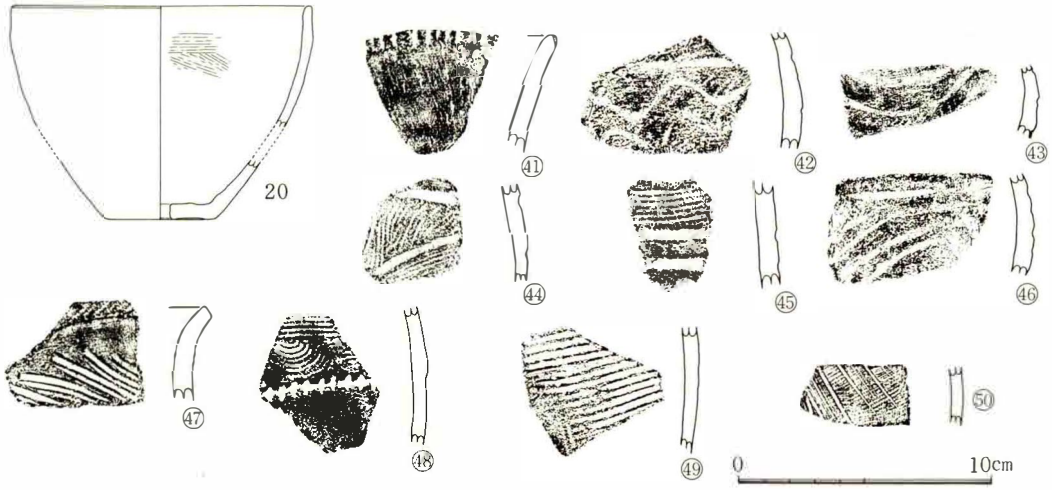
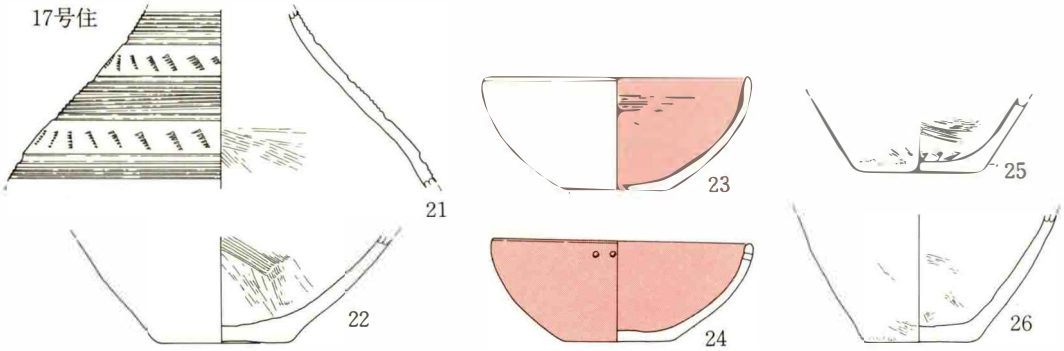


図51　D地点２号住出土土器

16号住



17号住



1号土壙

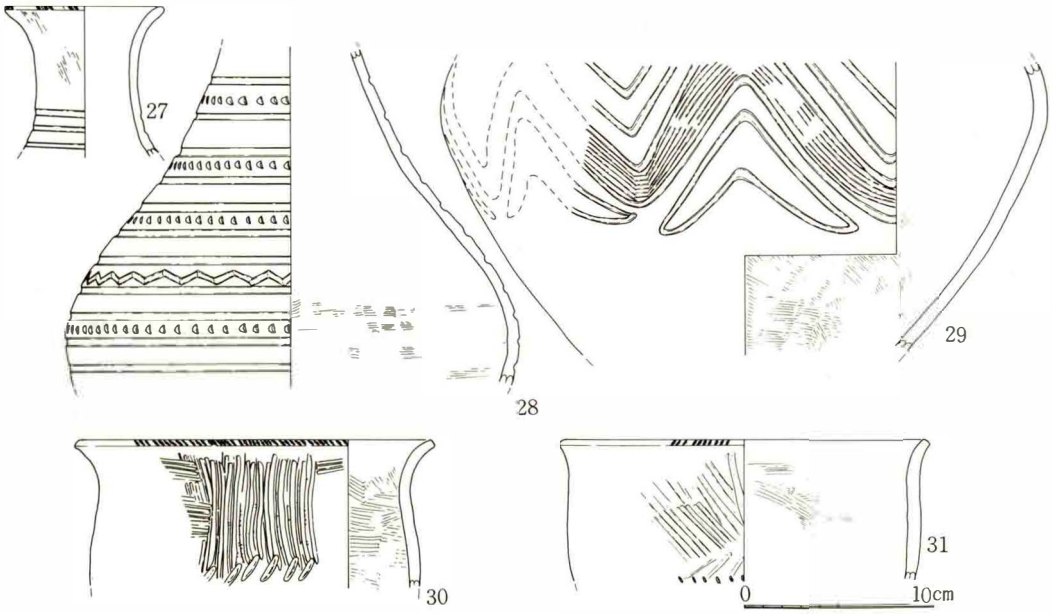


図52　D地点16号住・17号住・1号土壙出土土器

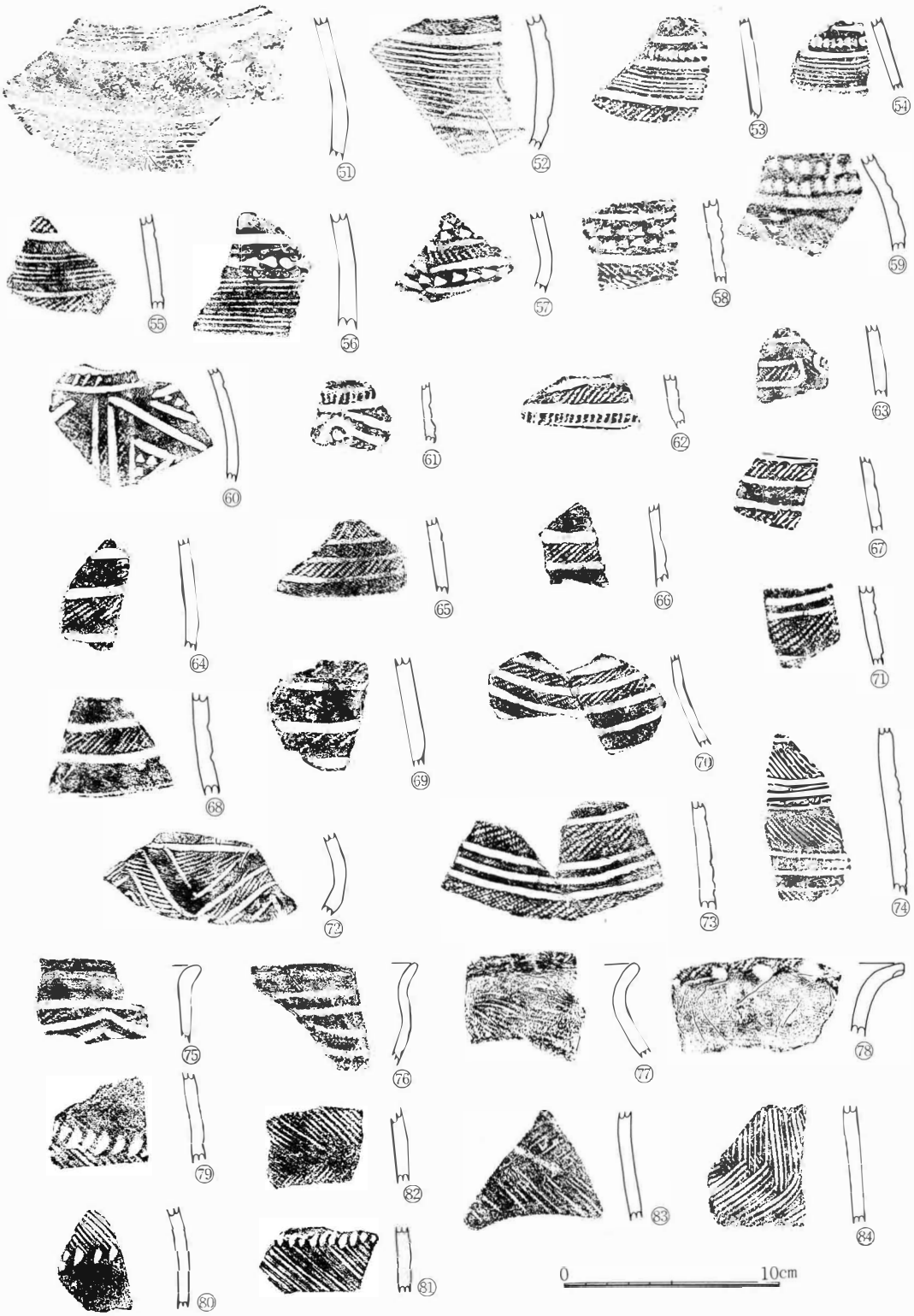


図53　D地点17号住出土土器

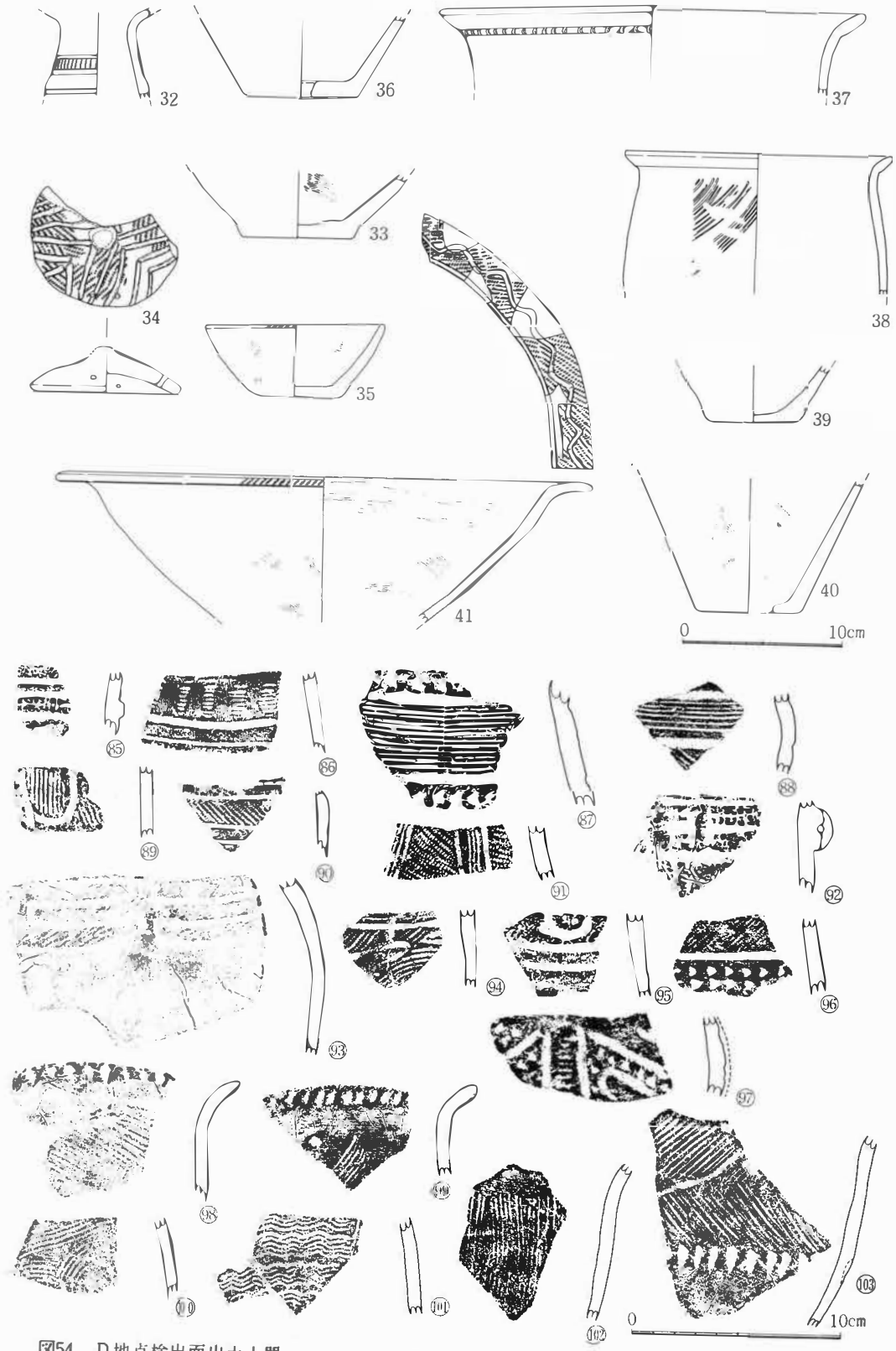


図54　D地点検出面出土土器

2　古墳時代前期

土師器（図55）

壺（1・2）：口縁部が長く「く」字状に外反し、頸部は細く締まっている。胴部は球形状に膨らみ平底の底部へ収束する。また、頸部内面には接合痕と思われる段差もみられる（1）。

甕（3～5、12～16）：口縁部は「く」字状に外反し、球形状の胴部は平底の底部へ収束する。甕の内面にも頸部に接合痕があるもの（12・13）、胴部に輪積み痕を残すもの（4・5）がみられる。

鉢（7）：体部と口縁部は「く」字状の屈曲によって区分され、体部は丸味をもって底部へ移行している。調整は外面がナデ、内面が刷毛で行われている。

高坏（8～11）：坏部の形態は逆台形状を呈し、体部と底部は稜によって明確に区分されている（8～9）。脚部は充塡されており、若干膨らみをもつ円筒状(10)と直線的な円筒状(11)がみられる。

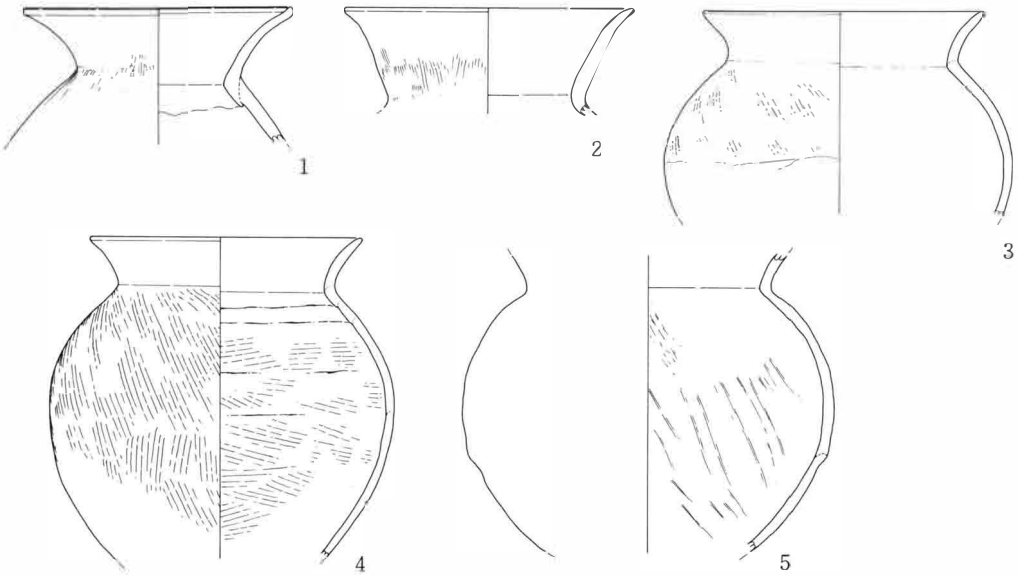
坩（6）：口縁部と底部は欠損している。胴部は楕円形を呈し、断面は頸部のくびれ部で薄く、底部付近では徐々に厚さを増している。底部は丸底になるものと思われる。　　（田中寿賀子）

表3　古墳前期土器観察表

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
D地点3号住	1	H	壺	14.4			3/4	e	e	粗	ハケ→ミガキ	ナデ	
	2	H	壺	15.0			1/5	e	e	粗	ハケ	ナデ	
	3	H	甕	15.2			完	b	b	良	ハケ→ナデ 中位以下ヨコケズリ	ナデ 斜め方向平滑化	
	4	H	甕	13.8			完	e	e	良	ハケ	ハケ	
	5	H	甕				1/4	e	e	粗	ミガキ	板状工具 平滑化	
D地点4号住	6	H	坩				1/4	e	e	粗	ケズリ	ナデ	外面黒斑
	7	H	鉢	19.0			1/8	e	e	良	ナデ	ハケ	
	8	H	高坏	12.0			1/2	e	e	粗	ミガキ	ミガキ	黒斑有内外面
	9	H	高坏	15.2			1/4	e	e	粗	ミガキ	ミガキ	磨耗、剥離著しい
	10	H	高坏				完	e	e	粗	ハケ→ミガキ	?	
	11	H	高坏				完	e	e	粗	ハケ→ミガキ	?	
	12	H	甕	20.4			3/4	b e	b e	粗	ハケ状工具による 平滑化	ナデ	磨耗・剥離
	13	H	甕	17.2			3/4	d c	d c	粗	ナデ	ナデ	
	14	H	甕	18.8			1/5	e b	e b	粗	ハケ	ハケ	
	15	H	甕		5.6		完	e c	d	粗	ケズリ→ナデ	ナデ	外面黒斑
	16	H	甕		6.0		3/4	b	c	粗	ナデ	ナデ	内面黒斑

b―黒褐　c―灰褐　d―黄褐　e―赤褐

3号住



4号住

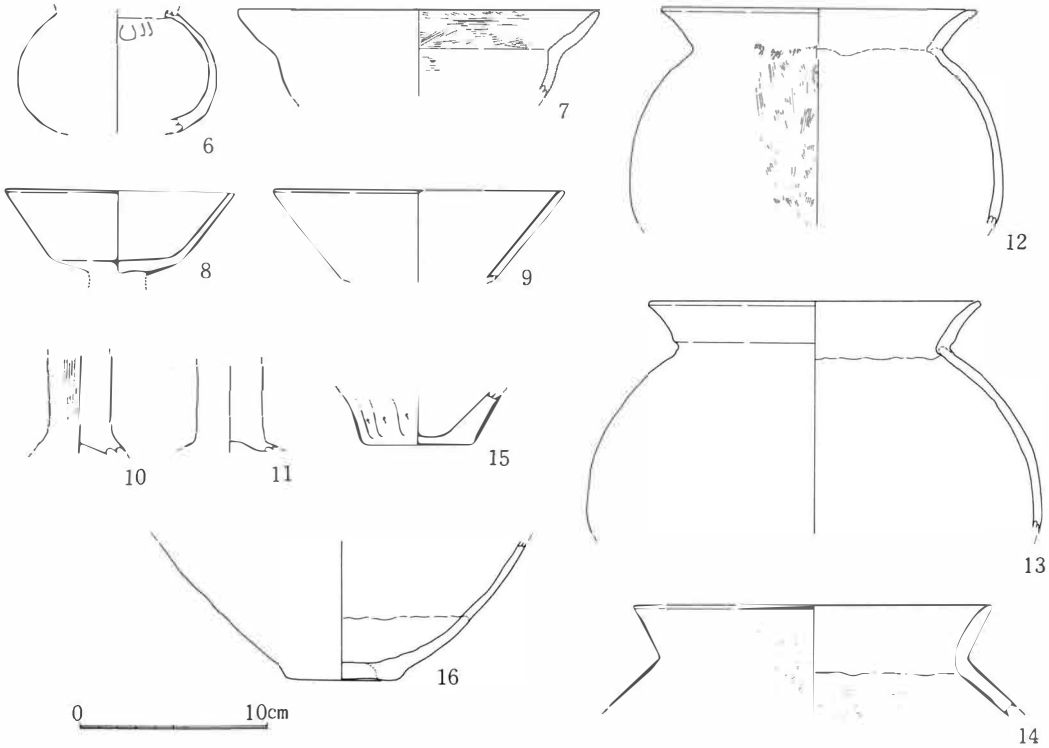


図55　D地点3号住・4号住出土土器

3　古墳時代中期

(1)　土器

①　土師器

坏　坏は多種の形態をもつものが多量に出土した。以下形態の違いを分類し、法量比を図に表わして検討してみたい。

A　須恵器坏の器形を模倣していると　A_1　口縁部が外反するもの（107 ・135 ・136）
　　おもわれる。　A_2　口縁部が直立的なもの（83）

B　口縁端部がヨコナデにより稜を　B_1　口縁部が内弯するもの（223 ・224 ）
　　形成する。　B_2　口縁部が直立的なもの（137・138・141 ～143・225）

C　口縁部が内弯、あるいは直立的となる。（5 ・25～27・139 ・140 ）

D　口縁部が「く」の字に外反する。（2 ～ 4 ・18～24・84～86・108 ・122 ・123 ・144 ・148 ・150 ・151 ・226 ～228）

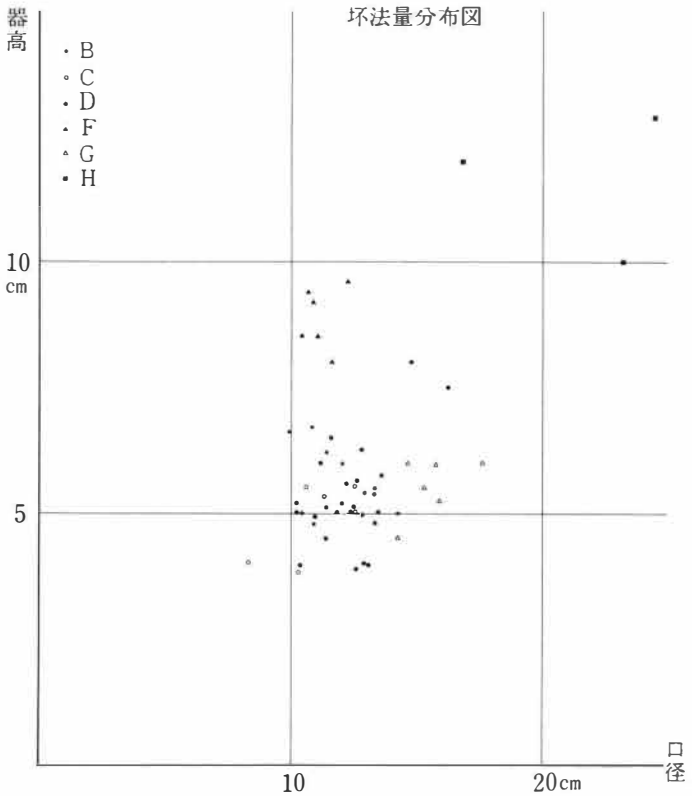
E　口縁部が大きく伸長し、古墳時代後期の様相に近似する。(28)

F　胴部最大径が口径を上回るか同じぐらいのもの　（6 ・16・17・79・152 ・153 ）

G　脚台が付されるもの
（41・109 ～111 ・229 ・230 ）

H　口径、器高とも特に大きく鉢形となるもの　（82・132 ・237 ）

137・143・224・225の内面は黒色で研磨されており、137は暗文様ふうに放射状研磨がある。19・139は極めて薄手で小形である。底部は大部分が丸底であり、平底となるのはH類のみである。法量比からすると、おおよそBCDがまとまり、F、G、Hで各々一群をなしている。脚台が付くと考えたG類は口径に比して器高が少なく扁平形の傾向がある。



ＢＣＤは口縁部の形態が異なるが法量比では同グループを形成し、同様の機能が考えられる。

高坏　高坏はほとんど坏部と脚部が分離した状態で出土しており、ここでは図上復原できた坏部と脚部とに分け、各々以下のように分類した。

坏部　Ａ　３段階に形成され、外面に２段の稜線をもつ。(29)

Ｂ　２段階に形成され、外面に１段の稜線をもつ。(31・33～39・89・92・113・172・177・178・231)

Ｃ　２段階に形成され、稜が突出し、凸帯状となる。(30・32・175・176・232)

口縁部は内弯ぎみに開口するものが一般的であるのに対して、91・92は大きく外反する。後者の形態は小島境遺跡（参考資料　図108）の主流をなすものであり、内弯を新しい傾向と考えたい。

脚部　Ａ　坏部との接合部から「ハ」の字状に大きく開く。(８・42～45・48～50・96・130・190 192・211・232・236)

Ｂ　筒部をもち、裾部が開く。(51～60・94～95・114～116・127～129・173・181～189・210・217・233・234)

Ｃ　筒部がＢより長めで直線的である。(57・58・60・127・128・181・235)

Ｂが主流をなし、筒部は短かく、中位以下が膨らみをもつ。Ｃは小島境遺跡（図109)の形態に近似しており、Ｂは新しい脚部形態として考えたい。185は外面に赤色塗彩が施されている。

甑　単孔のもの（212）と底部が全くないもの（74･75）の２種がある。全形が明らかなものは75のみであり、長胴甕形を呈す。成形は雑で歪みが大きい。

把手（193・194・195）　形態からすると、193　195は甑の把手であると推定されるが、細く水平に伸びる。194は把手は何に備わるものか不明である。

坏蓋（124・125・154～158）　つまみは中央に凹みをもつものと、平坦あるいは膨らみをもつものとがある。蓋全形が明らかなものは154のみであり、器肉は非常に薄く、つまみ部分から緩やかに内弯しながら肩部に稜ができるくらいに強く内傾している。須恵器の坏蓋の模倣と考えたい。

坩（14・15・80・103～105・164～168・219・220）口縁部と胴部が分離して出土しており、全形が明らかなものは出土していない。口縁部は直線的に外反する14と内弯ぎみに外反する104･164がある。長い口縁部が一般的であるのに対して短い219も出土している。小島境遺跡の坩（図107)が一般的に胴径が10ｃｍ内外を示すのに対して、本遺跡出土のものは胴部が強く張り出して扁球形を呈し、大きな胴径（14～16ｃｍ）をもつ点が指摘されよう。

壺　欠損個体ばかりで全形は明らかでない。口縁部の状態から以下の分類をした。

A_1　有段口縁で上段が大きく外反し、頸部が筒状に近い。(131・159)

A_2　有段口縁で上段がやや外反し、段が凸帯状を呈する。(11・12・160・163・209)

A_3　有段口縁で上段が直に近く立ち、受け口状となる。(13・161・207・208・221)

Ｂ　「く」の字状に外反し、端部がさらに外側へ屈曲する。(77・162)

Ａ類はA_1が最も古い形態として把握されるもので、A_2・A_3を有段口縁の末期的形態として捉えたい。Ｂは頸部下の形態では甕の様相に近似するが、器面は研磨されている。底部は丸底(241)

もあるが、殆ど平底（78・106・218・222）である。163は小形である。

甕　口縁部形態の特徴をもとに以下に分類した。

A　口縁部が内弯する。(66・196)

B_1　口縁部が「く」の字に水平に近く外反する。(200・238)

B_2　口縁部が「く」の字に外反する。(7・62・65・67～70・97・98・117・133・197～199・201・203・204)

B_3　口縁部が「く」の字に外反し、端部においてさらに強く外反する。(63・64・99・202)

C　口縁部が短く、直立に近くたちあがる。(61・71)

甕の大きさは、口径で小形の12 cmから大形の23 cmまで様々である。全て底部が欠損する。頸部以下の形態では、幾分小さめで肩部が張り出し長球形を呈するもの(61～63・65)、胴部が長くなり最大径を中位にもつもの（66・71)、下位に最大径が移り長胴の傾向が強いもの（238）等が混在する。205は胴が寸づまりで台付甕の形態を呈す。底部は平底で中央に凹みをもつ。(72・73・100・134)

甑（215）　口頸部片である。1本の明瞭な稜線をもち、須恵器甑の模倣品と考えられる。

②　須恵器

須恵器は15号、17号住居址を除く6軒の住居址から出土しており、その内訳は表のとおりである。その総数は26点で、膨大な出土数の土師器からすると微々たるものである。器種別内訳は坏蓋が10点、坏身が9点、甕2点、高坏1点、甑・壺類4点となり、坏が大半を占め、これらのうち実測できたものは15点である。詳細な検討は次章を参照されたい。

③　土師器の彩色

黒色処理　高坏（40）と坏（122・137・150）の内面は黒色で研磨されており、明らかに内面黒色処理の様相を呈している。また坏のなかには未熟な技術のため不完全な黒色処理となったと考えられるものが4点出土している。研磨は雑であるが一様に黒色である143、研磨は丁寧であるが色調が黒褐色の224と、部分的に黒色でないところが認められる225がそれである。また139は遺存状態が悪く、摩耗しているため研磨の状態は不明であり、色調は現在灰黒色を示してはいるが、当初は黒色を呈していたと推察できる。これらを黒色処理の意識として認めるならば、古墳時代後期に一般的にみられる黒色処理は、中期にその初源が指摘されることとなる。

赤色塗彩　高坏（185）の外面には弥生時代の赤彩土器と同様の赤色を示す塗彩が認められる。また他にも、坏、高坏坏部の内外面、高坏脚部、坩、壺の外面に塗彩と考えたい痕跡が観察される。それらの器面の色調は胎土のものとは異なり、整形では一様に研磨調整がなされている。このことは、土器製作時の最終調整において胎土とは別の化粧土的役目をもつものを施して研磨がなされた結果であると考えたい。このような状況を赤色塗彩と同列の彩色と考えるかどうかは問題が残される。本稿では彩色として把握し、土器観察表に塗彩として記してある。

（横山かよ子）

表4　古墳中期土器観察表

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形 調整 施文 外面	内面	備考
B地点1号住	1	S	坏	11.8	7.0	4.2	完	j	j	良	底部回転ケズリ	底部ナデ	
	2	H	坏	13.2		4.8	完	e	e	粗	ミガキ？	ミガキ？	内外面塗彩 磨耗著しい
	3	H	坏	12.8			1/8	e b	e b	良	ミガキ	ミガキ	
	4	H	坏	13.0			1/5	e	d	良	ミガキ	ミガキ	
	5	H	坏	11.4		5.3	完	b g	b	良	ミガキ？	ミガキ？	
	6	H	坏	10.2			1/4	e	c	粗	ナデ	ナデ	
	7	H	坏	12.2			1/4	b	b	粗	ナデ	ナデ	
	8	H	高坏		9.4		完	d	d	粗	ミガキ	ハケ	
B地点3号住	9	S	蓋	12.8			1/3	l	l	良	回転ケズリ		
	10	S	壺				1/3	h l	h l	良	施文 (沈線、櫛描波状文)	頸部指押え ナデ	
	11	H	壺	14.8			1/8	e	e	良	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
	12	H	壺	17.6			1/6	e	e	粗	ナデ	ナデ	内外面塗彩
	13	H	壺	14.2			完	d	d	良	ミガキ	ミガキ	磨　耗
	14	H	坩	8.2			1/2	d c	e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩 磨耗
	15	H	坩				3/4	e	e	粗	ミガキ？	ミガキ？	磨耗著しい
	16	H	坏	11.6		8.0	完	b e	b	良	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	
	17	H	坏	12.2		9.6	1/2	b e	b	良	ハケ→ミガキ	ミガキ	カマド
	18	H	坏	16.2			1/5	e	e	良	ハケ→ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	19	H	坏	11.2			1/4	d	d	良	ハケ→ミガキ	ミガキ	カマド一括
	20	H	坏	12.2		6.1	完	d	d	良	ミガキ	ミガキ	
	21	H	坏	13.3		5.4	完	e	e	良	ハケ→ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	22	H	坏	12.0		5.2	完	e	e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	23	H	坏	10.8		4.9	1/2	d	e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	24	H	坏	13.0			1/2	e b	e b	良	ミガキ	ミガキ	ピット内
	25	H	坏	12.6			1/4	d	d	良	ハケ→ミガキ	ミガキ	
	26	H	坏	12.6			1/3	b	e	良	ハケ→ミガキ	ナデ→ミガキ	
	27	H	坏	10.4			1/2	d	d	良	ミガキ？	ミガキ？	内外面塗彩
	28	H	坏	16.2			1/3	d	d	良	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	ピット内
	29	H	高坏	20.1			完	e	d e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	30	H	高坏	19.0			1/2	e	e	良	ミガキ	ミガキ	カマド 内外面塗彩

a−黒　b−黒褐　c−灰褐　d−黄褐　e−赤褐　f−赤　g−灰　h−灰白　i−灰黄　j−灰青　k−青　l−灰黒　（表4−1）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形 調整 施文 外面	内面	備考
B地点3号住	31	H	高坏	15.6			1/3	d	d	粗	ミガキ	ミガキ	ピット内
	32	H	高坏	18.8			1/4	d	d	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	33	H	高坏	16.3			完	e	e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	34	H	高坏	17.4			1/6	d e	c	粗	ミガキ	ミガキ	
	35	H	高坏	17.8			3/4	b d	b d	良	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	ピット内 内外面塗彩
	36	H	高坏	16.6			1/3	e	e	粗	ハケ→ナデ→ミガキ？	ハケ→ナデ→ミガキ？	磨耗著しい
	37	H	高坏	14.8			1/4	b	b	良	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	カマド 内外面塗彩
	38	H	高坏	16.6			1/3	d	d	粗	？	？	磨耗著しい 外面塗彩
	39	H	高坏	16.6			1/8	b	b	良	ミガキ	ミガキ	カマド
	40	H	高坏				1/2	b	a	良	ミガキ	ミガキ	内面黒磨
	41	H	坏	14.6			3/4	d	d	良	ハケ	ミガキ	脚台付
	42	H	高坏		14.0		1/2	b	b	良	ミガキ（タテ方向）	ケズリ	
	43	H	高坏		14.0		1/3	e	e	良	ミガキ	ケズリ	
	44	H	高坏		11.6		1/3	b	a c	良	ハケ→ナデ→ミガキ	ケズリ	ピット内
	45	H	高坏				1/3	d	d	良	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ	周溝内
	46	H	高坏		15.2		1/2	d e	c e	良	ミガキ（タテ方向）	ナデ	外面塗彩
	47	H	高坏		12.0		1/3	e	e	良	ミガキ	ケズリ→ナデ	
	48	H	高坏		13.0		1/6	b	c	良	ミガキ	ケズリ	
	49	H	高坏		12.4		1/4	d e	d e	良	ミガキ		
	50	H	高坏				1/2	d	d	粗	ミガキ	ケズリ	
	51	H	高坏				完	b	d	良	ミガキ	ナデ	
	52	H	高坏				完	l	l	良	ミガキ（タテ方向）	ケズリ	
	53	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ	ケズリ	
	54	H	高坏				完	b	b	良	ハケ→ミガキ	ケズリ	
	55	H	高坏				完	e	d	良	ハケ→ミガキ	ケズリ→ナデ	外面塗彩
	56	H	高坏				3/4	e	d	良	ミガキ		外面塗彩
	57	H	高坏				1/3	e	e	良	ミガキ		
	58	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ		
	59	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ		内外面塗彩
	60	H	高坏				完	b	b	良	ミガキ		

（表４－２）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点3号住	61	H	甕	13.0			3/4	de	cd	粗	ハケ	平滑化	カマド
	62	H	甕	12.0			3/4	b	b	粗	ハケ	ハケ→ナデ	内外面炭化物付着
	63	H	甕	14.6			完	de	cd	粗	ハケ	ハケ	カマド
	64	H	甕	17.0			1/4	e	e	粗	ナデ	ナデ	磨耗著しい
	65	H	甕	15.0			1/4	e	d	粗	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
	66	H	甕	14.6			1/4	de	c	粗	ハケ	ケズリ	カマド
	67	H	甕	16.3			1/4	b	d	粗			内面塗彩
	68	H	甕	19.4			1/8	b	b	粗	ハケ→ナデ	ナデ	カマド
	69	H	甕	19.0			1/5	b	b	粗	ナデ	ナデ	
	70	H	甕	23.2			1/4	d	d	粗	ナデ	ナデ	
	71	H	甕	14.0			1/2	b	b	粗	ハケ	ハケ	カマド
	72	H	甕		5.1		完	e	e	良	ハケ→ナデ	平滑化	
	73	H	甕		4.5		完	e	e	粗	ハケ 底部ケズリ	ハケ	
	74	H	甑		8.0		完	d	d	粗	ハケ	ナデ	
	75	H	甑	15.2	9.6	22.8	完	d	b	粗	ナデ	ハケ→ナデ	カマド
B地点4号住	76	S	甕	18.6			1/5	!	l	良	施文 (櫛描波状文)		
	77	H	壺	13.6			完	eb	ba	良	ハケ→ミガキ (タテ方向)	ナデ 頸部はハケ	
	78	H	壺		7.4		1/2	de	d	良	ケズリ	平滑化	
	79	H	坏	10.8		9.2	完	e	e	粗	ハケ→ナデ→ミガキ	平滑化→ナデ	
	80	H	坩				1/3	e	d	良	ミガキ	ナデ	外面塗彩
	81	H	坏				3/4	bd	dc	粗	ケズリ→ミガキ？	平滑化→ミガキ	
	82	H	鉢	23.2			1/8	b	b	粗	ミガキ	ミガキ	
	83	H	坏	11.0			1/4	b	b	良	ケズリ→ミガキ	ミガキ	
	84	H	坏	10.2		5.2	1/4	e	e	良	ミガキ	ミガキ	ピット内
	85	H	坏	11.8			1/4	d	d	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	86	H	坏	11.6			1/4	d	l	良	ミガキ	ミガキ	
	87	H	高坏	11.2			1/2	b	b	粗	ケズリ→ミガキ	ナデ→ミガキ	
	88	H	高坏	15.6			1/4	d	d	粗	ミガキ	ミガキ（放射状）	磨耗
	89	H	高坏	16.4	11.7	12.3	3/4	b	d	良	ミガキ	坏部 ハケ→ナデ→ミガキ 脚部 ハケ→ナデ	
	90	H	高坏	17.5			完	b	b	良	ミガキ（タテ方向）	ミガキ（放射状）	

（表4－3）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点4号住	91	H	高坏	17.2			1/4	e	e	良	ミガキ（タテ方向）	ミガキ（放射状）	
	92	H	高坏	19.8			1/8	e	e	良	ミガキ（タテ方向）	ミガキ（放射状）	外面塗彩
	93	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	94	H	高坏		7.0		3/4	d	d	粗	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
	95	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ	ケズリ→ナデ	外面塗彩
	96	H	高坏		11.6		完	d	d	粗	ミガキ	ミガキ	
	97	H	甕	14.4			3/4	c	c	粗	ハケ→ミガキ	ナデ	
	98	H	甕	14.6			1/4	d	d	粗	?	?	磨耗
	99	H	甕	16.8			1/3	de	cd	粗	ハケ	ハケ	
	100	H	甕		6.6		完	cd	d	粗	?	?	磨耗
B地点12号住	101	S	蓋				1/12	j	j	良	回転ケズリ		
	102	S	坏	10.0		4.9	1/5	g	g	粗	回転ケズリ		
	103	H	坩				完	bd	b	良	ケズリ→ミガキ（横方向）	?	外面塗彩
	104	H	坩	8.6			1/5	d	e	粗	ミガキ	ミガキ	
	105	H	坩				完	e	a	良	ミガキ	平滑化	外面塗彩
	106	H	壺		7.0		1/5	b	g	良	ミガキ	ミガキ	外面塗彩
	107	H	坏	10.4			1/5	e	d	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	108	H	坏	13.2			1/5	d	d	粗	ミガキ	ミガキ	
	109	H	坏	15.6			1/5	e	d	良	ハケ→ミガキ	ミガキ	内外面塗彩 脚台付？
	110	H	坏	15.2			完	de	de	粗	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	脚台付 磨耗著しい
	111	H	坏	17.6			1/8	d	b	粗	磨耗	ミガキ？	脚台付？ 磨耗著しい
	112	H	高坏	15.8			1/3	e	e	粗	ミガキ？	ミガキ？	磨耗著しい
	113	H	高坏	14.9			1/5	e	e	粗	ミガキ？	ミガキ？	磨耗著しい
	114	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ	ケズリ→ナデ	外面塗彩
	115	H	高坏		12.6		完	e	e	良	ミガキ	ケズリ→ナデ	
	116	H	高坏		11.4		完	e	e	良	ミガキ（タテ方向）	ケズリ→ナデ	外面塗彩
	117	H	甕	22.0			1/2	b	c	粗	ハケ→ミガキ	平滑化→ミガキ	
B地点13号住	118	S	蓋	12.4		4.1	1/4	l	l	良	回転ケズリ		
	119	S	蓋				1/12	l	l	良			
	120	S	坏	8.6			1/6	g	g	良			

（表4－4）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点13号住	121	S	高坏		7.2		1/8	g	g	良			ピット内
	122	H	坏	10.4			1/4	d	a	良	ミガキ	ミガキ	内面黒磨
	123	H	坏	12.6		5.7	1/3	d	e	良	ミガキ	ミガキ	外面塗彩
	124	H	蓋				完	d	d	良	ミガキ	ミガキ	外面塗彩 磨耗
	125	H	蓋				完	d	d	良	ハケ→ミガキ	?	カマド
	126	H	高坏	15.0			1/8	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	内外面塗彩
	127	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ	ケズリ→ナデ	外面塗彩
	128	H	高坏				完	b e	b e	良	ミガキ	ケズリ→ナデ	ピット内
	129	H	高坏				完	d	d	良	ミガキ	ケズリ→ナデ	
	130	H	高坏		13.8		1/4	d	d	粗	?	?	磨耗著しい
	131	H	壺	16.8			1/2	d	d	粗	ミガキ?	ミガキ?	磨耗著しい
	132	H	坏	16.8			1/8	d	d	良	ミガキ	ミガキ	
	133	H	甕	16.0			1/4	d	d	粗	ハケ→ミガキ?	?	磨耗著しい
	134	H	甕		5.4		完	e	e	粗	ハケ	ハケ	
B地点14号住	135	H	坏	11.2			1/8	d	d	粗	ミガキ?	ミガキ	磨耗
	136	H	坏	11.6			1/16	b d	b d	粗	ミガキ?	ミガキ?	磨耗
	137	H	坏	10.4		5.0	1/2	e	a	良	ミガキ	ミガキ(放射状)	内面黒磨
	138	H	坏	10.8		4.8	1/3	d	d	良	ハケ→ミガキ	ミガキ	
	139	H	坏	8.4		4.0	3/4	d	l	粗	ミガキ?	ミガキ?	剥離磨耗
	140	H	坏	10.6		5.5	1/2	c	d	粗	ミガキ?	ミガキ?	磨耗
	141	H	坏	10.8		6.7	1/2	d	d	粗	ハケ→ミガキ	ミガキ	ピット内
	142	H	坏	14.2			1/4	d	c	粗	ミガキ	ミガキ	
	143	H	坏	12.0			1/5	a	a	良	ミガキ	ミガキ	内面黒磨
	144	H	坏	10.2		5.0	完	e	e	粗	ミガキ?	ミガキ?	磨耗著しい
	145	H	坏	11.4		4.5	3/4	e	e	粗	ミガキ?	ミガキ?	磨耗著しい
	146	H	坏	12.6		3.9	1/3	b	b	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	147	H	坏	13.4		4.2	3/4	d	e	良	ミガキ	ミガキ	
	148	H	坏	11.4	3.2	5.1	1/3	d	d	良	ミガキ 底部付近静止ケズリ	ハケ→ミガキ	
	149	H	坏	13.4			1/3	d	e	良	ミガキ	ミガキ	ピット内 内外面塗彩
	150	H	坏	13.6		5.8	1/4	d	a	良	ミガキ	ミガキ	内面黒磨

(表4—5)

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形 調整 施文 外面	内面	備考
B地点14号住	151	H	坏	12.8		6.2	1/2	b e	c	良	ミガキ	ミガキ	
	152	H	坏	11.0			1/4	b	b	良	ミガキ	ミガキ	
	153	H	坏	10.6		9.4	3/4	e	e	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	154	H	蓋	13.0		5.4	1/3	e	e	粗	ケズリ、ハケ	平滑化	磨耗著しい
	155	H	蓋				完	d	e	粗	ミガキ？	ミガキ	磨　耗
	156	H	蓋				完	e	e	粗	ケズリ、ミガキ	ミガキ	
	157	H	蓋				1/8	d	d	粗	平滑化→ミガキ	平滑化→ミガキ	外面塗彩
	158	H	蓋				完	e	e	粗	ミガキ？	ミガキ？	磨　耗
	159	H	壺	15.4			3/4	d	d	良	ミガキ	ミガキ	外面塗彩
	160	H	壺	16.8			1/4	d	g	粗	ミガキ？	？	磨耗著しい
	161	H	壺	16.8			1/5	d	d	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	162	H	壺	15.6			1/2	b d	b d	良	ハケ→ミガキ	平滑化→ミガキ	
	163	H	壺	10.2			1/6	b	b	良	ミガキ	ミガキ	
	164	H	坩	8.8			1/3	d	d	良	ミガキ	ミガキ	
	165	H	坩				1/3	b	b	粗	？	？	外面塗彩
	166	H	坩				1/3	e d	e	粗	ミガキ	板状工具による平滑化	
	167	H	坩				3/4	d	d	良	ミガキ	ナデ（横方向）	
	168	H	坩				1/4	d	d	良	ミガキ	平滑化	
	169	S	坏	10.2		4.5	完	h	h	良	ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	
	170	S	坏	11.2		4.7	3/4	h	h	良	ナデ 回転ヘラケズリ		
	171	S	直口壺	10.6			1/8	l	l	良	施文（櫛描波状紋、凸線2本）		
	172	H	高坏	16.0	10.9	12.3	3/4	b	b	良	ミガキ（タテ方向）	ミガキ（放射状）脚部ケズリ	内外面塗彩
	173	H	高坏				1/2	e	e	良	ミガキ	脚部ケズリ	内外面塗彩
	174	H	高坏	17.6			1/3	c d	c d	粗	？	？	磨耗著しい
	175	H	高坏	17.6			1/5	d	d	良	ミガキ	ミガキ	
	176	H	高坏				1/3	e	e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩 磨耗
	177	H	高坏	14.4			1/3	b d	b d	粗	？	？	磨耗著しい
	178	H	高坏	15.6			完	e	e	粗	ミガキ（タテ方向）	？	磨　耗
	179	H	高坏	15.4			3/4	d	d	良	ミガキ（タテ方向）	ミガキ（放射状）	
	180	H	高坏				1/3	e	e	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩

（表4－6）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点14号住	181	H	高坏				1/3	e	e	良	?	ケズリ	磨耗
	182	H	高坏				1/3	e	e	良	ハケ→ミガキ	筒部シボリ 裾部ハケ?	磨耗
	183	H	高坏				1/3	d	d	良	ミガキ?	ケズリ	磨耗
	184	H	高坏				完	e	e	良	ミガキ?	ケズリ	外面塗彩
	185	H	高坏		11.9		1/3	d	d	良	ミガキ	ケズリ	赤彩
	186	H	高坏				完	c e	c e	良	ミガキ	ケズリ	磨耗
	187	H	高坏		10.5		1/3	e	e	粗	?	ケズリ	磨耗
	188	H	高坏				1/4	d	d	良	ミガキ	ケズリ	
	189	H	高坏				完	b	a	良	ミガキ	ケズリ	
	190	H	高坏				完	d	d	良	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ?	外面塗彩
	191	H	高坏				完	d	d	良	ミガキ	ケズリ	
	192	H	高坏		14.4		7/8	d	d	粗	?	ケズリ(横方向)	磨耗
	193	H	把手				完	d	d	良			
	194	H	把手				完	d	d	良			
	195	H	把手				完	e	e	良			
	196	H	甕	11.6			1/2	c e	c	粗	ミガキ?	?	磨耗
	197	H	甕	13.0			1/3	b	a	粗	?	?	磨耗著しい
	198	H	甕	14.0			3/4	e	e	粗	?	?	磨耗著しい
	199	H	甕	16.8			1/4	b	b	粗	?	?	磨耗著しい
	200	H	甕	22.6			1/5	b d	b d	粗	ハケ	?	
	201	H	甕	15.4			1/4	d	d	粗	ミガキ?	?	磨耗著しい
	202	H	甕	14.4			1/2	b	b	粗	ハケ	平滑化→ナデ	
	203	H	甕	17.2			1/4	d	d	粗	ミガキ?	ミガキ?	磨耗
	204	H	甕	14.6			1/4	d	d	粗	?	平滑化	磨耗
	205	H	甕	16.2			1/8	d	d	良	ミガキ?	?	磨耗
B地点15号住	206	H	坩				1/5	e	e	良	ミガキ?	ナデ?	磨耗
	207	H	壺	18.0			1/6	e	e	良	ミガキ	?	磨耗
	208	H	壺	15.8			1/5	e	e	良	ミガキ?	?	
	209	H	壺	16.6			1/3	e b	e b	良	ミガキ	ミガキ	
	210	H	高坏				完	d	d	良	ミガキ	ケズリ	

(表4—7)

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
15号住	211	H	高坏		14.2		完	e	e	良	ミガキ	ケズリ	
	212	H	甑		5.6		1/3	d	e	良	ハケ	ハケ	
B地点検出面溝	213	S	蓋	9.8			1/8	l	g	良			検出面
	214	S	蓋	12.4			1/8	g	g	良	回転ケズリ		検出面
	215	H	甕				1/4	e	e	良	ミガキ	ミガキ	検出面
	216	H	坏	12.4		4.1	1/4	e	c	良	ミガキ	ミガキ？	検出面
	217	H	高坏				1/2	e	e	良	ミガキ？	シボリ	1号溝磨耗
	218	H	壺？		7.0		2/3	e	e	良	ミガキ？	ハケ？→ミガキ？	1号溝
B地点17号住	219	H	坩	7.4			2/3	cd	cd	良	ハケ→ミガキ	ナデ	短口縁
	220	H	坩				1/4	d	c	良	ミガキ	ナデ押え	
	221	H	壺	16.6			1/6	d	d	粗	ミガキ	ミガキ	
	222	H	壺		6.8		1/3	bc	d	粗			磨耗
	223	H	坏	9.9		6.6	1/2	d	d	良	ハケ→ミガキ	ナデ→ミガキ	カマド 内外面塗彩
	224	H	坏	11.4		6.2	2/3	bd	bd	優	ミガキ	ミガキ	外面塗彩
	225	H	坏	12.4			1/4	d	ad	良	ミガキ？	ミガキ	内面一部黒磨
	226	H	坏	12.8			3/4	de	de	粗		ミガキ	磨耗 内外面塗彩
	227	H	坏	12.9		5.4	2/3	de	de	良	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	228	H	坏	14.7		8.0	2/3	d	d	良	ミガキ	ミガキ	カマド 内外面塗彩
	229	H	坏	14.2			1/4	d	d	良	ミガキ	ミガキ	脚台付？
	230	H	坏	15.8			1/4	c	c	良	脚接合付近 ハケ→ミガキ	？	脚台付 磨耗
	231	H	高坏	14.4			1/6	e	e	優	ミガキ	ミガキ	内外面塗彩
	232	H	高坏				2/3	cd	d	良	ミガキ	坏　ミガキ 脚　ナデ	カマド
	233	H	高坏		13.5		2/3	d	b	良	ミガキ	ケズリ	カマド
	234	H	高坏				2/3	e	e	粗	ミガキ	ケズリ？	磨耗
	235	H	高坏				3/4	d	d	粗	ミガキ		
	236	H	高坏		10.8		2/3	d	e	優	ミガキ（タテ方向）		
	237	H	鉢	24.4	7.0	12.9	1/6	d	d	粗	ミガキ？	ミガキ？	カマド
	238	H	甕	19.0			1/2	e	cd	良	ハケ（タテ方向） 部分的にナデ	平滑化、一部ハケ	カマド
B地点3号住	239	H	壺				1/2	b	b	粗	ミガキ？	ハケ	カマド
	240	H	壺		4.0		完	d	d	粗	ナデ	ハケ	カマド
	241	H	壺				完	ad	g	良	ナデ	ハケ	ピット内

（表4－8）

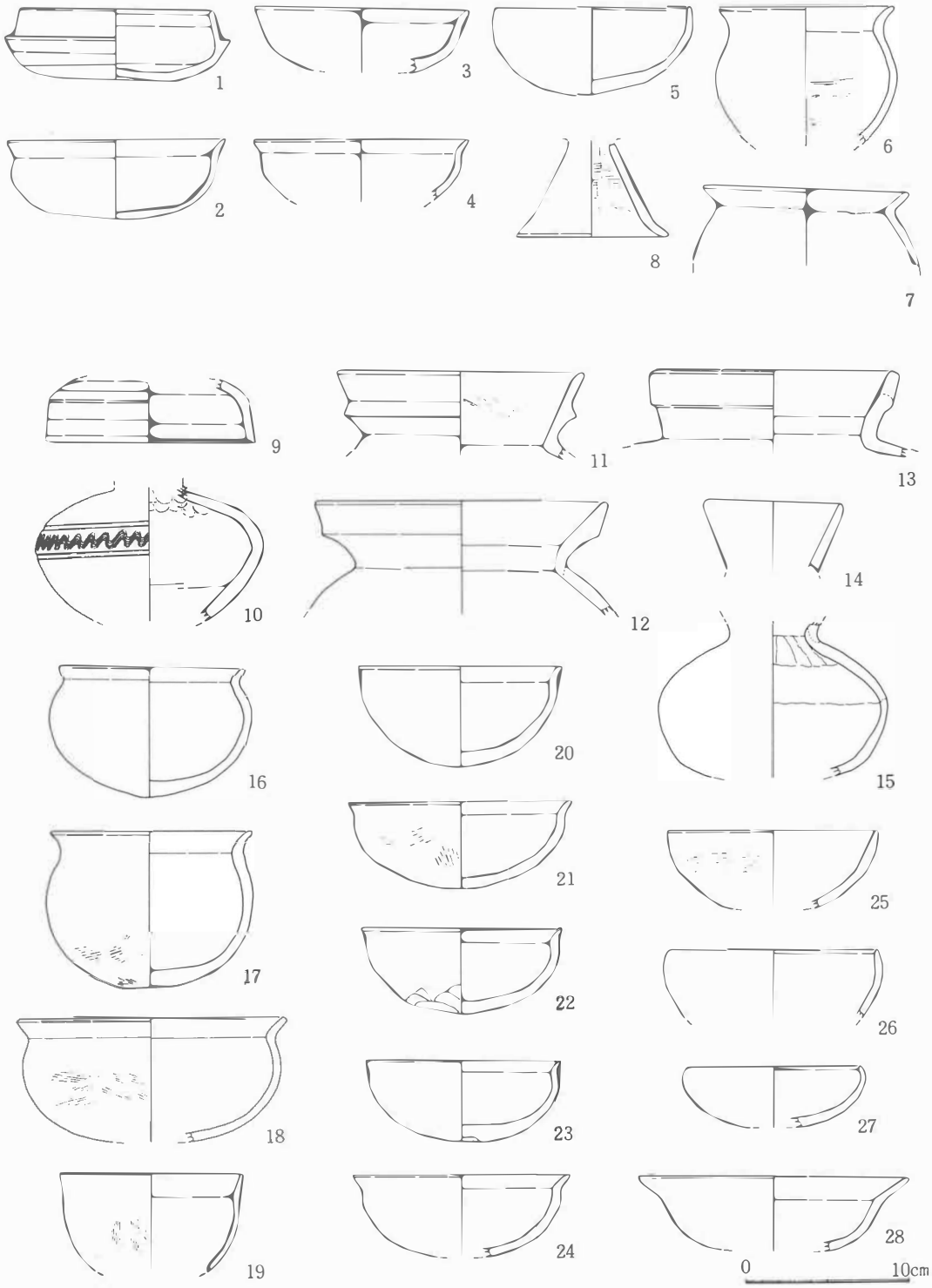


図56　B地点1号住、3号住(1)出土土器

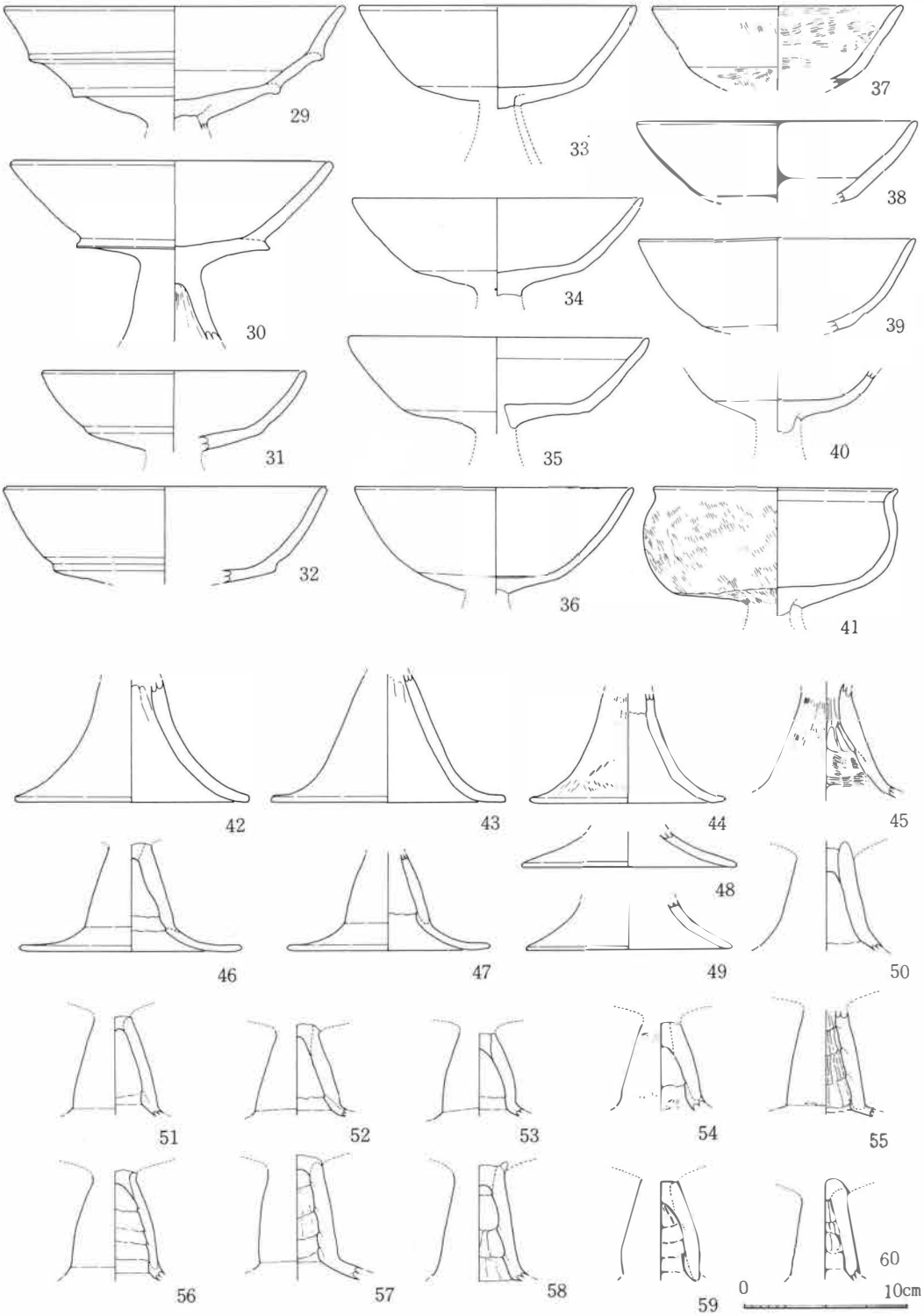


図57　B地点3号住(2)出土土器

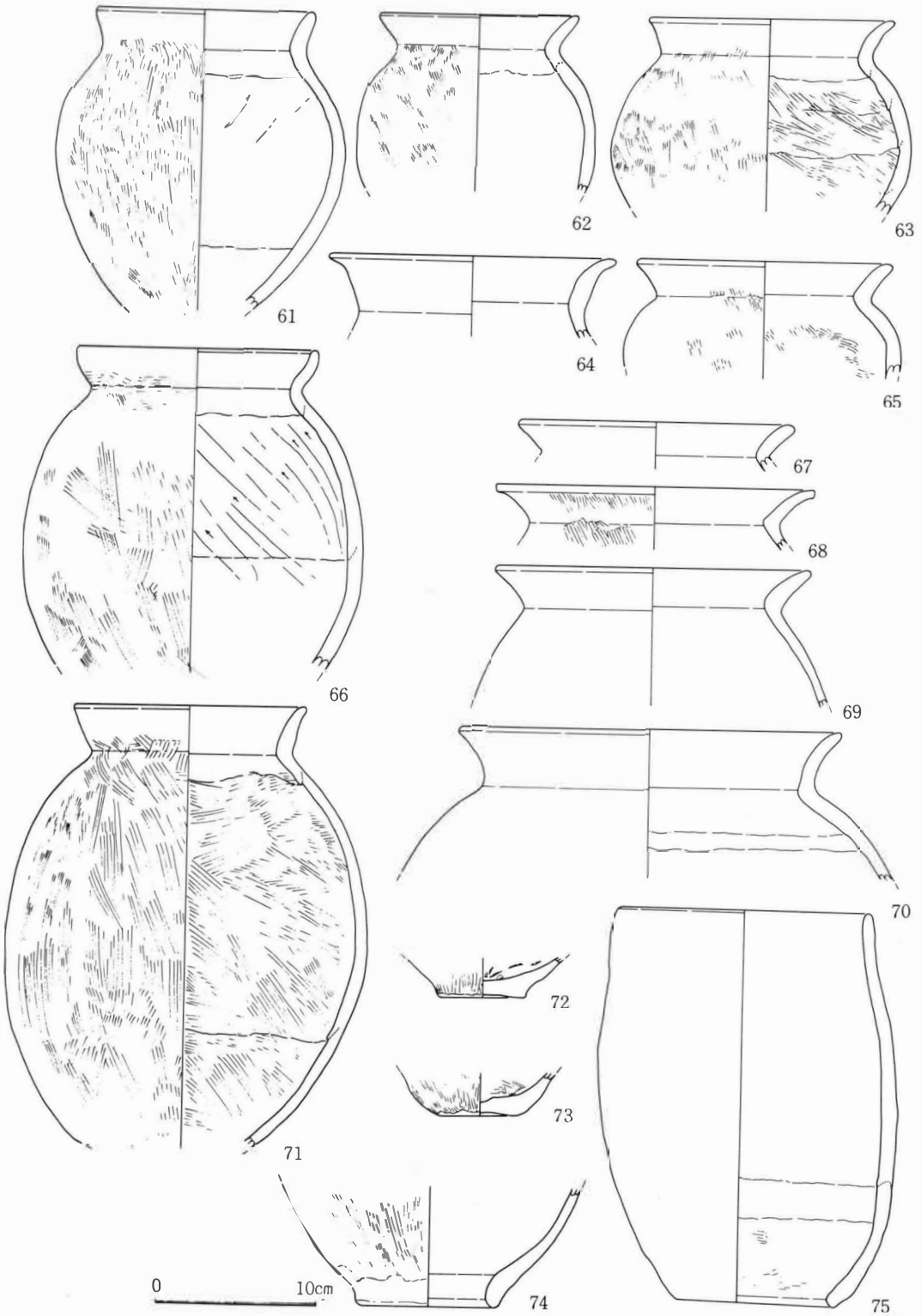


図58　B地点3号住(3)出土土器

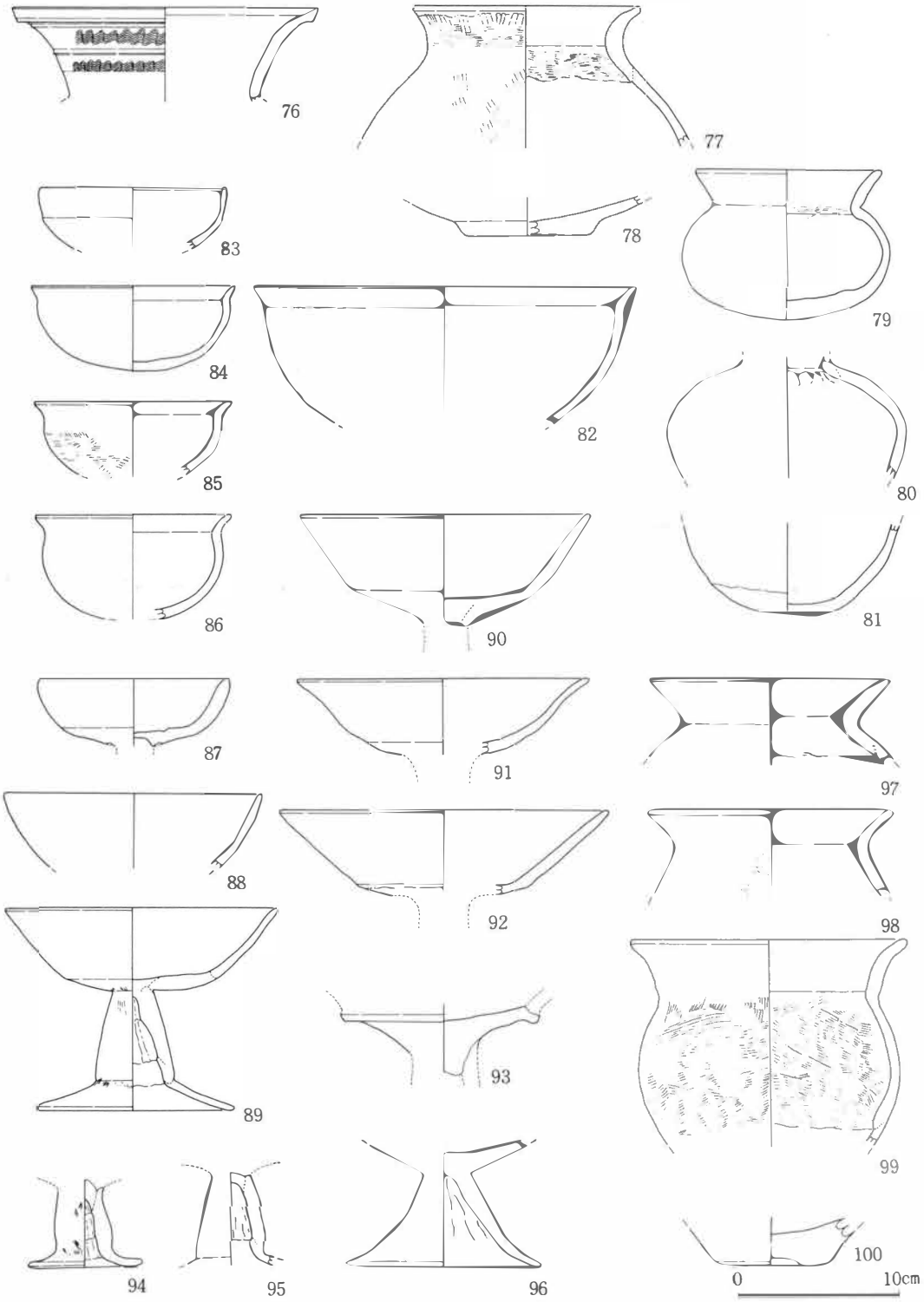
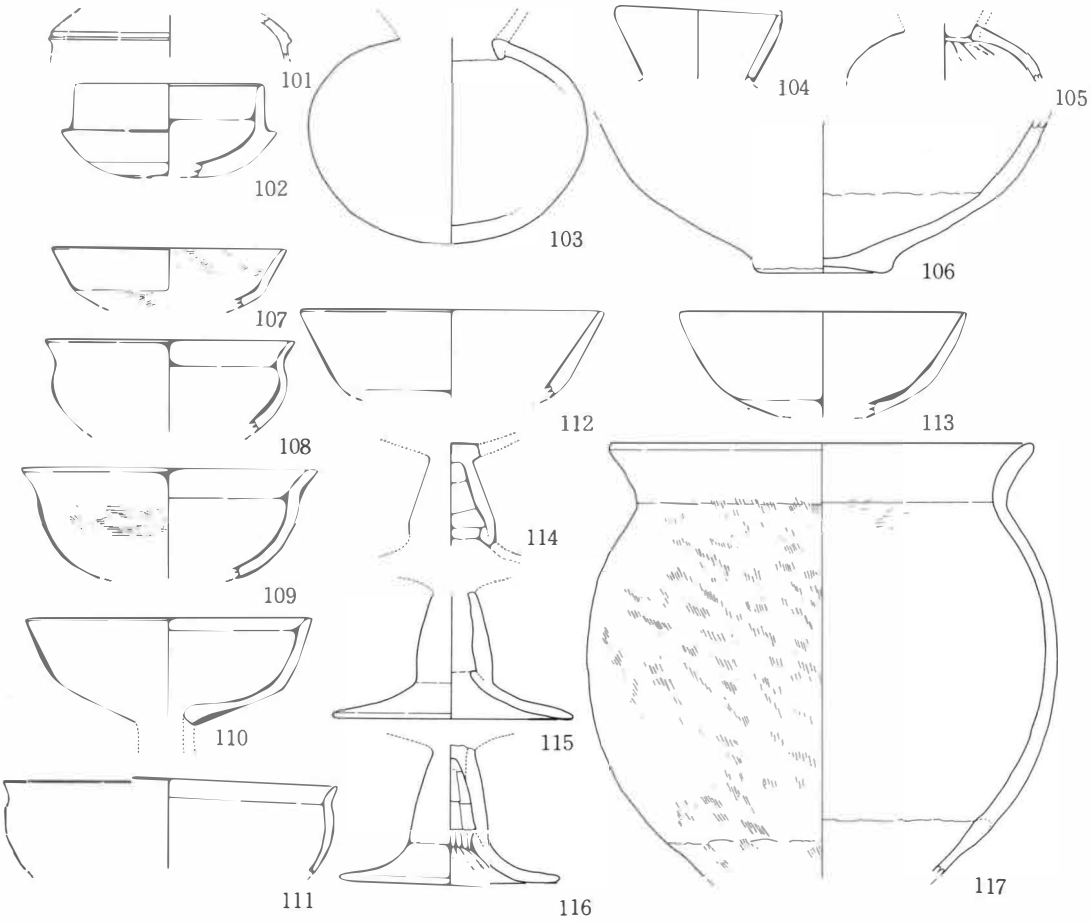


図59　B地点4号住出土土器

12号住



13号住

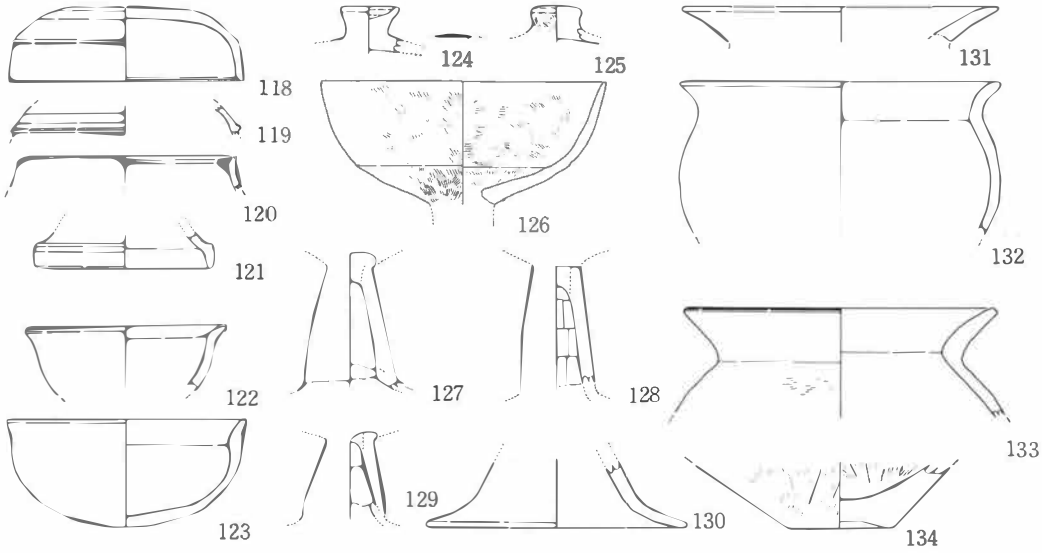


図60　B地点12号住、13号住出土土器

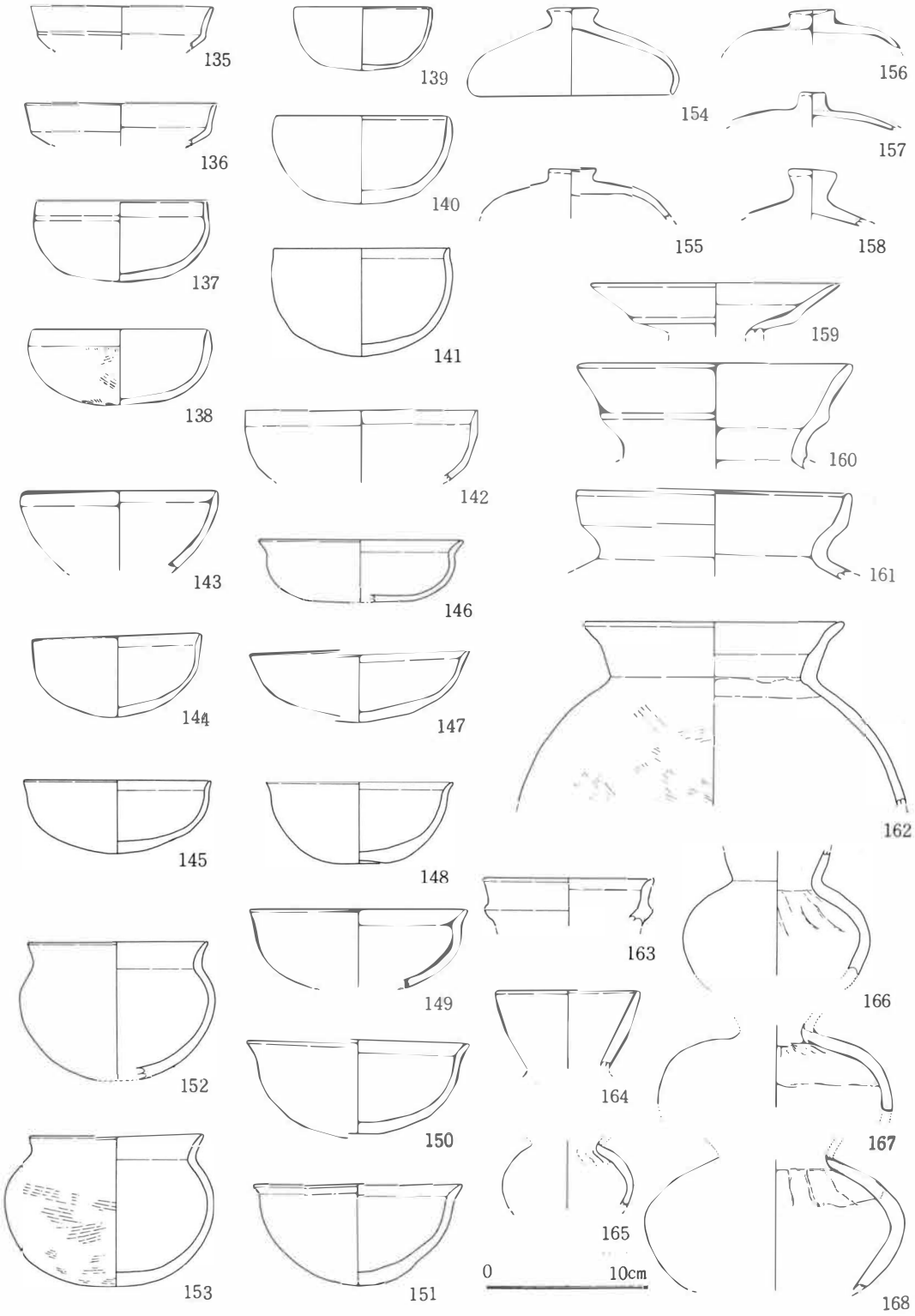


図61　B地点14号住(1)出土土器

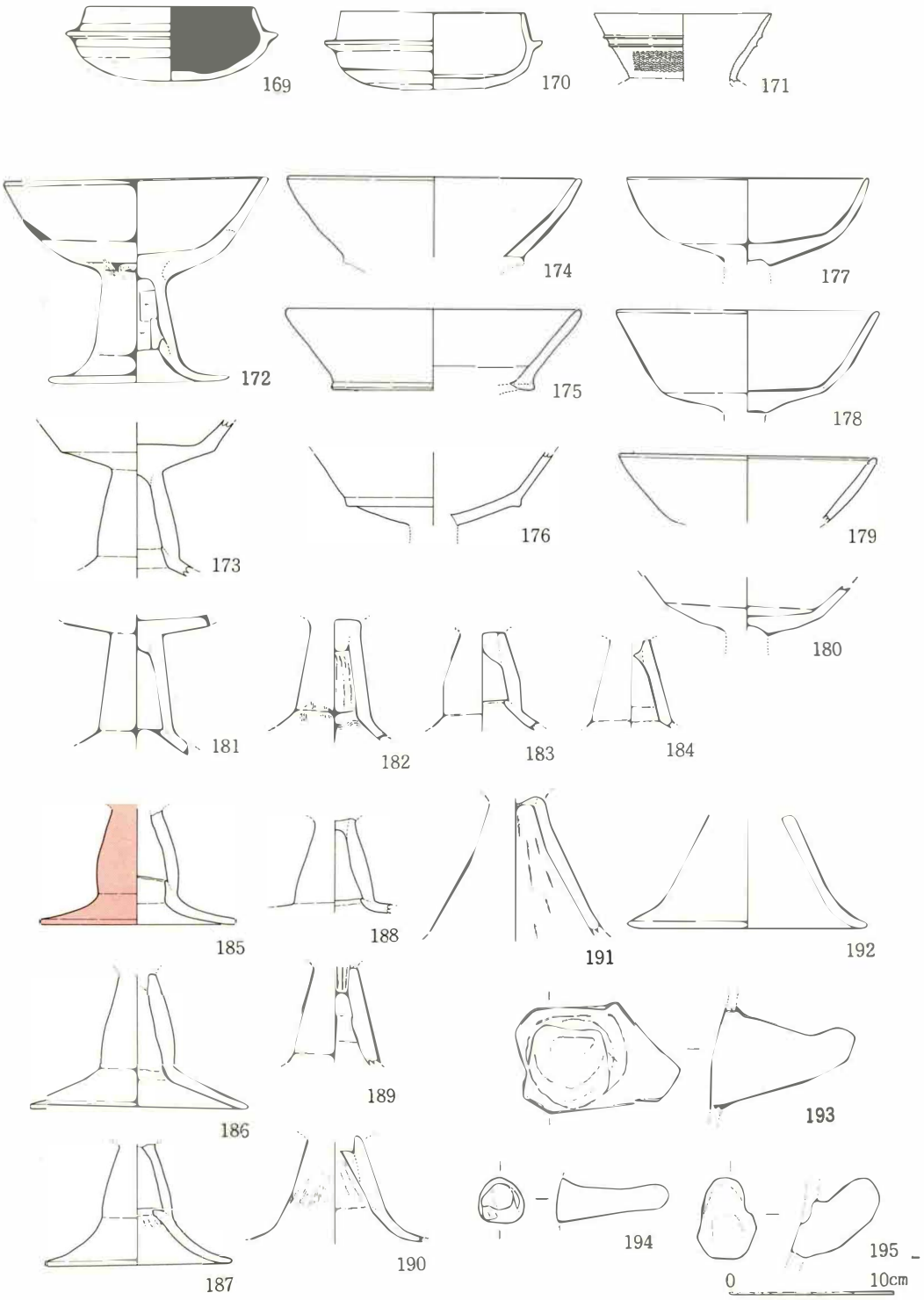
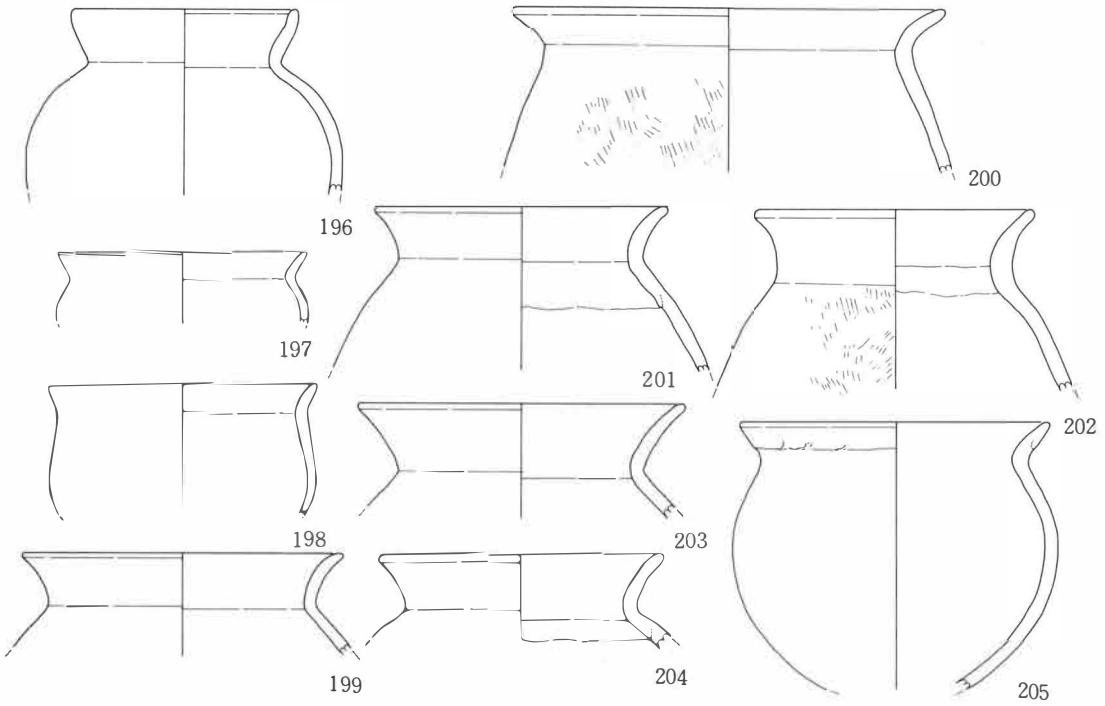
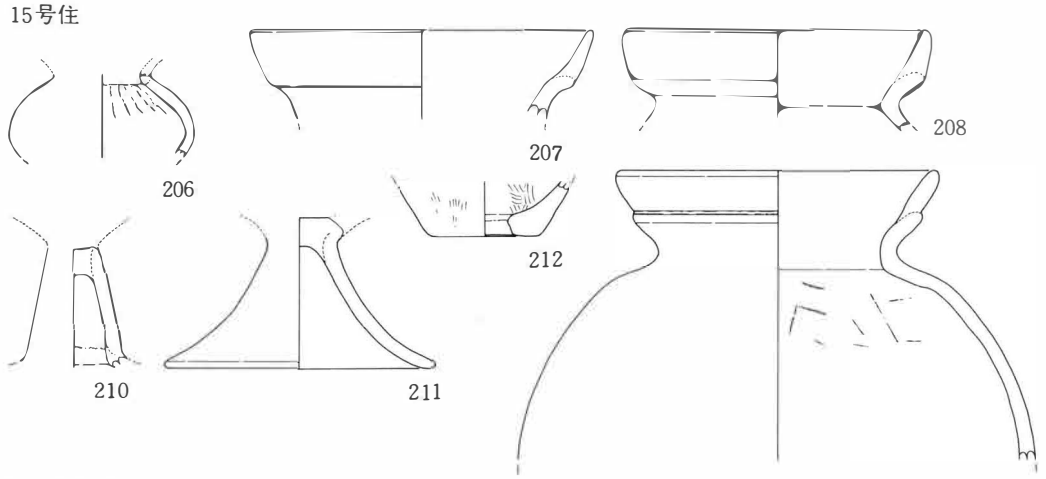


図62　B地点14号住(2)出土土器

14号住



15号住



溝・検出面

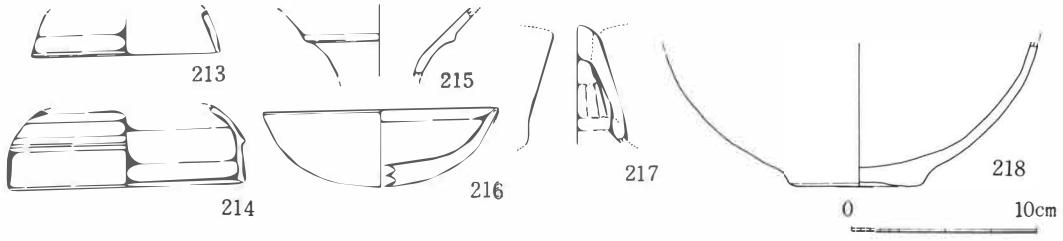
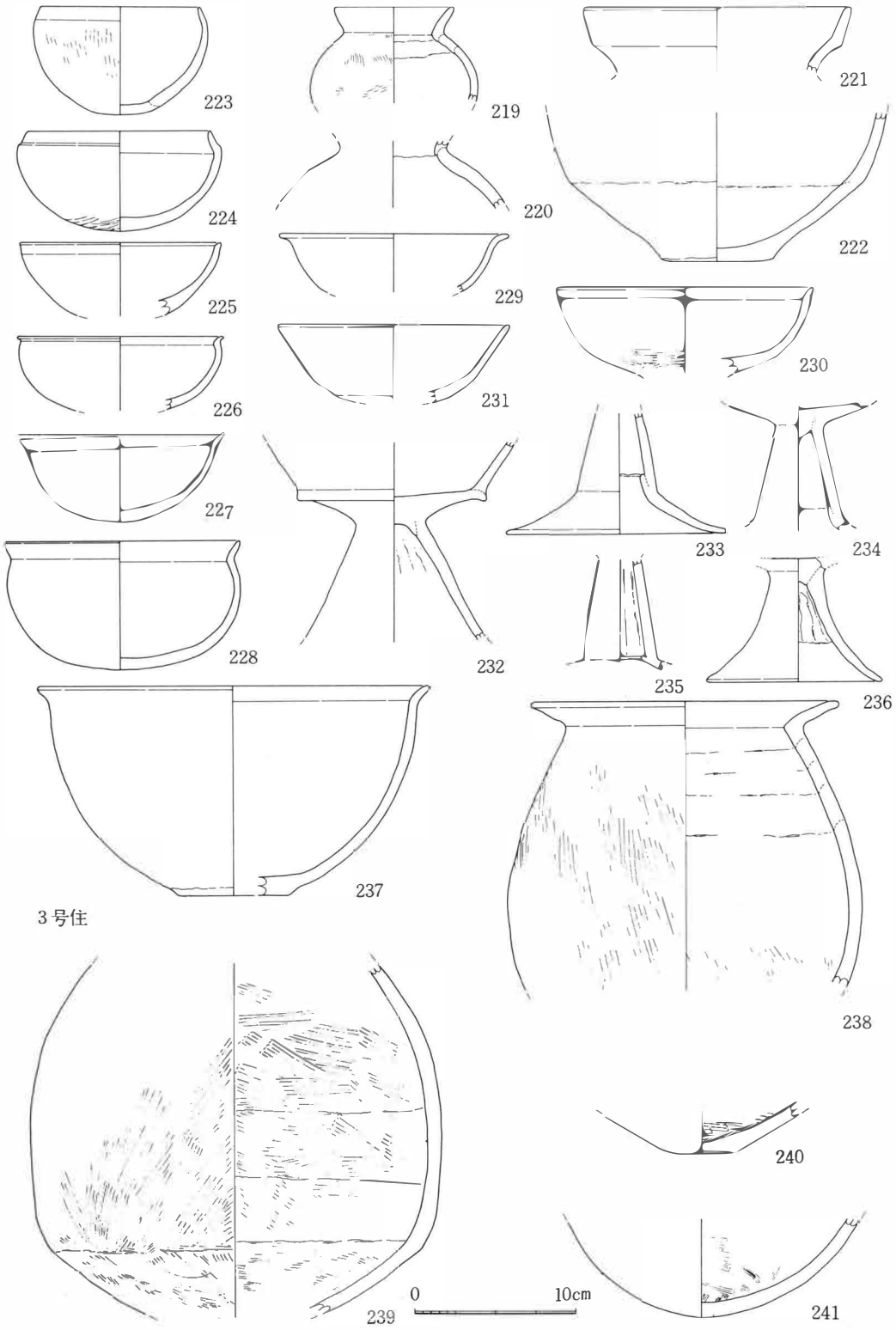


図63　B地点14号住(3)、15号住、溝、検出面出土土器

17号住



3号住

図64　B地点17号住、3号住(4)出土土器

(2)土製品（図65）

小形手捏ね土器（1～15）：ほとんどの土器で指痕が顕著にみられ、口縁部は波状を呈している。全般的に粗造品が多く、器形が判別できる例は少ない。器形がはっきりしているものでは、浅鉢形(1)、底部に穿孔が施された深鉢状の甑形(3)、平底の片口土器形(4)がある。また、無頸壺状で口縁部が傾斜したもの(5)もみられる。その他は、平底の深鉢形を呈するもの（2・6・7・8・9・10・11・12）と丸底の鉢形を呈するもの（13・14・15）に大別される。

有孔球形土製品(16)：下半部は破損しているが、球形を呈していたものと思われる。上部と中央部に1ケ所ずつ径2mmの孔が、外側から穿たれている。

土鈴(17)：径1.2 cmの球形状で、下方には長さ6mm、幅1mmの細長い孔が開けられ、中には径1～2mm程度の不整形の土玉が5個入れられており、完全な鈴の形態を呈している。また、上方には接合痕もみられることから、他の製品に付属していた可能性も考えられる。

円板（18）：径1.7 cm、厚さ5mmで表裏に線刻文が施されている。用途は不明である。

紡錘車（19～21）：断面形状が、厚みのある台形状を呈するもの(19)、薄手の台形状を呈するもの(20)、半円形球を呈するもの(21)が出土している。重量は薄手の台形状のもの（完形）で49.5 gを計る。穿孔はいずれも両側から行なわれており、整形は丁寧である。

土錘（22）：長さ4.6 cm、径1.0 cmの円筒形で、焼成は悪く、重量は2.3 gである。

(3) 石製品（図66）

紡錘車（1）：上面径2.6cm、底面径4.9cmの台形状で、表裏ともよく研磨され、上面には幾可能学様の線刻文が走る。また、使用痕も確認されていることから、実用品であった可能性が強い。

管玉（2）：よく研磨された碧玉製の管玉で、半截されている。穿孔は両側から行なわれているが、接点で若干の食い違いが生じている。古墳時代前期の遺物と思われる。

勾玉（3・4）：滑石製（3）とヒスイ製（4）の2点が出土している。ヒスイ製は滑石製より大きく厚みもあり、孔径も大きめである。穿孔はいずれも両側から行なわれている。

勾玉模造品（5～8）：滑石で作られており、実際の勾玉より大形で扁平のもの（5・6）とやや小形で厚みがあり、頭部が直線的に截断されたもの(8)がみられる。いずれの製品も孔は小さく、両側から穿孔されている。7は同じく滑石製であるが、製作途上で廃棄された未製品であると思われる。

剣形模造品（9・10）：2点出土している。扁平な板状の滑石を利用して作られており、孔は単孔（9）と双孔（10）がみられる。どちらも穿孔は両側から行なわれている。

双孔円板（11･12）：2.3 cm×2.6 cmの長円形（11）と1.5 cm×1.55 cmの円形（12）を意識した扁平な円板で、いずれにも1mmの孔が平行に、両側から開けられている。

臼玉（13～18）：検出面から4点（13～16）、17号住居址から2点（17・18）が出土している。大きさは16が径0.2 cmと極端に小さいことを除けば、他の5点は0.5 cm前後で平均した値を示

している。形は不揃いで丹念に整形されたものは少ない。すべて滑石製である。

次に古墳時代中期における土製品と石製品の出土状況を、住居址ごとに下表に整理してみた。

出土遺物＼住居址	1号住居址	3号住居址	4号住居址	12号住居址	13号住居址	14号住居址	15号住居址	17号住居址
土製品	—	○	⑪	—	℧	℧℧◎	℧℧℧◎	∣
石製品	—	99	—	—	—	—	99	9∘∞∞

○球形土製品　℧小型手捏ね土器　∣土錘　9勾玉(模造品)　∘臼玉
⑪土鈴　◎紡錘車　9勾玉　9剣形品　∞双孔円板

土製品・石製品の出土状況

この結果を基に、遺物構成の違いによって住居址の分類を試みたところ、3型に大別できた。

A型：土製品のみを出土する住居址－4号住居址、13号住居址、14号住居址

B型：土製品・石製品を出土する住居址－3号住居址、15号住居址、17号住居址

C型：いずれの製品も出土しない住居址－1号住居址、12号住居址

ここで、A型：B型住居址において出土している土製品・石製品が、従来考えられているとおり、祭祀遺物として把握されるのならば、これらの型に属する住居址では、小規模ながら何らかの祭祀が営まれていた可能性が生じてくるものと思われる。しかし、今回、各住居址での出土数も少なく、石製品の多くには小形粗造化の傾向が認められ、小形手捏ね土器については、器種の判別も困難なほど形が崩れている点が指摘されることから、これらが祭器として用いられていたかどうか、また、どのような役割を持っていたかについては、検討を重ねていく必要があろう。　（田中寿賀子）

表5　小形手捏土器・土製品観察表

図番号	器形	器高(cm)	文様	胎土	焼成	成形、調整	出土遺構	備考
1	鉢	3.0	無文	緻密、石英・長石など混入	良	手捏、底部、外面はケズリ	B地点	赤褐色
2	〃	2.5	〃	〃	良	手捏、内外面ともナデ	B地点 2号溝	赤褐色～黒褐色
3	甑	3.5	〃	〃	良	手捏、外面ケズリ、内面ナデ	B地点 14号住居	外面は黄褐色 内面は黒色
4		3.2	〃	細砂混入	良	手捏、内外面ナデ	B地点 14号住居	灰褐色
5		3.1	〃	砂粒混入	良	手捏、外面ナデ、一部ケズリ	B地点	赤褐色～黄褐色
6		(2.6)	〃	小石混入	良	手捏、外面ケズリ	B地点	赤褐色～灰褐色
7		(2.6)	〃	緻密	良	手捏、外面ケズリ	B地点 15号住居	茶褐色～黒褐色
8		(2.7)	〃	〃	良	手捏、ナデ	B地点 15号住居	灰褐色
9		(2.2)	〃	〃	良	手捏、ナデ	B地点 15号住居	黒褐色～黒色
10		2.9	〃	〃	良	手捏、ナデ	B地点	赤褐色～灰褐色
11		(2.3)	〃	〃	良	手捏、ナデ	B地点	赤褐色～黒色
12		(1.7)	〃	〃	良	手捏、	B地点	黒褐色
13		2.6	〃	〃	良	手捏、ナデ	B地点、13号住居(11号)	茶褐色～黒色
14		(2.6)	〃	〃	良	手捏、ナデ	B地点	赤褐色～黒褐色
15		(2.2)	〃	細砂混入	良	手捏、ケズリ、ナデ	B地点	赤褐色～黒色

（表5－1）

土製品（図65）

図番号	器種	器高 (cm)	幅・長さ (cm)	外径 (cm)	孔経 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土遺構	備考
16	有孔球形	(2.7)	3.6		0.4		18.5	B地点、3号住居	穴は外側から穿っている。
17	土鈴	2.4	2.4				10.5	B地点、4号住居	内部に5個の土玉あり。
18	円板			3.5		0.9	10.0		両面に綾杉状の線刻あり。
19	紡錘車			(5.8)	(1.05)	3.2	39.0	B地点、14号住居	穿孔は両面から行なわれている。½残存。
20	紡錘車			4.8	0.5	1.8	49.5	B地点、11号住居	穿孔は両面から行なわれている。完形。
21	紡錘車			(4.8)	0.6	1.7	13.6	B地点、15号住居	穿孔は両面から行なわれている。⅓残存。
22	土錘		4.6	1.0	0.35		2.3	B地点、17号住居	焼成は不良。

（表5－2）

表6　石製品観察表　（図66）

図番号	器種	外径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	石質	出土遺構	備考
1	紡錘車	4.9	0.55	1.3			32.8	滑石	B地点、検出面	幾可学様の線刻あり。表裏研磨。
2	管玉	0.8	0.2		1.6		0.8	碧玉	D地点、13号住居	両側から穿孔。
3	勾玉		0.1	0.6	2.05		2.2	滑石	B地点、5号住居	両側から穿孔。
4	勾玉		0.3 0.2	0.9	2.35		4.0	ヒスイ	B地点、3号住居	両側から穿孔。
5	勾玉		0.15	0.45	(2.4)		2.8	滑石	B地点、15号住居	両側から穿孔。
6	勾玉		0.2 0.1	0.7	(1.9)		2.5	滑石	B地点、住居址番号不明	両側から穿孔。片側に穿孔ミスあり。
7	勾玉		0.35	0.55	(3.15)		4.9	滑石	B地点、3号住居	両側から穿孔。
8	勾玉		0.1	0.6	3.0		4.0	滑石	B地点、17号住居	両側から穿孔。片側に穿孔ミスあり。
9	剣形		0.1	0.3	2.8	1.9	2.9	滑石	B地点、	両側から穿孔。
10	剣形		0.2	0.45	3.15	(1.5)	2.8	滑石	B地点、15号住居	両側から穿孔。
11	双孔円板		0.1	0.2	2.3	2.6	3.1	滑石	B地点、17号住居	両側から穿孔。
12	双孔円板		0.1	0.3	1.5	1.5	0.9	滑石	B地点、17号住居	両側から穿孔。
13	臼玉	0.5	0.15		0.25			滑石	B地点、検出面	両側から穿孔。
14	臼玉	0.55	0.15		0.35			滑石	B地点、検出面	両側から穿孔。
15	臼玉	0.5	0.1		0.3			滑石	B地点、検出面	両側から穿孔。
16	臼玉	0.2	0.1		0.2			滑石	B地点、検出面	両
17	臼玉	0.4	0.1		0.2			滑石	B地点、17号住居	両側から穿孔。
18	臼玉	0.4	0.2		0.48			滑石	B地点、17号住居	

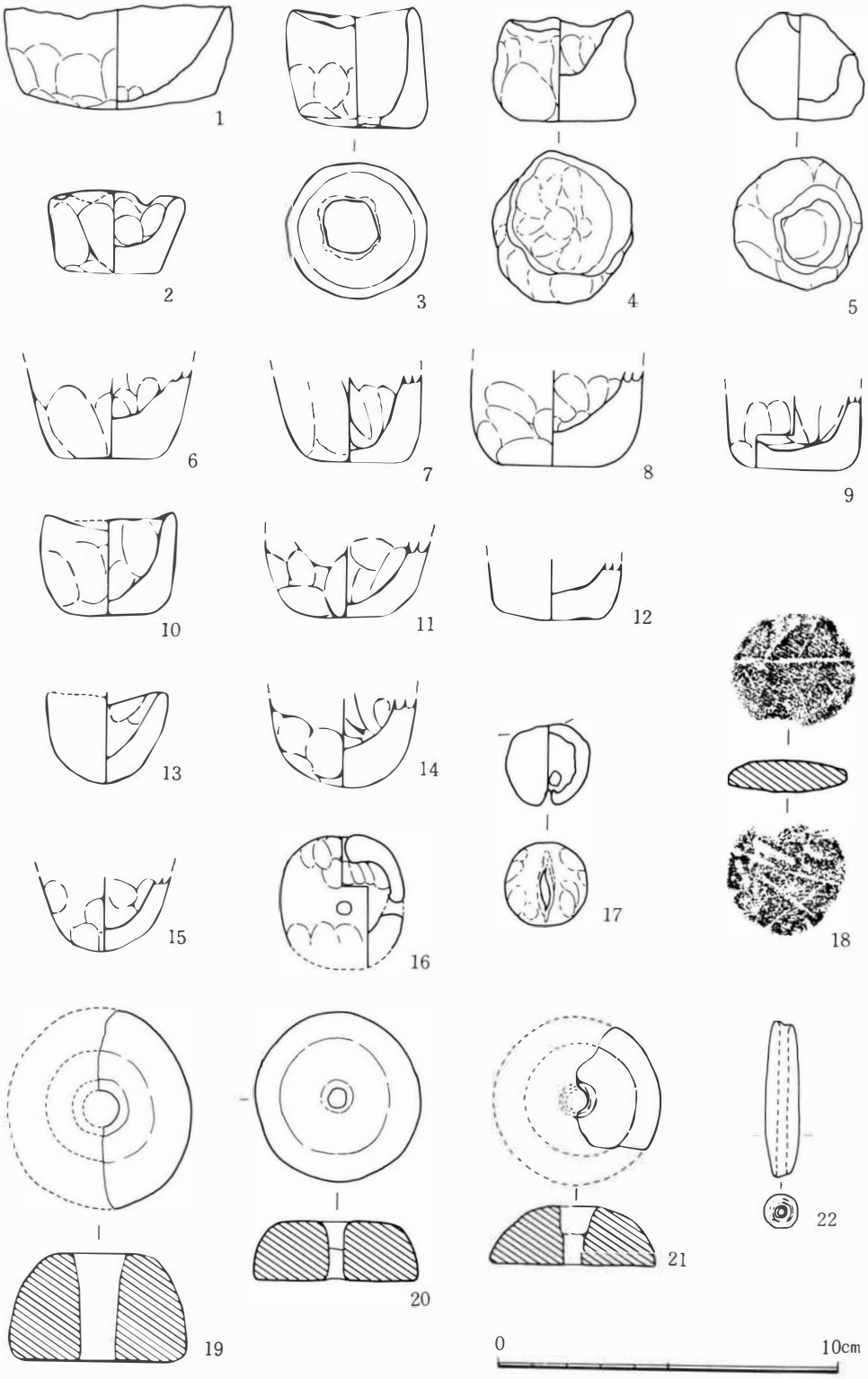


図65　B地点出土小形手捏土器土製品

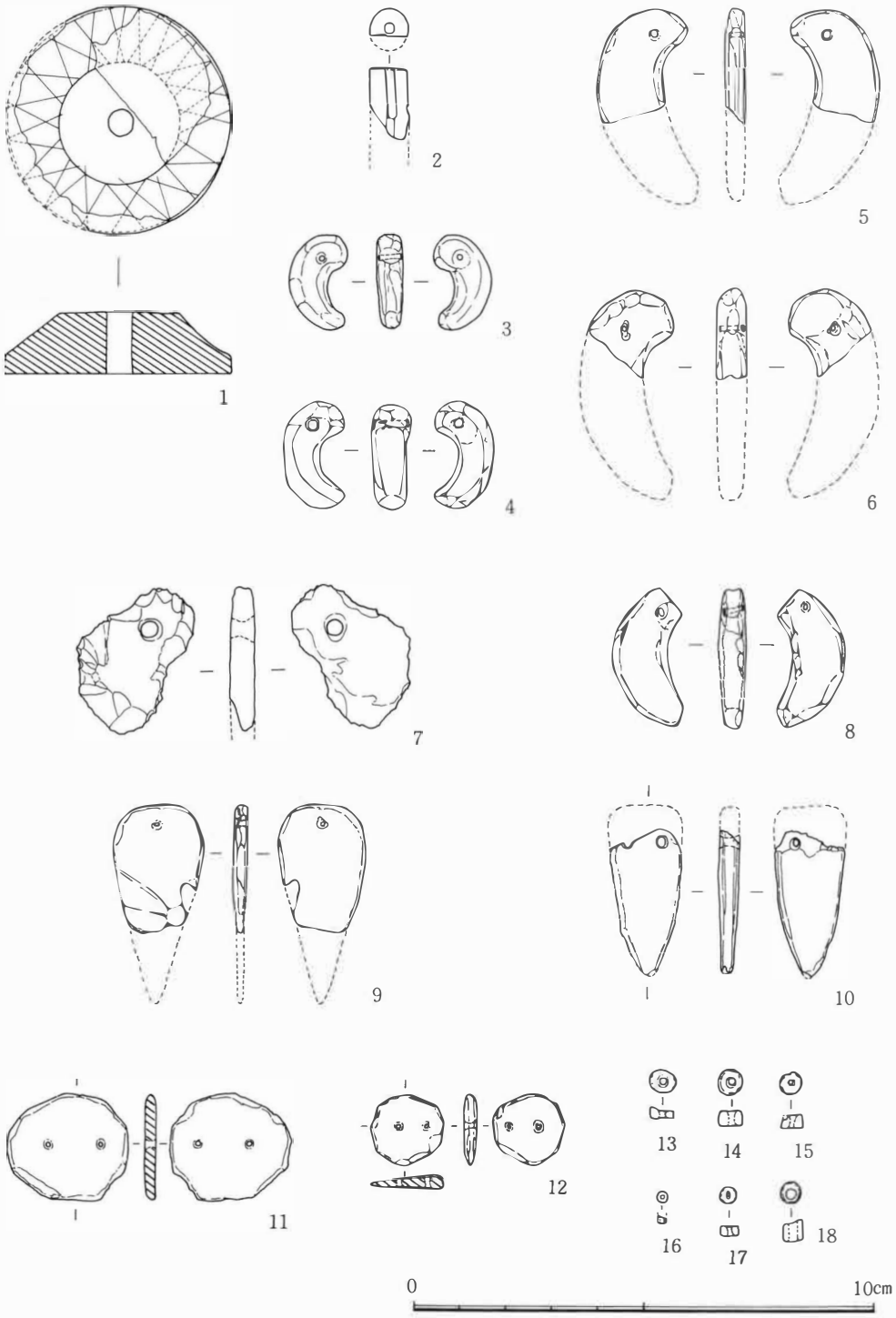


図66　B・D地点出土石製品

4　古墳時代後期

土師器

壺（4）　1点出土している。口縁部は長く、「く」の字に大きく外反している。胴部中位が大きく張り出し、扁球形を呈している。底部は中央が凹んだ平底であり、胴径に比して底径が小さいため不安定になっている。胴部内面の中位に粘土巻き上げ痕、下位に指押さえ痕が顕著である。特異な土器であり、遺構内出土器であるが、前期あるいは中期の混入品である可能性が高い。

甕（6～12）　長胴甕が主流をなしている（9～12）。底部は全て欠損し、全形は明らかでないが、肩部は全く張り出すことなく、頸部から微かな膨らみをもって長い胴部へ続く。胴部最大径は口径とほぼ同じ値を示す。器面は外面がハケ整形、内面が箆か板状工具によって平滑化がなされている。他に器面が箆削りされ、胴部が張り出さない甕（6）と従来の形態をもち、ナデ整形されたもの（7）も出土している。

坏（1～3・13・14）　3種類が出土している。1は大きな坏であり中期のD類に近似する。2・3・14は後期に一般的な形態とおもわれ、長い口縁部が体部から大きく外へ開いている。内面は黒色処理され丁寧に研磨された堅緻な土器である。13は須恵器の坏を模倣したと考えられる。

把手（5）　甑に備わる把手とおもわれる。　（横山かよ子）

表7.　古墳後期土器観察表

出土地点	図番号	種別	器種	法量（cm）口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整 外面	施文 内面	備考
B地点8号住	1	H	坏	19.3			1/4	e	c	良	ミガキ	ミガキ	カマド
	2	H	坏	14.5		6.2	3/4	d	ⓐ	優	ミガキ	ミガキ	カマド
	3	H	坏	14.8		6.3	1/2	d	ⓐ	良	ミガキ	ミガキ	
	4	H	壺	19.2	8.2	33.0	1/2	d e	b	粗	ミガキ（磨耗著しい）	ナデ　中位まき上げ痕 下位ユビ押え	
	5	H	把手				完	d	d	粗			
	6	H	甕	17.2			1/4	b d	b d	良	ケズリ（タテ方向）	ケズリ（ヨコ方向）	
	7	H	甕	14.8			2/3	e	e	粗	？	ミガキ	カマド
	8	H	甕		6.3		完	b d	d	粗	ハケ（タテ） 底際ケズリ（ヨコ） 底ケズリ	ハケ	カマド
	9	H	甕	17.6			完	e	e	粗	ハケ（タテ方向）	平滑化	カマド
	10	H	甕	17.4			完	b d	b d	良	ハケ（タテ方向）	平滑化	カマド
	11	H	甕	17.0			2/3	b d	b d	粗	ハケ（タテ方向）	平滑化	カマド
	12	H	甕	15.0			3/4	b d	d	良	ハケ（タテ方向）	平滑化	カマド
	13	H	坏	12.6			1/6	c d	c d	粗	ケズリ→ミガキ	ミガキ	B地点 6号住
	14	H	坏	12.4		5.7	1/4	e	ⓐ	良	ミガキ	ミガキ	B地点 検出面

ⓐ―黒磨　b黒　褐　c―灰褐　d―黄褐　e赤　褐

8号住

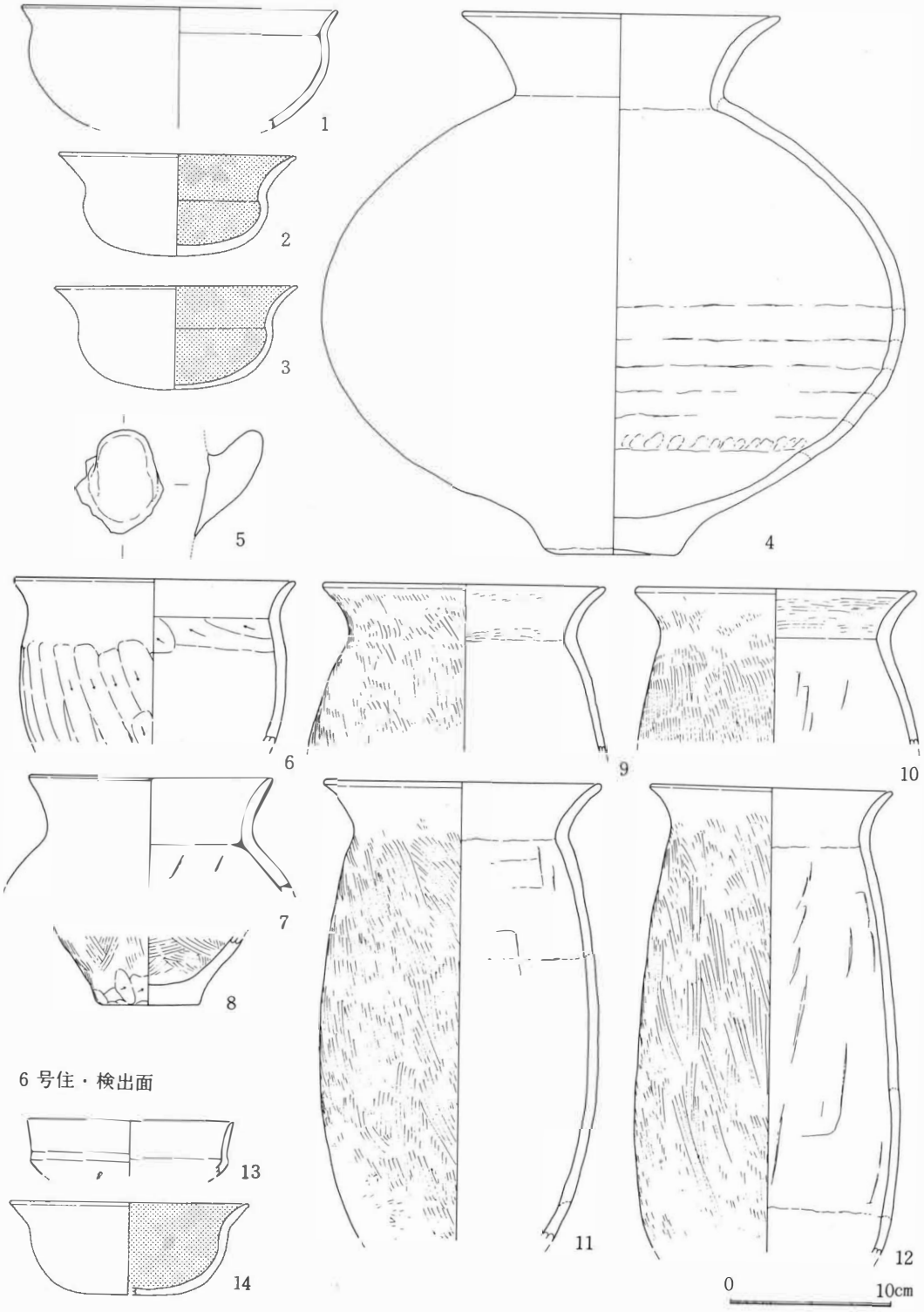


図67　B地点6号住、8号住、検出面出土土器

5　平安時代

(1)　土　器

①　土師器

坏　ロクロ未使用のものをA、ロクロ使用のものをB～Dに分類し、調整方法により以下に細分した。B～Dは、切り離し方法を回転糸切りと考えた。C_1とし106のみ回転ヘラ切りによることが確認されている。

A_1　底部静止ケズリ　（D地点集石土壙302 のみ）

A_2　内外面ミガキ　（B地点5号住31のみ）

B_1　底部全体～周縁静止ケズリ（ほとんど切り離し痕を残さない）

B_2　底部一部周縁のみ静止ケズリ（切り離し痕が残される）

C_1　底部全体～周縁回転ケズリ（ほとんど切り離し痕を残さない）

C_2　底部一部周縁のみ回転ケズリ（切り離し痕が残される）

D　回転糸切りのまま

A_1、A_2はそれぞれ1点確認されたのみである。A_1は口縁部ヨコナデの他は底部が静止ケズリされ薄く仕上げられている。A_2は内面黒色処理され、外面はケズリからミガキへと調整されており、底部は丸味をおびている。B～Dは法量と形態に、それぞれの差異をみいだすことはできないが、一般的な法量は口径が13～14 cm、器高が4 ～4.5 cmであり、106・32・44のように、とびぬけて大きいものもある。詳細は別表で示した。ほとんどの個体は内面黒色処理されるもので、黒色処理されないものは44・45・162・166・198・307である。黒色処理されないものも内面はミガキ調整が加えられる。

高台付坏　形態が須恵器の坏に近似しているものをA、椀形を呈しているものをBに分け、口縁端部の形態から以下に分類した。

A　底部から口縁部へ立ち上がりが直のもの　（306）

B_1　口縁端部が外反するもの　（200 ・272 ・273 ）

B_2　口縁端部が直に近く、内面黒色処理されないもの　（120）

高台付皿　口縁部形態から以下に分類した。

A　口縁部が、ほぼ直に立ち上がるもので、高台が角ばり内面黒色処理されないもの　（196）

B_1　口縁部まで、まっ直に伸び、高台はAより角ばらないもの　（212・213・270）

B_2　口縁端部が、外反するもの　（269・271）

甕　成形調整方法からA～Cに分類される。外面がロクロ調整のち胴中位以下をタテケズリ、内面調整がカキメ、ハケのものをA、外面頸部付近がヨコケズリ、その下はタテケズリ、内面を板状工具により平滑化しているものをB（武蔵型甕）、外面が頸部付近からタテ方向のハケ、底部はケズリ平底で、内面が板状工具により平滑化しているものをCとした。B、Cはロクロ調整を